

第2節 遺物

第1項 前期の土器（円筒下層式土器）

第3章第1節第2項では、三内丸山遺跡の円筒下層式土器の変遷と特徴について示した（第1分冊P109表3-2参照）。ここでは円筒下層式土器分布圏内での各地域の土器様相について概要を述べ、三内丸山遺跡の円筒下層式土器が円筒土器文化圏においてどのように位置づけられるかを記す。

1 各地域における円筒下層式土器の変遷と分布状況

図5-40～44には各地域において代表的と思われる一括資料を提示し、その特徴について解説した。図5-45には各型式の分布範囲を概略的に示した。ここではそれを踏まえ、各型式の地域を横断した特徴や地域的差異について俯瞰する。

（1）円筒下層式直前

本州日本海側から北海道西部には深郷田式土器が、本州太平洋側・北海道西部太平洋側から噴火湾周辺には大木2b～3式に相当する土器群が分布している。（図5-45-1）

深郷田式は胎土に繊維を含み、内面に成形時の条痕を残すことがある。底径に比べ口径が大きいバケツ形の器形と上げ底気味の平底を持ち、口縁部文様帯を持たず地文の縄の撚りが0段右撚り優勢である特徴を持つ。地文は単軸絡条体第1類、複節縄文、撚り戻し縄文がよくみられ、口縁部に結節回転文がないこと以外は直後の円筒下層a式の胴部文様に見かけ上類似性を認めることができる。北海道では駒ヶ岳g（K o - g）火山灰（約6,500年前降下）の上位から出土することが確認されている。

大木2b～3式は東北部に広く分布するが、このうち口唇端部に刻みを持つ円筒下層a式に類似した胴部の影らむ深鉢形土器は（現）白座式と呼ばれる場合がある（註1）。（現）白座式は東北地方中部から北海道西部に分布し、胴部に非結束の羽状縄文や組紐回転文を伴うことが多い。また、口縁部に結節回転文（S字状連鎖糸文含む）がみられる点は、後続する円筒下層a式との共通点でもある。岩手県北部地域の事例により、十和田中堰（T o - C u）火山灰（約5,900年前降下）の直下から降下直後までの層位の位置から出土することが確認されている（星・茅野2006）。

（2）円筒下層a式期

円筒下層a式土器は、口径の比率がやや大きいバケツ形の器形を呈する。口縁部にみられる結節回転文と、0段左撚りの縄を多用することが主な特徴である。また、底面に縄の回転圧痕がみられる場合も目立ち、隆帯は少ない。胴部文様の種類をみると、青森平野周辺から下北半島ではR L R縄文が、津軽地域から北海道西部ではR L R縄文と撚り戻し縄文が、秋田県域では単軸絡条体第1類が、上北・三八地域、岩手県北部ではL R縄文がそれぞれ多数を占めており、細かな地域差がみられる。これらは直前段階の土器型式の影響が残っている可能性がある。同様に器形の面でも、（現）白座式がみられる地域では胴部が影らむ器形が少なからず伴う。現状での分布範囲は余市町フゴッペ貝塚から八幡平市長者屋敷遺跡までである（図5-45-2）。

（3）円筒下層b₁式期

円筒下層b₁式土器は円筒下層a式土器の器形が細長く縦に伸び、口縁部の区画に隆帯の使用が増えるのが特徴である。口縁部には結節回転文が目立つが、各種絡条体等も割合を増やす傾向がある。

胴部文様は円筒下層 a 式期の特徴を引きずるが、単軸絡条体第 1 類がやや割合を増す可能性がある。また、特に日本海側で胴部に結節が帯状施文される例が目立つようである。器形の面では分布の北側地域では筒状の器形が多く、秋田・岩手県北部地域では胴部に膨らみを帯びる器形が目立つ。現状での分布範囲は石狩市上花畔 1 遺跡から八幡平市長者屋敷遺跡までである（図 5-45-2）。

（4）円筒下層 b₂式期

円筒下層 b₂式土器は、円筒下層 b₁式土器をさらに上下に延ばした器形を持つのが特徴である。より南の地域で胴部が膨らむ傾向がある。口縁部文様は地域性が顕著で、分布南側の地域では結節回転文が残り、北側の地域では絡条体の横位回転が多くなる。また、青森平野や下北地域では口縁部上端部に縄線や沈線等が付加されるものが目立つ。隆帯や区画帯は大半にみられ、円筒下層 b₁式と比べると低く細くなる傾向がある。隆帯以外の縄線による区画もみられるようになる。胴部文様は円筒下層 b₁式の特徴が残る。現状での分布範囲は北側でやや南下し、伊達市北黄金貝塚から八幡平市長者屋敷遺跡までとなる（図 5-45-3）。

（5）円筒下層 c 式期

円筒下層 c 式土器は、円筒下層 b₂式土器と比べると全体にサイズダウンした筒状の器形を呈する。円筒下層 b₂式同様、南部の地域で胴部が膨らむ傾向がある。口縁部文様は単節、複節、摺戻し等の他、南側では羽状縄文が、北側では結節縄文が特徴的にみられる。これらの口縁部地文に、縦位や鋸歯状の縄線が複合するものが本型式の基本要素である。この他、特に南側の地域では無文地に幾何学状モチーフを縄線により描くものが特徴的で、従来この類が円筒下層 c 式として捉えられていた。区画帯は一部で隆帯が残るが僅かで、代わりに 2・3 本の縄線による区画が割合を増す。胴部文様は円筒下層 b₂式の特徴を残しつつ、南側では羽状縄文が割合を増し、北側では条間の広い単軸絡条体第 1 類などがみられるようになる。現状での分布範囲は円筒下層 b₂式とほぼ同様である（図 5-45-4）。

（6）円筒下層 d₁式期

円筒下層 d₁式土器は、円筒下層 c 式土器までの筒状器形がやや寸詰まりに変化した器形が特徴的である。また、底部から胴部上半へのシルエットが丸みを帯びるものが北側に、直線的なものが南側に多い。上下が詰まった結果、口縁部文様帯の幅は極端に狭くなった。細く繊細な縄を使用するなど、全体的に丁寧な作りをするものが目立つ。内面の磨き上げも顕著である。口縁部文様は縄や絡条体の横位回転も僅かにみられるが、無文地に縄線による文様が基本である。区画帯は縄線によるものと微隆帯がみられる。微隆帯が若干後出的である可能性がある。胴部文様は南側では羽状主体から単軸絡条体 1 A 類が加わり、多軸絡条体もみられる。北側では単軸絡条体第 1 類の他、摺り戻しや自縄自巻的縄文が特徴的である。どの地域でも単軸絡条体第 1 A 類は後出的とみられる。現状での分布範囲は円筒下層 c 式と大きく変わらない（図 5-45-5）。

（7）円筒下層 d₂式期

円筒下層 d₂式土器は、円筒下層 d₁式の特徴を残しつつ、口縁部文様帯の幅がやや広くなり、使用される縄文原体の太さがやや太くなるなどの特徴がみられる。器形の特徴は円筒下層 d₁式同様北側に丸みを帯びるものが多い。胴部文様は南側で羽状と単軸絡条体第 1 A 類が多く、これらが複合するものも特徴的である。北側では単軸絡条体第 1 類に加え、単軸絡条体第 1 A 類がみられるようになり、多軸絡条体も大幅に割合を増す。また、北海道では絡条体原体の長軸に縄を一巻きするような原体を

特徴的に使用している。現状での分布範囲は、南北に広がり、北は石狩低地帯付近の小樽市手宮公園下遺跡、南は秋田市坂ノ上E遺跡である(図5-45-6)。また、さらに南では、石川県能登町の真脇遺跡から円筒下層d₂式に似た土器が出土している。

(8) 円筒下層式土器のなかでの画期

かつて三宅徹也は円筒下層a・b式を回転施文土器群、円筒下層c・d式を押し施文土器群とし、口縁部への施文手法による画期を設定した(三宅1989)。おおむね的を得ているが、今日的にいうならば円筒下層a～c式が回転施文土器群、円筒下層c～d₂式が押し施文土器群ということになる。円筒下層c式に大きな画期が認められるのである。口縁部文様だけでなく、器形の面でも円筒下層b₂式までの長大化が止まり、寸詰まりの器形へと向かうようになる。加えて、内面調整のミガキが顕著になり、全体に土器の作りが丁寧になる傾向もあらわれ始めるなど、様々な変化が円筒下層c式にはみられる。

2 円筒下層式土器文化圏内の地域的特徴

以下では円筒下層式各地域での特徴的要素について、主に区画帯の種類と胴部文様等に着目し概略を述べる。

(1) 北海道から青森県津軽北半地域

当地域は、胴部文様にR L R縄文や撚り戻し縄文に加え、下層式後半では、条間の広い単軸絡条体第1類や自縄自巻的縄文など他にはない希有な文様が多く、縄文の複雑さに地域の特徴がみられる。ただし、円筒下層a式の初期では(現)白座式の分布範囲でL R縄文を多用する傾向がある。また、下地調整として貝殻条痕文がよくみられ、円筒下層式後半には外面の文様要素としても利用されている。

(2) 青森県津軽南半地域から秋田県北部地域

岩木山の南側から秋田県北部地域では、胴部文様に単軸絡条体第1類・R L R縄文が多く用いられる。当地域は、茂屋下平岱遺跡に見られるような隆帯と指頭押圧を複数段組み合わせた区画帯が特徴的である。茂屋下岱遺跡の土器に見られる区画帯は、隆帯2段の間と上下に加え、上面にも連続した指頭押圧が加えられる。円筒下層b₂式期には隆帯部分が消え、指頭押圧が爪状刺突に置換され、円筒下層c式では刺突が縄線に置換され、円筒下層d₁式までその痕跡が残る。

(3) 青森平野から下北地域

三内丸山遺跡を含む青森平野では、胴部文様にR L R縄文と単軸絡条体第1類が多く、特にR L R縄文を斜めに回転施文することで条の方向を縦にすることが好まれる。下北地域でもR L R縄文を多用するが、円筒下層式前半では横回転で斜行することが目立つ。円筒下層式後半ではおおむね北海道や津軽地域北半と類似した特徴をもつようである。

(4) 青森県三八上北地域から岩手県北部地域

本地域は円筒下層式の外縁部にあたるためか、特に三八地域以南では円筒下層式を通じた文様の特徴がみられない。強いて挙げれば円筒下層式前半期にはL R縄文の多用や端部結節の使用が目立つなどの特徴があり、円筒下層式後半期は羽状縄文と単軸絡条体第1 A類に特徴がある。隣接土器型式との接触が地域性が原因と見られる。上北地域では青森平野や下北地域との関係があるためそちらの地域にやや近い状況がみられる。

3 円筒下層式土器の成立について

(1) 円筒下層 a 式土器及び大木 2・3 式土器と十和田中振火山灰の層位的先後関係

松山力ら(松山・木村1997)や星雅之ら(星・茅野2006)が検討したように、大木 2a 式は中振火山灰の下位、大木 2b 式は下位から降下中の可能性が高く、大木 3 式は上位である可能性が高い。円筒下層 a 式は確実に上位である。深郷田式土器については下位の可能性があるが確実な事例を欠く。

(2) 大木 2・3 式土器と円筒下層 a 式土器の共伴事例

現状では確実な共伴事例は無い。図 5-43-3 を円筒下層 a 式最古段階と捉えれば大日向Ⅱ遺跡・畑内遺跡・八木 A 遺跡などで(現)白座式と結節回転文が無い縄線文主体の円筒下層 a 式最古段階が共伴する事例が複数見られる。

(3) 深郷田式土器と大木式土器の並行関係

これら 2 つの土器型式の確実な共伴例は現段階で確認されておらず、円筒下層 a 式土器とこれらの確実な共伴例も無い。ただし、日本海側では同じ遺跡内から大木 2b 式・深郷田式に類似する土器・円筒下層 a 式が出土する例が複数例ある(図 5-44-1・2)。

(4) 円筒下層 a 式土器の成立要因

円筒下層 a 式土器の成立については、大木 2 式の関与が以前から指摘され、直前型式が深郷田式土器であることも認められていた。また、北海道では縄線文などに中野式との類似点も見られる。さらに、十和田中振火山灰の降下が円筒下層式土器文化の成立に重要な影響を与えた可能性も指摘されている。これらを総合すると、円筒下層 a 式土器は単一の土器型式から派生したとは考えられず、複数の土器型式の要素が集合して成立したと考えられる。しかも成立時点で明らかな地域性が認められることから、直前型式の特徴を葆ちつつ、広範囲に共通した特徴が共有された土器型式であることがいえる。ここではその具体的なプロセスに言及できないが、環境変動に影響された結果、生み出された土器文化として評価し、今後研究を進める必要がある。(茅野)

(註 1) 白座式とは、青森県階上町白座遺跡出土第 2 群土器について、円筒下層 a 式土器を土台に大木 2 a 式土器の影響を強く受けたもので両者の折衷的な土器であるとして設定された。しかし、その後の研究経過においてある特定の土器(図 5-43 の土器等)をもって白座式を代表させる記述が主流となり、当初の設定内容とのずれが生じている。(現)白座式とは、現在一般的に考えられる白座式を示す名称として仮称されたものである。(星・茅野2006)

(註 2) 北海道渡島半島の縄文時代前期中葉の土器型式

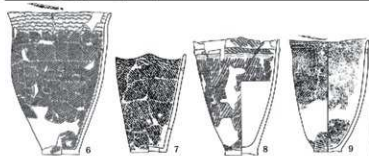
胸ヶ岳 g 火山灰 (約 6500 年前噴出)



1-2: 森川 3 遺跡 (深田式か)
口縁部文様帯の無いハツケツ器形
0 段も磨りた縄を多用
内面に朱灰

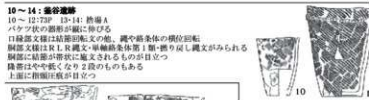
3-5: 八木 A 遺跡 VI 層
3 は口縁部に縄線文が見られる戦川式(註2)か
4-5 は胴部に粗紐状文がみられる
5 は尖末 2¹ ~ 3 式

下層式 前期



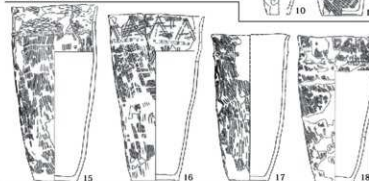
6-9: 八木 A 遺跡
6-7-9: VI 上層 8: V 層
6-7 は口縁部に結節状粗文がみられる
8 のように太く高い縄帯が少量みられる
胴部文様は口縁部の縄 (L 1 縄文と R 1 縄文が結核)
底面に縄文施文目立つ
器形は磨りた縄部から、ハツケツ状へ変化
9 は縄線文がみられる 戦川式か

下層 a 式



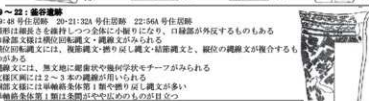
10-14: 森谷遺跡
10-12: 73P 13-14: 熱帯 A
ハツケツ状の器形が顕に存する
口縁部文様は結節状粗文の他、縄や紐条体の横位粗文
胴部文様は L 1 縄文・半輪筋条体第 1 期・磨り戻し縄文がみられる
胴部に結節が帯状に施文されるものが見立つ
器形はやや低くなり 2 段のものもある
上面に粗紐状横が目立つ

下層 b1 式



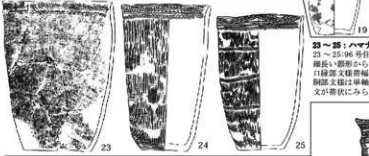
15-18: 森谷遺跡
10-14 号の器形
器形はさらに狭び狭状となり、口縁部文様帯幅が最大となる
口縁部には半輪筋条体第 1 期・磨り戻しなどの他、縄が横位粗文される
口縁部地文の上に沈線や縄線や磨文などが描かれる
器形は低くなり、縄による区画に磨換されはじめる
胴部文様は半輪筋条体第 1 期・磨り戻し縄文・L 1 縄文がみられる

下層 b2 式



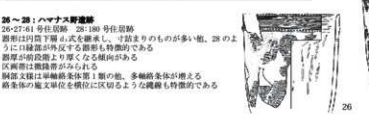
19-22: 森谷遺跡
19-21: 22A 号住居跡 22: 56A 号住居跡
器形は縁付きを維持しつつ全体に小振りになり、口縁部が外反するものもある
口縁部文様は横位粗文・縄線文がみられる
横位粗文には、複層縄文・磨り戻し縄文・結節粗文と、縦位の縄線文が複合するものがある
縄線文には、無文地に磨換状や幾何学状モチーフがみられる
支脚区画には 2 ~ 3 本の縄線が用いられる
胴部文様には半輪筋条体第 1 期や磨り戻し縄文が多い
半輪筋条体第 1 期は区画がやや広めのもが目立つ

下層 c 式



23-25: ハマナス野遺跡
23-25: 96 号住居跡
細長い器形から 2 段までの器形へと変化した、胴部下平が丸みを帯びる
口縁部文様帯幅が極端に狭くなり、区画帯には縄線が用いられる
胴部文様は半輪筋条体第 1 期・磨り戻し縄文・口縁部磨換の縄文などの他に、羽状縄文が帯状にみられるものが見立つ

下層 d1 式



26-28: ハマナス野遺跡
26-27: 81 号住居跡 28: 100 号住居跡
器形は円筒下層 d1 式を継承し、寸詰まりのものが多いが、28 のように口縁部が外反する器形も特徴的である
器形が前後位より厚くなる傾向がある
区画帯は粗縄帯がみられる
胴部文様は半輪筋条体第 1 期の他、多輪筋条体が増える
筋条体の施文単位を横位に区切るような縄線も特徴的である

下層 d2 式

図 5-40 北海道地域の円筒下層式土器 (S=1/10)



図5-41 青森県日本海側の円筒下層式土器 (S=1/10)

下北地域

上北地域

十和田中樞火山灰 (約 5900 年前噴出)

下層式直前

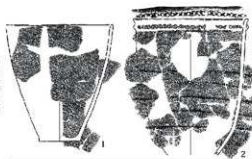


図 5-42 青森県上北・下北地域の円筒下層式土器 (S=1/10)



図 5-43 岩手県北部・青森県三八地域の円筒下層式土器 (S=1/10)

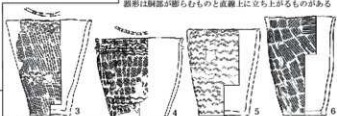
下層式直筒



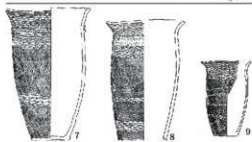
1・2: 三ヶ背線遺跡
1: 深部形式が、0段rの単軸絡糸体第1期
2: 大木25式が、口縁直下無文 隆帯が延長羽状縄文
これらが共存するかどうかは不明

3~6: 横穴日遺跡 S104 Ⅱ期

口縁部は羽状回転文土物
口唇は上部に縄や縄みなどの装飾が一定量入る
太く高い隆帯が少量伴い、上面に削突や縄の押圧がみられる
胴部文様は0段左巻りの縄(単軸絡糸体第1期R多数とR.L.Ⅱ縄文)
底面に縄文施文目立つ
胴部は胴部が膨らむものと直線上に立ち上がるものがある



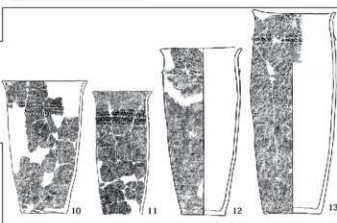
下層a式



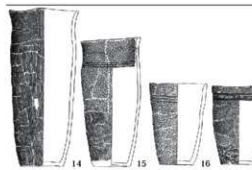
7~9: 上山1遺跡 Ⅱ
胴部が膨らむ 胴部が縦に伸び、口縁部が外反する
口縁部は結節回転文の他、縄縞・縄や絡糸体の回転
胴部文様は単軸絡糸体第1期が多く、R.L.Ⅱ縄文もみられる
胴部には羽状文が母状に施文されるものが見立つ
隆帯は依然高く太い 上面に削突や縄・沈積、2段になるものもある
爪状削突が3段になるものもみられる

下層b1式

10-11: 深沢遺跡 遺構外 12-13: はりま遺跡 S1218
胴部は筒状に伸び胴部は膨らむ 口縁部文様帯幅は最大になる
口縁部にはよりま細線跡では結節回転文多数、深沢遺跡では羽状縄文が多い
隆帯は低下傾向だが、内筒下層b1式を継承している
胴部文様は単軸絡糸体第1期が多い



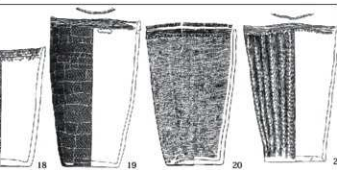
下層b2式



14~17: 池内遺跡 S1228
胴部は同筒下層b2式の流れでやや膨らみ帯びるものが多いが全体的に小型化
口縁部は縄回転(L.R.Ⅱ縄文・羽状縄文等)の他、無文地に縄縞の縦線がみられるものもある
縦何れやチーフも遺跡内では出していない
文様区画には2-3本の縄縞の組、隆帯もごく僅かに残る
胴部文様は単軸絡糸体第1期や羽状縄文が目立つ

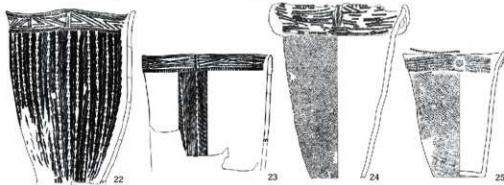
下層c式

18~21: 池内遺跡 18-19/SK17 20-21/SK105
寸法より筒形で、直線的に立ち上がる胴部が多い
口縁部文様帯幅が狭量化、区画帯には微隆帯を使用するものが多い
胴部文様は羽状縄文・単軸絡糸体第1期が多く、単軸絡糸体第1A期や多軸絡糸体もみられる
後2者はやや後出的の可能性はある



下層d1式

22-23: 坂ノ上E遺跡 1号土坑
24-25: 上山1遺跡 S1223
寸法よりの筒形で、直線的に立ち上がる胴部が膨らむものもある
胴部が前後段より厚くなる傾向がある
口縁部文様帯は幅広く、区画帯は微隆帯や段差がある
縦位の隆帯やボタン状突起・棒状把手などもみられる
胴部文様は単軸絡糸体第1A期・羽状縄文・縄縞文が多い



下層d2式

図5-44 秋田県域の円筒下層式土器(S=1/10)

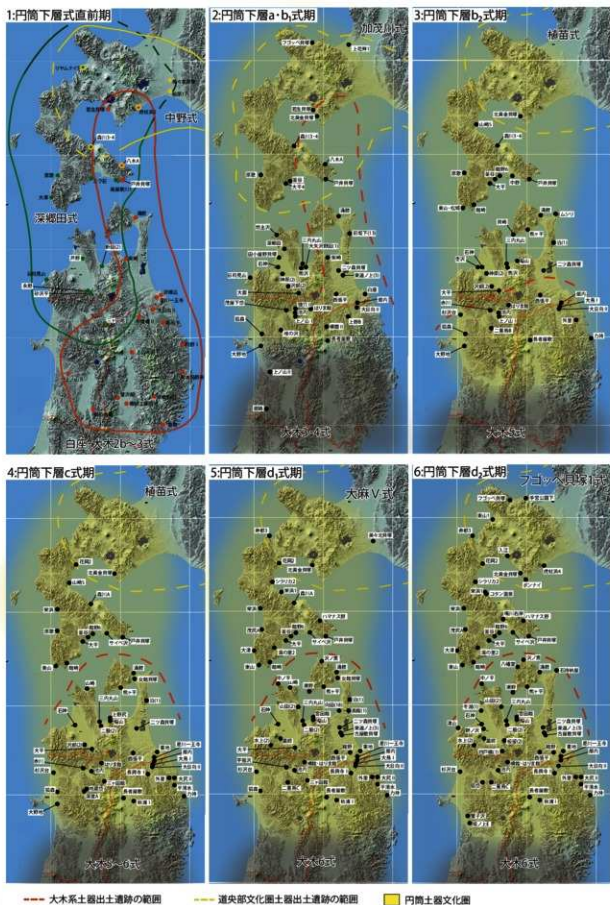


図 5-45 円筒下層式各時期の主要遺跡と土器の分布様相図

第2項 中期の土器（円筒上層式土器と大木系土器）

1 円筒上層式土器における隆帯の文様変遷

三内丸山遺跡における円筒上層式土器の変遷は、第3章に示したとおりで、盛土などからは江坂輝也や村越潔、三宅徹也による土器編年案（江坂1970、村越1974、三宅1981・1989）にそった序列で出土している。円筒上層式土器の分類の指標を改めて記すと、

円筒上層 a 式土器—縦位・横位、鋸歯状の縄文原体押印文（両者の違いにより上層 a₁式と a₂式に分類される）

円筒上層 b 式土器—馬蹄形縄文原体押印文

円筒上層 c 式土器—棒状工具による刺突文

円筒上層 d 式土器—口縁部まで地文縄文を施文後、隆帯による胸骨文など

円筒上層 e 式土器—円筒上層 d 式土器の隆帯による胸骨文などが沈線化となり、出土状況からみても、型式学的な変遷としても首肯できる。

そのほか、第3章第1節では口唇端部や波頂部への粘土紐貼付などの円筒上層式土器にみられる諸属性に着目し、変遷を表として示した。

他方、円筒上層式土器の文様の大きな特徴は口縁部文様帯の隆帯であり、その移り変わりを把握することは重要である。隆帯の特徴については、江坂や村越による先駆的な論考以降、大島直行や三宅徹也が詳しく述べている。大島は、江坂や村越が提示した指標として文様を批判的に再検討し、隆帯のモチーフを重視して波頂部下の縦位隆帯の本数や、文様帯下端を巡る横位隆帯の本数、波頂部以外への隆帯の貼付、口唇端部への隆帯の貼付などの変化により、4段階を示した（大島1976）。三宅徹也は指標となる文様による型式分類をもとに、円筒上層 b 式土器では口縁部文様帯全体に隆帯が巡り、円筒上層 c 式ではさらに複雑化するとともに縦位隆帯での4区画が減ること、円筒上層 d 式では円筒上層 c 式に比べ隆帯のモチーフが簡略化し、4区画がさらに減ることなどを挙げた（三宅1978）。着眼点は異なるものの、指標となる文様とは別に、円筒上層式土器の変化に隆帯の出現、発達・盛行、簡素化があることは先学が示してきたとおりである。

図5-46は、三内丸山遺跡の南北の盛土から出土した円筒上層式土器各式の口縁部文様帯を模式図化した。円筒上層 a₁式土器は小さな突起下に1条程度の縦位隆帯が付く例が多い（1~7）。波頂部の突起は小さく、台形（2・6）・山形（3・5）・二叉（1・7）などの形状がある。円筒上層 a₂式土器は、大きく突き出した波頂部下の縦位隆帯は1条ないし2条（9~15）で、2条では直線や X・V・Y・U・8 字状などがある。波頂部は二叉状となるものが多い。円筒上層 b 式土器は、波頂部下の縦位隆帯は、直線（18・19・24・25・27）、間隔の空いた X 字（20~22）、逆 U 字状（28・30）などがあり、隆帯の脇にさらに弧状の隆帯が加わる例（19・23・27・28）もある。波頂部は台形や頂部が緩く湾曲した形状となる。また、波頂部下には W・M 字の波状隆帯が付いたり、口唇端部の突起の屈曲部に弧状の隆帯が付き、さらに突起部以外の口唇部全体に波状隆帯が巡る例（28~30）が増える。また、突起部以外に隆帯がない例（18~23）と、弧状や直線的な隆帯の広がる例があり（24~30）、文様帯上部または下部からの弧状に隆帯が貼り付けられる場合が多い。円筒上層 c 式土器では、波頂部の形状、突起下の縦位隆帯は円筒上層 b 式土器と同様である。また、三宅の指摘のとおり、縦位の隆帯がないもの（42~48）が多くなり、三角形のモチーフ（45・46）や大振りな 8 字状（44・47）、弧状

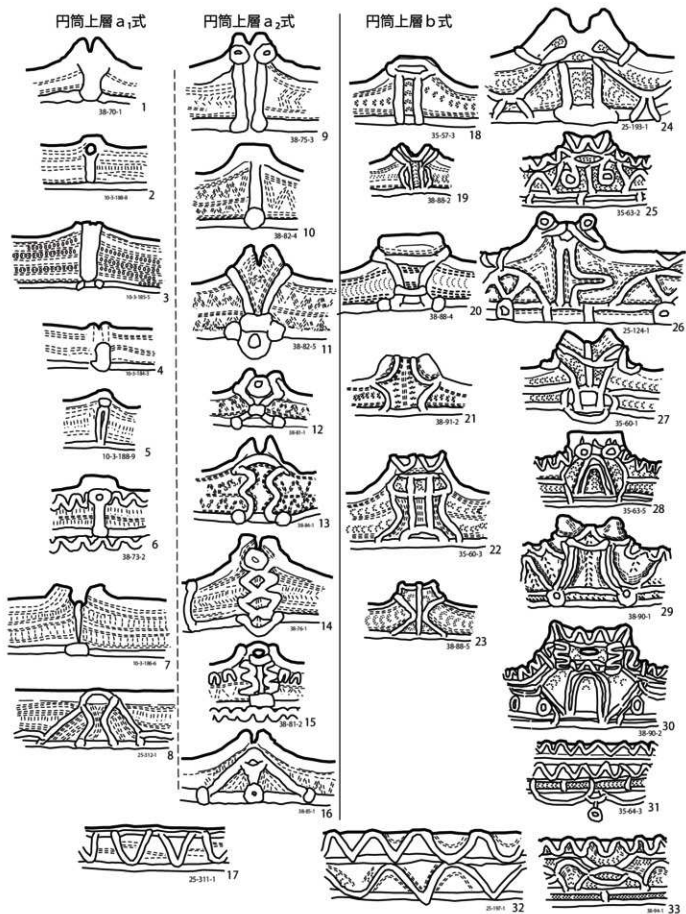
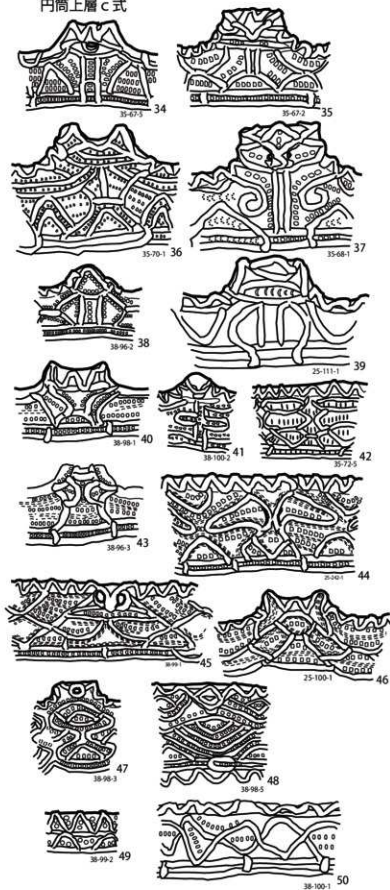
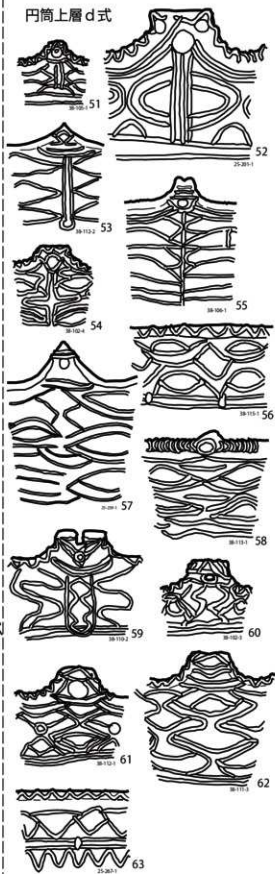


図 5-46-1 円筒上層式型式変遷 (円筒上層 a₁ 式~b 式)

円筒上層c式



円筒上層d式



※模式図右下の番号は「掲載報告書番号—図版番号」を表す

図5-46-2 円筒上層式型式変遷(円筒上層c・d式)

の隆帯を上下に交互に組み合わせた例(48)などがある。突起部以外の隆帯は円筒上層b式土器と同様であるが、中には文様帯の上下双方から独立あるいは連結して施されるもの(35・36・44・46)があり、文様帯全体が繁縷化する。さらに弧線の中央対になるように短い弧状隆帯が付加されるもの(42・48)があり、円筒上層d式土器の胸骨文の原形となる。円筒上層d式土器では、隆帯が前段階までに比べ細くなり、突起部下の縦位隆帯は直線(51~53・55)が多い。円筒上層c式土器より縦位の隆帯が付けられる割合が一層減るが、突起やその下の隆帯の文様モチーフにより4区画は継続して意識される(58・60~62)。縦位区画隆帯の有無にかかわらず、文様帯の上下に組み合った弧状隆帯が多段化することで胸骨文が発達する(53~58)。そのほか、円筒上層c式土器のモチーフを継承するように、波頂部以外で弧状隆帯が上下に組み合う(51)、波頂部下に大振りの8字状のモチーフが付く(59・61・62)などがある。

なお、平線の土器も少数ながら円筒上層a~d式土器を通してつくられ、波状やそれを上下に組み合わせた隆帯がつく例(17・32・33・49・50・63)などがある。

2 青森県内の他遺跡での共伴関係の類例

ここでは三内丸山遺跡以外の出土土器の中で、遺構内や時間幅が小さい遺構の出土例などから、複数の土器の共伴事例をまとめる。

表1 他遺跡での円筒上層式土器の共伴例

土器の共伴例	遺跡名	遺構名	文献	土器の共伴例	遺跡名	遺構名	文献
円筒上層a ₁ 式土器	笹ノ沢(3)	SK16・23・52	青森県教委2001	円筒上層d式土器	新城平岡(4)	SX06	青森県教委2012
	笹ノ沢(3)	SI19, SK363	青森県教委2004		松ヶ崎(西長根)	16住	八戸市教委1995
	楓ノ木(1)	6住	青森県教委1995		山崎(1)	2住	青森県教委1982
	福平	4住	協野沢村1998		富ノ沢(2)	318・395住	青森県教委1992
	津山	6・58土	青森県教委1997		水上(2)	SI1036	青森県教委2013
	山田(2)	A301土	青森県教委2011		三内丸山(6)	63・68土	青森県教委2000
円筒上層a ₂ 式土器	笹ノ沢(3)	SI24, SK431	青森県教委2004	円筒上層c式土器	三内	遺構外	青森県教委2007
	明戸	7住	十和田市教委1984		松ヶ崎	9住	八戸市教委1994
	沢ノ黒	1住	青森県教委2007		松ヶ崎	4土	八戸市教委1996
円筒上層b式土器	中野(2)	SI02	三戸町教委2001		富ノ沢(2)	216・276・288住, 766土	青森県教委1993
	重地	237土	八戸市教委2002	榎林式土器	松ヶ崎(西長根)	10・15住	八戸市教委1995
	新田(2)	捨て場	青森県教委2009		松ヶ崎	29・31住	八戸市教委1996
円筒上層c式土器	新田(1)	4土	青森県教委2009		富ノ沢(2)	38・246・391住	青森県教委1992
	尾上山(2)	2土	青森県教委1991	松ヶ崎(西長根)	4住	八戸市教委1995	
	牛ヶ沢(4)	69住	八戸市教委2001	松ヶ崎	1墾	八戸市教委1994	
		292土	八戸市教委2004	最花式土器	富ノ沢(2)	56・223・229住	青森県教委1992
	上蛇沢(2)	7住	青森県教委1995		山崎(1)	8住	青森県教委1982
	川原平(4)	16住	青森県教委2016		野場(5)	15住	青森県教委1993
	水上(2)	SI102	青森県教委2017	大木10式併行期	三内丸山(5)	2住	青森県教委1999
	富ノ沢(2)	7・65住	青森県教委1992		上蛇沢(2)	4住	青森県教委1995
					川原平(6)	2住	青森県教委2016
					富ノ沢(2)	81住	青森県教委1992

遺構名は報告書の記載を用いた(住・SI=堅穴建物跡、土・SK=土坑、墾=墾穴)

本表から第3章第1節で分類した土器群の共伴関係が他遺跡でも確認できる。円筒上層c式土器や最花式土器、大木10式併行期の土器は、三内丸山遺跡では遺構内での共伴例がいまのところ確認されていないが、表中の資料により器形や文様モチーフなどのセット関係を理解することができ、本県においておおむね共通した変遷としてとらえることが可能である。

層的な出土例としては、青森市野木和遺跡では円筒下層d式土器と円筒上層a式土器が上下の層に分かれ、さらに円筒上層a式土器の上に円筒上層b式土器が重なっていたと報告されている。昭和46年に発掘調査された平川市場合(2)遺跡では、円筒上層c式からe式まで層位を異にして出土している。

3 円筒土器と大木式土器との併行関係

青森県内では、六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡では円筒上層e式土器と大木8a式土器の共伴例、八戸市石手洗遺跡で円筒上層d式や同e式土器と大木8a式土器の共伴例、三戸町泉山遺跡(青森県教育委員会1975)では円筒上層d・e式土器と大木8a式土器の共伴例がある。

青森県外では、秋田県大仙市和田Ⅲ遺跡では円筒上層a式土器と大木7a式土器古段階、男鹿市大畑台遺跡では円筒上層a₂式土器と大木7a式土器新段階、仙北市高野遺跡・北秋田市深渡遺跡・秋田市繁沢遺跡では円筒上層b式土器と大木7b式土器古～中段階、岩手県盛岡市繁V遺跡では円筒上層d式土器と大木8a式土器古段階が共伴したとされる(中野2008)。さらに、岩手県岩手町秋浦I遺跡では円筒上層c式土器と大木7b式土器が、岩手県八幡平市間館I遺跡では円筒上層d式土器と大木8a式土器が共伴し、盛岡市繁遺跡や同市大館町遺跡では、円筒上層e式土器と大木8a式土器が共伴している。また、普代村力持遺跡では、円筒上層b・c式土器と大木7b式土器が共伴する。

円筒土器以降の大木系土器については、村越の論考(村越1974)以降、円筒上層式土器に後続する複林式土器は大木8b式土器、最花式土器が大木9式土器に並行することは定着しており、大木系土器や大木式土器を細分化する考えがあり(小保内2008、中野2008など)、おおむねの併行関係がとらえられている。

円筒上層式土器と大木式土器の併行関係は永らく検討され調査例も増加しているが、必ずしも土器型式ごとの1対1の関係にはなく、両者の中で型式を跨ぎながらの時間関係としてとらえられる状況に変わりはない。

4 三内丸山遺跡からみた円筒上層式土器と大木系土器編年の課題

・円筒上層a₁式土器と同a₂式土器の共伴や同一土器でそれぞれ文様が共存すること、同様に円筒上層a₂式土器に円筒上層b式の指標である縄文原体による馬蹄形押圧文を伴う土器が少なからずあること。両者の変遷の一過程として型式学的にはそれぞれ分離されると考えるが、型式認定にわかりにくさが残る。

・円筒上層b式土器は、波頂部下に限って縦位隆帯が付く場合と口縁部文様帯全体に隆帯が巡る場合がある。これまでの共伴例からみれば、後者の土器群の共伴関係は確認されるものの、両者の時間関係が不明確である。本遺跡の第6次調査(遺跡北西斜面の包含層第9c層)出土土器は、隆帯では前者の特徴をもち、口縁部全体に馬蹄形押圧が巡る土器の共伴が確認されており、両者には時間差があ

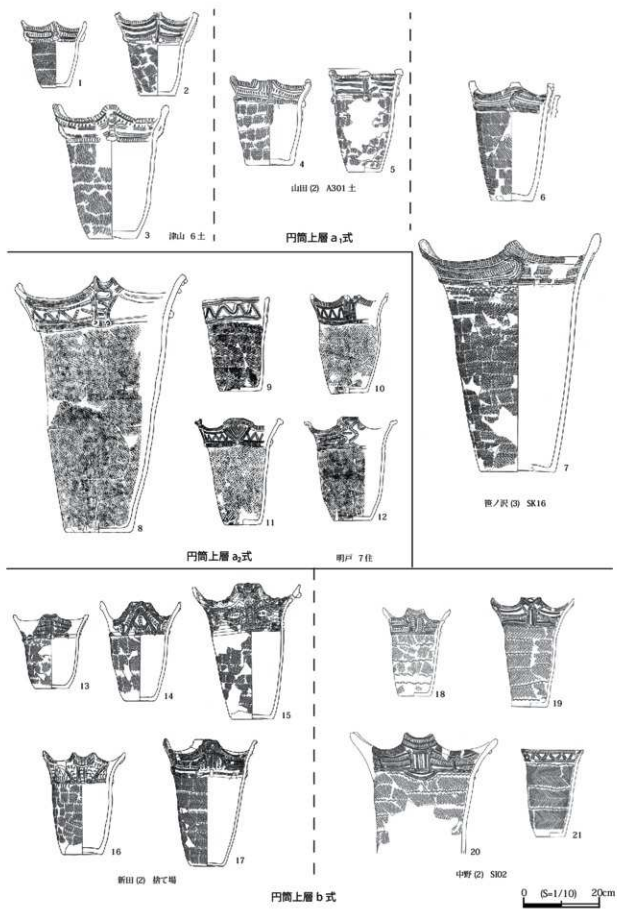


図 5-47 円筒上層 a・b 式 (三内丸山遺跡以外)

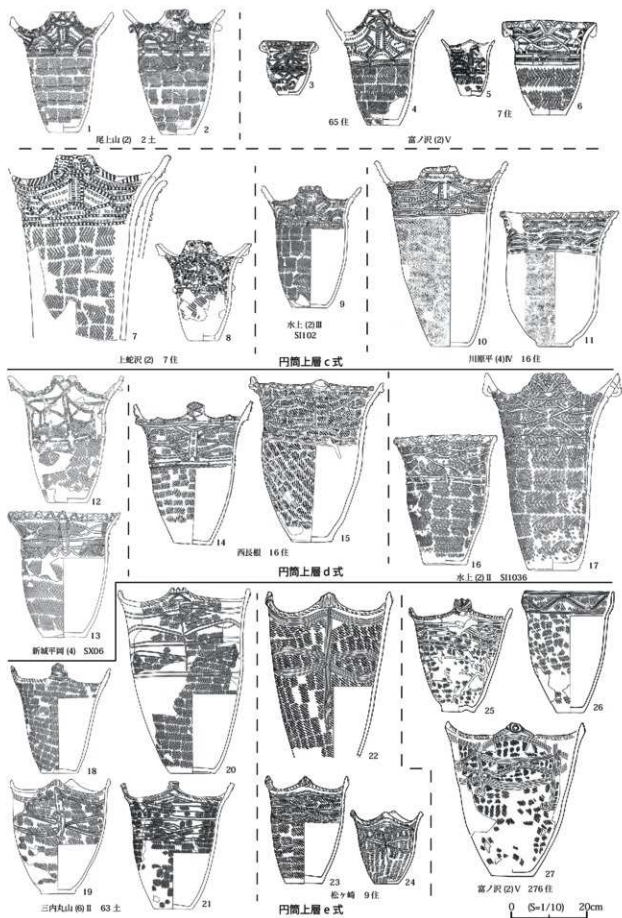


図5-48 円筒上層 c・d・e 式 (三内丸山遺跡以外)

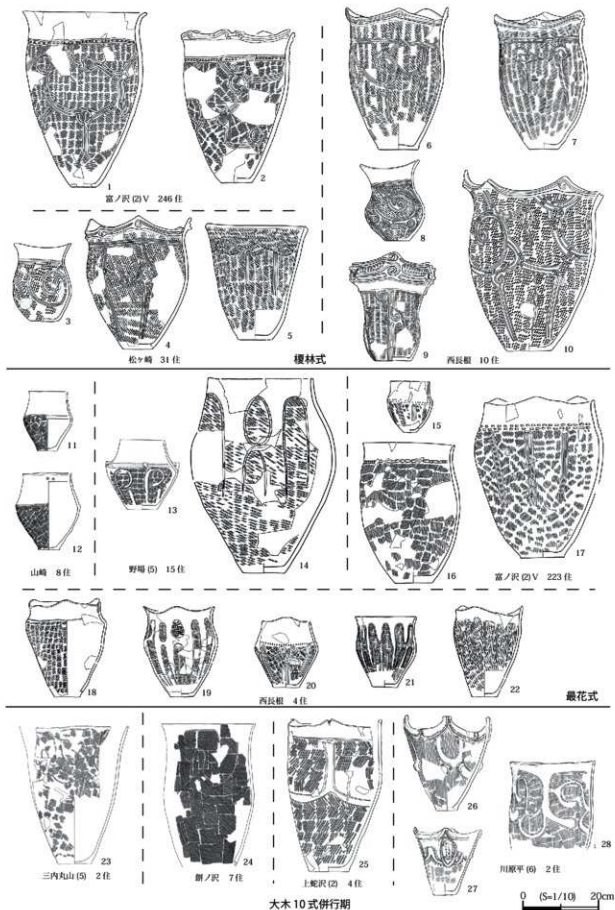


図 5-49 大木系土器

る可能性が高いが明確ではない。

・そのようにとらえた場合、円筒上層c式土器にも波頂部下のみに隆帯が付くものと口縁部文様帯全体に隆帯が広がるものがあり、隆帯だけでは円筒上層b式土器（縄文原体の馬蹄形押印文）から円筒上層c式土器（棒状工具による刺突文）への説明が難しくなる。

・他遺跡では円筒上層d式土器と円筒上層e式土器の共伴例が見られる。本遺跡のみならず確実に円筒上層d式の段階は確認されるものの、沈線化に地域による時間差が存在するか、沈線文に伴う円筒上層d式の細分があり得るか検討の余地がある。

・大木系土器については、円筒上層式土器に比べ出土量や共伴例、全体の文様構成がわかるものが少なく体系的な理解が難しい。榎林式土器については、数少ない共伴事例や第423号竪穴住居跡堆積土中の層位的な出土事例から、小保内裕之が示した榎林式土器の3段階の変遷（小保内2008）に沿った細分の可能性が見いだせる。しかし、大木式土器文化により近く、まとまった資料がある八戸市とは文様構成に地域的な違いがあり、本遺跡における更なる内容の把握が必要である。

・最花式土器、大木10式併行の土器群については、同一型式でも文様モチーフや施文方法、器形などいくつか類型化できそうであるが、出土量が限定され、細分化の根拠資料が必要である。

以上、課題を挙げたが、土器の編年を理解する上ではできるだけ狭い範囲の基準をつくることが望ましい。その意味で、本遺跡は円筒上層式及び後続する大木系土器が連続して出土することが盛土の調査などで確認され、かつ、円筒上層式土器は出土量も豊富であり、変遷やセット関係を理解する上できわめて貴重な資料である。今後とも、上記の課題を含め、問題意識をもった調査が必要となる。

（小笠原）

第3項 石器

1 研究史上にみる円筒土器文化の石器

長谷部言人は「円筒土器文化」の中で、円筒土器に伴う特記すべき石器として北海道室蘭市の大型の「冠石」、五所川原市オセドウ貝塚や北秋田市で出土した長さ19ないし15cmの扁平な「紡錘形打製石器」をあげている（長谷部1927）。前者は北海道式石冠、後者は半円状扁平打製石器と考えられる。

これらは、整形加工を伴うが、楕円礫を加工せずに利用した一般的な磨石と共に出土している。そのため、磨石としての機能の特化あるいは効率化をはかった石器の可能性はある。

北海道式石冠と半円状扁平打製石器の出現は、いずれも円筒土器の出現直前の前期前葉である。前者は北海道の静内中野式の新ひだか町中野台地A遺跡や岩見沢市加茂川遺跡などで出土している（小島1999）。後者は本州側の大鰐町砂沢平遺跡などから出土している（北の縄文研究会2011・上條2010）。盛行するのは円筒下層式期であり、いずれも円筒土器文化に伴う特徴的な石器とされてきた。両者の理解を深めることができれば、津軽海峡をはさんだ南北の石器の地域性を考察することになる。また、剥片石器においては、青森県内では円筒下層式期に石匙が多く、その使用痕跡に光沢等の特徴を持つ事（第4章第2節12項）が知られている。

三内丸山遺跡は本州側の円筒土器文化を代表する遺跡であり、これまで多数の石器が報告されてきた。そのため最初に、その中から詳細時期が推定できる資料を選び、石器群の時間的な変遷をまとめることとした。あわせて北海道側の資料として福島町館崎遺跡等の出土石器を検討する。次に北海道式石冠と半円状扁平打製石器等についてまとめる。最後に石器組成について表1をもとに考察する。北海道式石冠と半円状扁平打製石器を中心に検討するため、それらが多く出土する前期後半の遺跡を多くとりあげた。

2 三内丸山遺跡を中心とした縄文時代前～中期の石器群

三内丸山遺跡は長期間にわたり拠点的な集落が営まれたため、遺構の重複がある。同じ場所で堅穴建物などを繰り返しつくるため新しい時期の遺構には古い時期の遺物が混入することがある。また、異なる地域からの搬入品が含まれる可能性がある。しかし、第6鉄塔地区の最下層など他の時期の混じらない石器群もある。資料の取扱いに留意すれば、同一遺跡で縄文時代前期中葉から中期末葉までの変化を押さえることができる。そのため、基本的に堅穴建物跡や捨て場の中～上層の石器から抽出するときは、異なる時期の土器が混じらないもしくはその可能性が少ないと判断されるものを選定した。埋設土器内の出土礫石器については、時期の古い石器が混じる可能性は低いと考えた。そのため、埋設土器内及び堆積土出土品でも遺構断面図から土器内と判断できる石器は、遺構の該当する土器型式のものとして掲載した。また、青森県内の他の遺跡例からも時期推定が支持されると判断したものも掲載し、図5-50～54にまとめた。

図5-50は第6鉄塔地区第Ⅵa・b層の円筒下層a式期の石器である。石鏃は二等辺三角形で、裏面に主要剥離面を残す例が多い。これは直前の深郷田式期の形状・整形を引き継いだものである。そして有茎石鏃、横型石匙、破片ではあるが抉入扁平磨製石器なども出土する。石匙は、光沢が確認できるものが多い。両側縁から光沢の延びるものがあるが、前期前半に卓越する縦型石匙の一種、松原型石匙では刃部が一辺のみのものであるが、それに比べて高い自由度で使用された結果であると考えられる。

石鐮はほぼ鎌先部分のみ中心に加工した例が多い。石鐮は規格性のある台形である。裏面は周辺加工で主要剥離面を大きく残している。深郷田式直前の表館・早稲田6期類に多い石鐮である(齋藤2018)。裏面左右の剥離面を打面とすることにより、正面側の器体中央まで細長く細部加工の剥離が延びる。松原型石匙と同様の技術による。古い時期に盛行した形状・整形が残る例と考えられる。

石核は両刃礫器状のものをふくめ多様性がある。石匙等の素材剥片となり縦長剥片を剥離した石核を図示(38)した。磨製石斧は緑色岩製の擦切磨製石斧である。半円状扁平打製石器と挟入扁平磨製石器が出土している。

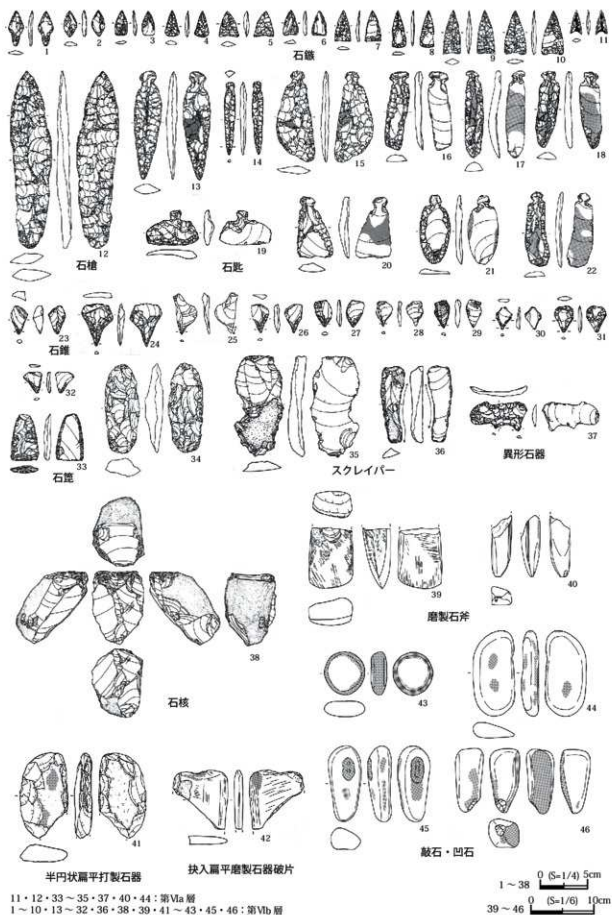
図5-51は北の谷地区のⅢc-3層の出土品で、円筒下層c・d式期のものである。石鐮は無茎の二等辺三角形のものほかに柳葉形の有茎突基鐮がみられる。石匙は形状が多様であり、つまみ部分の幅の広い横型が出土している。むつ市熊ヶ平遺跡は円筒下層d式期を主体とした円筒下層式期の遺跡であるが、類似した形状の石匙が多数出土している。磨製石斧は緑色岩の擦切磨製石斧が基本である。図5-51-36~38の下から2段目に礫の側面を機能面とする磨石をおいた。36は断面が三角形に近い。37は石錘状の挟りを両端に作り出している。38は半円状扁平打製石器と平面形が類似するものの磨面が幅広い。半円状扁平打製石器に加え、挟入扁平磨製石器も安定的に出土する。挟入扁平磨製石器は挟みの部分から器体中央まで摩耗や鈍い光沢をスクリーン・トーンで表示した。装着痕跡の写真を図5-58に掲載した。

図5-52に円筒下層c式-円筒上層b式期の石器を掲載した。円筒下層c式期は無茎の二等辺三角形の石鐮が主体であり、円筒下層d式期は柳葉形の有茎突基鐮が主体である(齋藤2010)。青森市石江遺跡でも同様である。秋田県大館市池内遺跡ではSKS394号墓のように円筒下層c式期にも有茎突基鐮がまとまって出土している。SKS387号墓では柳葉形の有茎突基鐮を主体としながらも有茎Y基鐮と無茎凹基鐮が出土する。青森県東部の東北町東道ノ上(3)遺跡のSK08は円筒下層c・d式期の土坑墓と考えられる、8点の柳葉形の大形有茎突基鐮と1点の無茎凹基鐮が出土している。青森県東部の十和田市明戸遺跡においては、円筒下層d式期に柳葉形の有茎突基鐮が出現するものの、多数を占めるのは有茎Y基鐮であり、無茎凹基鐮も出土している(岩田2010)。石鐮形状の時期による傾向性において本遺跡は日本海側の他遺跡と共通した傾向を示す。また、挟入扁平磨製石器は、八戸市畑内遺跡や岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡などで出土しているものの、太平洋側の出土例は少ない。この点、本州北部の日本海側の特性といえる。

磨石は円筒上層a・b式期にも、石錘に形状の類似するもの(20・38)が出土している。半円状扁平打製石器に平面形の類似した磨石(21・22)もある。46は、両端の挟り部分を敲打加工している。円筒上層b式期に出現していることを考えると、石錘に形状の類似する磨石の変異の可能性もある。器体を溝で一周させた楕円礫側面を機能面とした北海道式石冠よりも前に出現している。

図5-53には円筒上層b式-e式期のものを掲載した。

円筒上層d式期には石錘形の類似する磨石(20)、半円状扁平打製石器に平面形の類似した磨石(22)もある。しかし円筒上層e式期には、半円状扁平打製石器とともに存在が、不明確となる。かわりに楕円礫の側面を機能面とした北海道式石冠(52・53)が多くなる。54は上條(2015)の述べる石錘形の磨石に相当する可能性がある。石鐮は有茎Y基鐮が増える。断面が厚く、階段状の剥離が観察できるものもあり加工の粗さを感じさせる。石匙は、この時期と確認をもって掲載できるものはなかった。

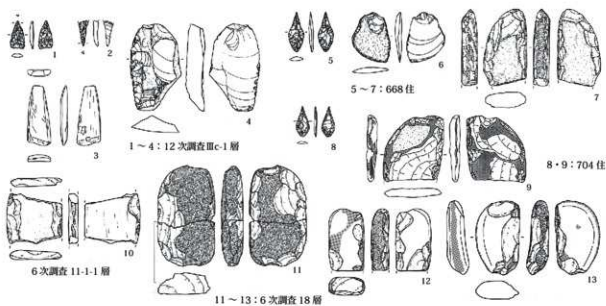


11・12・33～35・37・40・44：第VIa層
 1～10・13～32・36・38・39・41～43・45・46：第VIb層

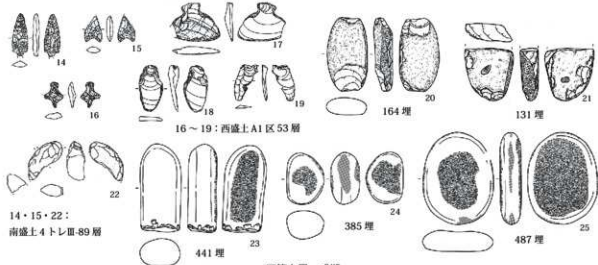
図5-50 三内丸山遺跡出土石器（円筒下層a式期；第6鉄塔地区第VIa・b層）



図5-51 三内丸山遺跡出土石器（円筒下層c～d時期；北の谷地区Ⅲc-3層）



円筒下層 c 式期 (1~3)・円筒下層 d 式期 (5~13)



円筒上層 a 式期



円筒上層 b 式期

1・2・4~6・8・14~19
 ・26~37・39~45
 3・7・9~13・20~25・38・46
 0 (S=1/4) 5cm
 0 (S=1/6) 10cm

図 5-52 三内丸山遺跡出土石器 (円筒下層 d~上層 b 式期)

石鏃は、容易に抽出できたことを考えると、羽生（2005）らによって指摘されてきたように、この時期の石匙は少ないものと考えられる。

図5-54には覆林式～大木10式併行期の石器を掲載した。

覆林式期は剥片石器では円筒上層e式期と大きな変化が感じられないが、錐先の部分が細長い7のような石錐が出現する。大木10式併行期に盛行する形状である。礫石器では北海道式石冠の存在は、不明確となる。三内丸山遺跡での最花式の遺物は他の時期と混交するものが多く、図示できる点数が少ない。大木10式併行期には、石鏃は無茎鏃が多くなり小型化し細部加工が丁寧になる。有茎鏃も小型化し、丁寧な加工が行われる。石錐は44のようなT字形のもの棒状に近いものが主体となる。石鏃は41のように撥形が多くなり小形品（42・43）が増える。青森県内全体を見ても石器形状が変化するものが多く、玉髓質珪質頁岩など硬い石材の使用例が増加する（齋藤2014）。17・18は南西墓城付近の第Ⅱ層出土品である。層の主体をしめるのは大木10式併行期である。また、有縁や脚付きの石皿が増加するのは大木8b式以降とされている（上條2015）。中期末の脚付き及び縁が明瞭化した石皿の存在は石器の組み合わせという視点からも言及されている（高橋2013）。中期後葉以降、特に大木10式併行期の可能性がある。19～22の磨石は石鏃形（上條2015）のものである。円筒上層e式期の図5-53-54にもみられるが青森県内出土例では大木10式併行例が多く知られている（齋藤2000）。39は青竜刀形石器の破片であり、縄文時代中期後葉以降に出土する。

3 北海道福島町館崎遺跡の縄文時代前～中期の石器群

図5-55に円筒下層d式から円筒上層b式を主体とする福島町館崎遺跡の石器を掲載した。石鏃は各種の形態があるが、三内丸山遺跡では円筒下層a～c式期に多い二等辺三角形の無茎鏃や、円筒下層d式期に多い柳葉形の有茎尖基鏃など対比可能なものがある。最上段右側の黒曜石製の無茎鏃は、産地分析が行われ、長野県霧ヶ峰産と推定されている。三内丸山遺跡の霧ヶ峰産のものと同形状・加工が共通する。石槍またはナイフとされた石器は、両面加工で丁寧な細部加工がなされた中～大型の石器の先端部を、意識的に尖らせるか否かで異なる分類に置かれてる。それらに加え細部加工が不十分な両面調整石器が出土している。大型の珪質頁岩製の石核などもあり、遺跡が産地周辺に位置することの現われである。礫石器では、半円状扁平打裂石器及びそれに平面形が類似するものの磨面が幅広いもの、石錐状の平面形で側面に磨面がある磨石が出土している。青森県内で三者ともに多いのは鯨ヶ沢町鳴沢遺跡など円筒下層d式期の遺跡である。北海道式石冠は、大型で高さがあり、把手部分を石器上端近くに作り出す例は北黄金貝塚などの出土例から円筒下層c・d式期に多い。また、小型で器体側面の敲打痕を一周させて把手を作り出すのは渡島半島部の中期遺跡に類例が多い。いずれも楕円礫を半割した面を機能面としていることが共通する。

また、半円状扁平打裂石器は欠損後に再加工し使用したことがわかる接合資料が得られている。北海道木古内町大平4遺跡では、加工の初期段階の接合資料、完成品と初期の調整剥片の接合資料が得られており、図の右下に掲載した。

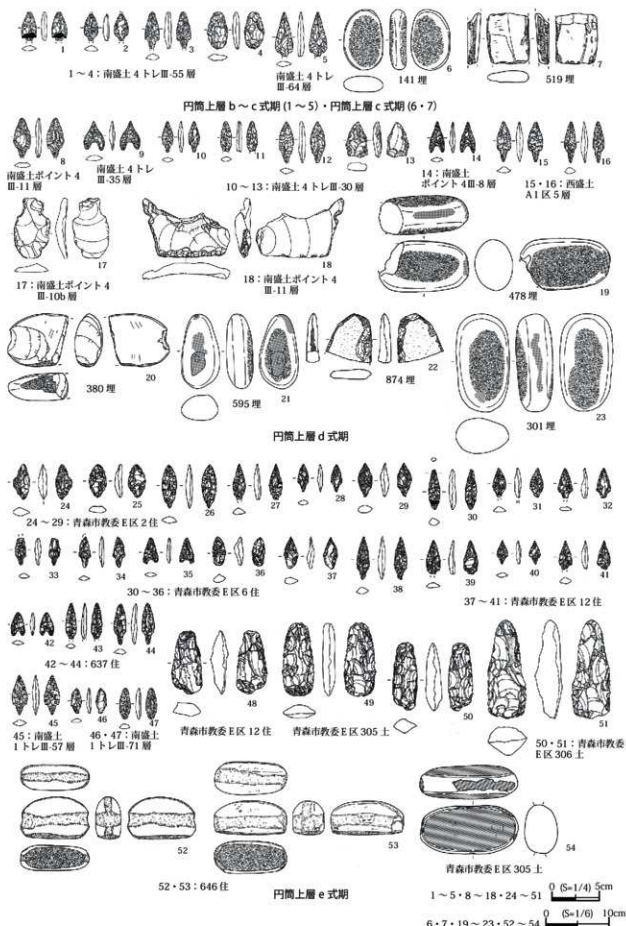


図5-53 三内丸山遺跡出土石器(円筒上層b~e式期)

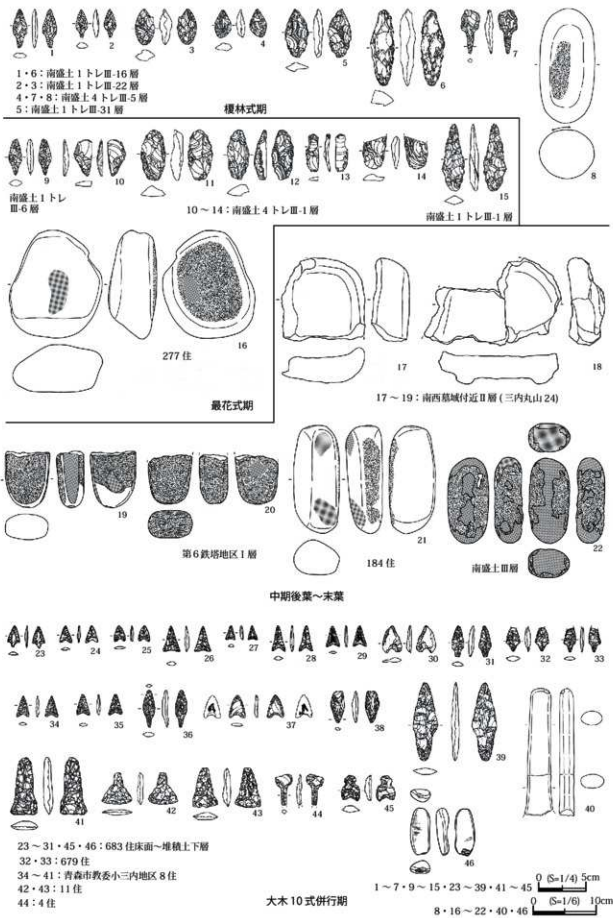


図5-54 三内丸山遺跡出土石器（榎林式～大木10式併行期）

4 北海道式石冠・半円状扁平打製石器

半円状扁平打製石器については「扁(偏)平打製石器」など遺跡報告書の地域及び刊行時期による名称の変化がある。近年は、挟入扁平磨製石器を含めて扁平石器として一括したうえで分類を再編し、分布や消長を検討した論考が発表されている(上條2014)。西目屋村水上(2)遺跡の報告でも、半円状扁平打製石器をはじめとする打製の磨石類を再編している。従来の半円状扁平打製石器(水上(2)遺跡の打製石器A1・A2類)、それに平面形状が類似するものの磨面が幅広いもの(打製石器B類)、楕円状の両端に挟りをつけ、石錘状の平面形状で側面に磨面が形成される磨石(打製石器C類)などに分類している。六ヶ所村上尾敷(1)遺跡C地区は円筒下層d式期の集落であるが、第8号住居跡では、その3者がともに出土している。後の2者は磨石として半円状扁平打製石器と区分している。福島町館崎遺跡においても同様である。相互の関連性が想定されるものの本稿では、既刊報告書の記載内容を基にして記述するため、名称を従来どおりの分類で記載する。北海道式石冠についても、青森県内を中心に分布する楕円状の側面を機能面として敲打を一周させるもの等を類似した磨石とする見解がある(小島1999)。同様の理由と、それが北海道内にもみられることから従来どおり北海道式石冠として扱う。

半円状扁平打製石器は青森県域を中心として渡島半島南部までは多数使用される。しかし北にいくほど出土数は減少し、石狩低地帯では、出土遺跡数が少ない(図5-56:三内丸山遺跡保存活用推進室2016)。出土点数も同様である。円筒土器文化圏の中でも南側に中心があり大木式土器文化圏の北部にも多く分布する。秋田県大仙市ノ山Ⅱ遺跡では2,466点出土している(秋田県教育委員会1988)。名称は異なるが「敲打磨石」などとして盛岡市大新町遺跡第10次調査など盛岡市域でも出土する(盛岡市教育委員会1984)。半円状扁平打製石器は中期後半には本州側では消滅していくが、北海道では中期末葉まで使用が継続する(齋藤2014)。

三内丸山遺跡では第6鉄塔地区の水洗選別資料(齋藤2003)や第16次調査の第668号堅穴住居跡の堆積土及び周辺部から半円状扁平打製石器の調整剥片が多数出土している。線状の打面など両極打法などによると考えられる強い打撃の痕跡を持つ物がある。磨面を打面とした剥片があり、刃部再加工のものも含まれている。半円状扁平打製石器の磨面形成後に剥離加工が行われた例が青森市桜峰(1)遺跡で報告されてきた(沼宮内1998)。一部(おそらくは過半数)のものは機能面が太くならないように維持管理された可能性がある。半円状扁平打製石器については三内丸山遺跡等での残存デンプン粒の分析から、ユリ科の根茎類の粉砕などに使用された可能性が示されている(上條2010)。

また円筒下層式期には津軽地方を中心に挟入扁平磨製石器が分布する。石材はデイサイトや安山岩、凝灰岩であり、半円状扁平打製石器と共通する。三角形の形態で挟りを持ち研磨加工される。大きさは半円状扁平打製石器より長く重い物が多い。打ち欠きによる半円状扁平打製石器は短時間で製作可能であるが、研磨をとまなう挟入扁平磨製石器は時間を要する。分布は津軽地方が中心である。機能部(刃部)は断面がU字形となり、磨耗や光沢が認められる。そのため対象物は軟質のものが想定されるが、未解明である。また、厚みや石材の共通性から、ざらざらした磨面と剥落痕を持つものがある。最終的に半円状扁平打製石器と同様の用途に転用された可能性がある。出現は深郷田式期の可能性がある。

一方、北海道式石冠は、北海道南部を中心とした分布を示す(図5-57:三内丸山遺跡保存活用推進

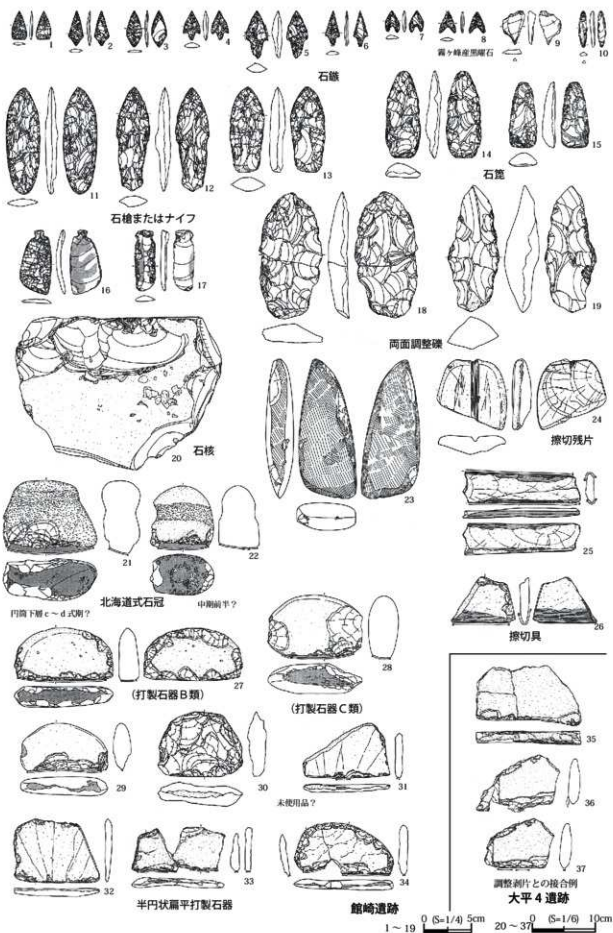


図 5-55 北海道福島町館崎遺跡 (円筒下層 d ~ 円筒上層 b 式期主体)・木古内町大平 4 遺跡出土石器

室 2016)。しかし円筒土器文化圏の中でも北側に中心があり、北海道富良野盆地や十勝地方でも一定の数量は出土している。例えば富良野市東9線8遺跡では207点、帯広市若葉の森遺跡では233点(190個体)の出土である(富良野市教育委員会1999、帯広市教育委員会2004)。また、古くから紹介された斜里町朱円遺跡や網走市天都山遺跡のように、オホーツク海沿岸まで出土する。北海道北部から東部にかけての出土品が集成されたこともある(豊原ほか1991)。出土遺跡及び点数の濃淡はあるが円筒土器文化圏を超えて、全道内で出土する(齋藤2018)。

製作技法は楕円磔を半割し、割れ面を機能面とするように整えていくのが基本である(青野1998)。本州側では、青森県域を中心に、磔の側面を機能面とするものを基本とする。円筒上層e式期のもの



図 5-56 半円状扁平打製石器の分布



図 5-57 北海道式石冠の分布



図 5-58 抉入扁平磨製石器に残る装着痕(三内丸山遺跡 抉り部分から帯状に延びる色調変化)

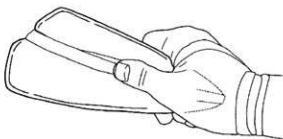


図 5-59 挿入扁平磨製石器の使用想像図



図 5-60 半円状扁平打製石器に残る装着痕
(中央の礫面の下部に黒褐色の帯状の色調変化)

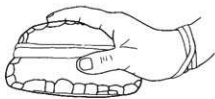


図 5-61 半円状扁平打製石器の使用想像図
(齋藤 2003)

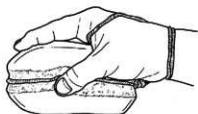


図 5-62 北海道式石冠の使用想像図
(齋藤 2000)

が多く、岩手県北部と秋田県北部では出土遺跡と出土量は少なくなる。同様のものは北海道奥尻島の奥尻町砥石遺跡や森町石倉 1 遺跡など北海道側からも出土する。

さて、挿入扁平磨製石器は研磨されているので、挟り部分からの紐の装着痕が残る場合がある(図 5-58)。筆者はそれをもとに使用想像図を作成している(図 5-59; 齋藤 2003)。半円状扁平打製石器にも例は少ないものの帯状の変色から紐の装着痕と推定できるものがある(図 5-60)。同様に使用想像図を作成した(図 5-61; 齋藤 2003)。北海道式石冠では、図 5-53 の円筒上層 e 式の例のように溝の作り出しが中央部だけ上方に作り出されたものがある。挟りや溝を紐の固定用として図 5-62 のような装着方法を想像すると、弧が上方に位置する中央部が親指にあたる部分となる(齋藤 2000)。

5 石器組成

表 1 に北海道から青森県域の石器組成をまとめた。北海道では半円状扁平打製石器を磨石の中を含める報告書や石筥(筥状石器)を器種として独立させず、相当するものを両面調整石器やスクレイパーに分類した報告書もある。一方、青森県内で両面調整石器を器種として独立させない報告書では、スクレイパー類や石核などに分類されていると考えられる。

円筒下層 c・d 式期、噴火湾の北黄金貝塚水場地点は、礫石器の祭祀遺構と考えられていることもあり圧倒的に北海道式石冠が多い。積丹半島の基部にあたる岩内町東山 1 遺跡でも、北海道式石冠が 1,612 点と石器の中では最も多い。円筒下層 d 式～円筒上層 a 式期を主体とする遺跡であるが、敲石・凹石・磨石(半円状扁平打製石器を含む)も 1,514 点と多く、石鏃 314 点、石匙 150 点など剥片石器と比べ、明らかに礫石器が多い。

一方、渡島半島部噴火湾中央西岸の八雲町シラリカ 2 遺跡では、北海道式石冠が多いとされる円筒下層 c 式期でありながら、半円状扁平打製石器の方が多い。その北に位置する円筒下層 b～d 式期の

長万町町花岡2遺跡でも同様である。両者ともに減少するサイバ沢Ⅶ式期の八雲町山越4遺跡B地区でも半円状扁平打製石器の方が明らかに多い。

そして渡島半島南西部で津軽海峡に面した福島町・木古内町・北斗市の遺跡での石器組成は、青森県内の遺跡例と共通点が多い。円筒下層b式を主体とする北斗市館野6遺跡では半円状扁平打製石器は1,731点であり、北海道式石冠の114点を圧倒している。また、石鏃444点、石槍・ナイフの259点に対して石匙が837点と多数出土している。円筒下層d式～円筒上層b式期を主体とする福島町館崎遺跡では半円状扁平打製石器は1,940点であり、北海道式石冠は505点、石鏃1,305点、石槍・ナイフ491点、石匙844点である。中期の遺物も含まれるためか剥片石器では石鏃も多い。また、津軽海峡に面した木古内町内の各遺跡の石器を検討した論考では、木古内町では北海道式石冠が少なく、噴火湾北岸や積丹半島の同時期の遺跡で多量に出土するのと異なることが指摘されている(酒井2017)。加えていうと、半円状扁平打製石器が多数出土しているのであって。隣接する福島町・北斗市の遺跡とともに植物遺存体などからクリ等の管理・育成が推定される。前後後半から中期にかけては海峡を渡ったクリが、人間の関与のもとに分布域を北に拡大させる時期にあたる(山田2001)。この時期の半円状扁平打製石器の分布動向は、それと同調する現象ととらえられる(第5章第3節参照)。

また渡島半島では全体的に石槍もしくはナイフ、両面調整石器の比率が高い。両面調整石器は1990年代後半から次第に定着してきた名称で、使用者によって定義の揺れ幅がある。小形品を含めた報告例もあるが、まず想定されるのは中～大形で石槍・石鏃とも言いがたい石器である。両面に調整がある石器について、函館市八木A遺跡では、石核的なものは「粗工両面調整品」として半月形等のナイフと区別していた(南茅部町埋蔵文化財調査団1995)。石槍等の半製品兼小型石器の石核と言えるものを含むと考え、石核と同様に石材産地から多く出土していることと結びつく。渡島半島には、八雲層・木古内層などの頁岩層がある。木古内層のある木古内町大釜谷川では良質な珪質頁岩が得られる(立田2014)。円筒下層a～c式期を主体とする同町釜谷遺跡ではポイントの欠損品割合が61%と高く、両面調整石器については「刃部が未作出で、半製品状態のものが数多くあり、これらはポイントやスクレイパーなど各器種の未成品であると考えられる」と報告されている(木古内町教育委員会1999)。函館市南茅部地区では八木川頁岩部層が黒鷲岬及び八木川周辺に露出しており(南茅部町埋蔵文化財調査団1995)、近辺の八木A遺跡から、粗工両面調整品やナイフ等が多数出土する基盤となったと考えられる。同様の石器は青森県内でも蟹田町大平墓地公園遺跡など石材産地から多く出土する(斎藤1998)。風間浦村沢ノ黒遺跡、蓬田村山田(2)遺跡、西目屋村水上(2)遺跡などでも類例が増加している。しかし、太平洋岸の八戸市など良質な珪質頁岩がない地域で、基本的に出土しないことを考えれば、それら類例も産地周辺からの流通品であろう。八戸市内の遺跡での石核の徹底利用は以前から推定され(三宅1984)、消費されつくした結果とい考えられる。すなわち、円筒土器文化圏にあって石槍もしくはナイフ、そして両面加工石器と呼ばれる石器は、他器種製作の石核としての役割を背景にして、その石材である珪質頁岩の産地と消費地との関係に位置づけられる石器である。

第3章第2節の「石器」で記載したように青森県内では前期に石匙が多く、中期に石鏃が増加することが知られている(羽生2005)。表1からもそれが読み取れる。円筒下層a式期の秋田県大館市男神遺跡を含め日本海側では剥片石器の中で石匙の比率が明らかに高い。一方、太平洋側の東北町東道ノ上(3)遺跡では石鏃も同程度出土している。石鏃の比率は八戸市畑内遺跡などでも高く、青森県南東

部の地域性となっている。日本海側に比べ降雪量が少ない地域であることから、シカ・イノシシの生息環境に適し、これら中型獣狩猟への依存がより高かったことを反映している。

他に円筒土器文化で特徴的な石器としては、下部が鋸歯縁状になる異形石器(齋藤2010;三内丸山遺跡出土品では第3章第2節図3-11-14・15)も円筒下層c・d式期に出土している。

渡島半島南部の遺跡群からむつ市涌館遺跡など下北半島までには、磨製石斧未製品・擦切残滓と擦切具(石鋸)が石器組成に加わる。それらは陸奥湾岸の遺跡でも少量出土する。対して、弘前市神原(2)遺跡、十和田市明戸遺跡、大館市男神遺跡など本州北部の内陸遺跡では擦切残滓や擦切具は出土していない。縄文時代前期以降は擦切技法による磨製石斧の大多数は北海道日高地方の額平川産の緑色岩(アオトラ石)を素材としており、第4章第3節第3項の「石斧」の産地分析結果を裏付けるものである。しかし、渡島半島部でも中期中葉のサイベ沢罝式の単純遺跡である八雲町山越4遺跡B地区では擦切技法による石斧製作関係資料が出土していない。縄文時代前期に擦切技法が盛行し、中期には低調となるという指摘(松下1984)を裏付けるものである。

6 課題

円筒土器文化の遺跡では多種・多様の石器が出土する。石器組成に関しては、北海道側の資料では、点数が明記されるものが多いが、本州側の報告では点数が不明なものが多い。器種分類については各地の各遺跡で、報告者が最も適すと考える分類を行うことが基本である。しかしながらその分類は道県を超えた広域においても対比が可能でなければならない。そうした分類となるように意識が共有されていけば、報告を重ねていくことにより、石器組成から読み取れる事象が増大すると考えられる。

円筒土器文化の石器については、未解明な点が多い。三内丸山遺跡で調査が継続され、各種の理化学的分析がなされていることはその解決に寄与するだろう。剥片石器の使用痕分析は一定の成果をおさめ、水洗い前に採取された土壌試料や石器機能面の顕微鏡観察によるデータは、石器の役割をさらに具体的に結めるため裨益する。円筒土器文化圏において石器全体が社会を支える生業にどのように関わり、文化全体の特徴を表すのか、理化学的分析の方法開発とその結果の積み重ねは、今後とも本遺跡において重要である。

(齋藤(岳))

第4項 土偶と岩偶

1 土偶

(1) 三内丸山遺跡の土偶

本遺跡からは2,000点を超える土偶が出土した。そのほとんどが、縄文時代中期のものである。第3章第3節では、8cmと15cmを境に大中小の大きさに区別できることを示し、形状や施文に使用される原体、文様の属性から分類した。そのうえで、盛土などから出土した土器との共伴関係から土偶の編年を示した。

なお、第3章第3節では触れなかったが、土偶には黒色の膠着物が付着している例がある。アスファルトと考えられ、首や剥落した顔部などに付着し、少量ではあるが修理されたと考えられるものがある。

(2) 土器と土偶の共伴関係

ここでは土偶の変遷を確かめるため本遺跡以外の、主に遺構内出土で時期が推定できるものを取り上げ表1にまとめる。時期の認定にあたっては、出土土器との共伴関係がわかるものを抽出し、出土土器の時間幅がある程度限定できるものを対象とするが、前後型式が含まれるものあり、その中心的な時期を示す土器型式を充てたものもある。なお、縄文時代前期の土偶は数が少ない上に、遺構外から単発で出土し帰属時期の把握が難しいものが多いため、主に縄文時代中期の土偶を対象とする。

数少ない縄文時代前期の円筒下層式期の土偶でも、いくつかの例がおよその時期を推定できる例がある。三内丸山遺跡第6鉄塔地区の土偶が前期末のものと考えられる(第3章第3節図3-19-11)。また、図5-63-1は白座式から円筒下層a式期の遺跡である階上町白座遺跡から出土した無文の土偶で、同時期と考えられる。図5-63-2・3は八戸市畑内遺跡から、図5-63-4は岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡から出土した岩偶を模した土偶で、形態や遺跡の時期から前期と判断される。また、大木式土器文化圏で前期末から中期初頭とされる土偶は、八戸市蟹沢(2)遺跡や八戸市牛ヶ沢(4)遺跡(図5-63-5・6)などで出土している。

円筒下層d₂式期のものと判断される土偶の出土例がいくつかあり、中期に入ると出土例は増加する。本遺跡以外で土器との共伴関係がわかる資料を以下にまとめる。

表1 土器と土偶の共伴関係遺跡

土器型式	出土遺跡	出土遺構	文様属性	文献
円筒下層d ₂ 式期	鳴沢	捨て場	②密縄文押圧、⑦縄文	青森県教育委員会1992
	西張平	S 116	①細沈線	青森県教育委員会2007
	沢ノ黒	捨て場	⑦縄文、⑧無文	青森県教育委員会2007
円筒上層a式期	笹ノ沢(3)	遺跡全体	①細沈線、②密縄文押圧	青森県教育委員会2001・2003・2004
	山田(2)	B区3住	①細沈線	青森県教育委員会2010
		一次27住	②密縄文押圧、⑦縄文	
円筒上層a式期	四戸橋	S K11	①細沈線	碓ヶ関村教育委員会1998
	西張平	S 116	①細沈線、②密縄文押圧	青森県教育委員会2007

土器型式	出土遺跡	出土遺構	文様属性	文献
円筒上層b式期	例なし			
円筒上層c式期	三内丸山(6)	434土、488土	④刺突	青森県教育委員会2001
	水上(2)	S I 102	④刺突	青森県教育委員会2017
		捨て場3ベルト	④刺突、⑤疎縄文押圧	
円筒上層d式期	三内丸山(6)	33住、43住	⑥沈線	青森県教育委員会2000・2001
	二股(2)	SK40	⑥沈線	青森県教育委員会2007
	水上(2)	S I 5028	⑤疎縄文押圧	青森県教育委員会2017
		S I 1085	⑧無文	
	四戸橋	S I 20	⑥沈線	碓ヶ関村教育委員会1998
円筒上層e式期	富ノ沢(2)	285住	⑦縄文	青森県教育委員会1992
		288住	⑥沈線	
	三内	捨て場	⑥沈線、⑨曲線状沈線	青森県教育委員会2007
榎林式期	水上(2)	S I 182、S I 1067	⑨曲線状沈線	青森県教育委員会2017
最花式期	例なし			
大木10式併行期	餅ノ沢	1捨て場	刺突	青森県教育委員会2000
	川原平(6)	1住	刺突	青森県教育委員会2016

(3) 土偶の変遷

第3章第3節では、本遺跡の土偶と土器の共存関係を示したが、出土した総数からみればごく一部にとどまる。上に示した本遺跡以外の例を加え、文様で分類した土偶の編年をまとめる。

①細沈線文(図3-19-1~12、図5-63-11・13・14~18)…非常に細い工具による沈線や、沈線間に短い刻線を付加したもので、円筒下層d式~円筒上層a式土器に共存する。明確な顔の表現例は少ないが、粘土紐による眉と鼻の表現がある。体部は腕脛縁や肩部から両胸の突起下にかけてW状や曲線状に、胸部以下には2~3条単位で縦位に、臍部下付近からはハの字状に広がるモチーフを中心に、隙間を充填する直線や渦巻き細沈線文が施される。背面の文様は横位に展開し、体部上半には渦巻きや波状、体部下半では脛縁に沿った沈線に横位のモチーフが加わる。

②密縄文押圧(図3-19-13~18、図5-63-12・15)…2~3条単位の縄文原体押圧により文様が描かれるもので、円筒上層a式土器に共存する。顔では目や口の表現が目立ち、逆三角形に粘土を貼り付け、顔を一段高くする例もある。体部の文様は①とよく似るが、渦巻き文が目立つ。上述のように、鯉ヶ沢町鳴沢遺跡では円筒下層d2式土器の捨て場から本類が出土し、前期末までさかのぼる可能性もある。

③馬蹄形押圧(図3-20-1~6)…縄文原体で馬蹄形押圧文を施したもので、本遺跡以外では土器との共存例がなく、出土数そのものも少ない。本遺跡例でみれば、顔は明瞭に表現されるものが一般的で、以後継続する。体部上半では横位の直線的な原体押圧に馬蹄形押圧文が加わり、②までと比べ煩雑さが薄れる。体部下半では2~3条単位の縦位の縄文押圧が共通する。

④刺突(図3-20-7~13、図5-63-19~22)…棒状工具で刺突文を施すもので、円筒上層c式土器に共伴する。体部文様は全体を縁取るように刺突が巡る。体部上半では胸を中心にX字、ハの字に直線的に刺突が施される場合もある。体部下半では正中部に縦位の刺突文が基本だが、①~③のような埋め尽くす施文は少ない。背面も側縁に沿う刺突文が多い。

⑤疎縄文…(図3-21-1~6、図5-64-5)1~2条単位の縄文原体押圧が施されたもので、円筒上層d式土器に共伴する。文様は④と同様で、正面・背面とも体部側縁を縁取る文様に、主に正中部に縦横に縄文が押圧される。西目屋村水上(2)遺跡では円筒上層c式土器が多数出土した捨て場3ベルト3a層で図5-63-22が出土し、④とは時間的に一部重複する可能性もある。

⑥沈線文(図3-21-7~13、図5-64-7~9)…棒状工具による沈線文が施文されたもので、円筒上層d~e式土器に共伴する。体部上半では⑤の縁取るような施文は少なく、腕部に縦位・V字状に沈線が施文される。肩から体部にかけて大ぶりのV・X字状の沈線が加わる例もある。体部下半では脇の下から腰部までの側縁に逆L字に沈線が施される。

⑦縄文(図3-22-1~6、図5-64-10)…縄文原体が回転施文されたもので、鳴沢遺跡や風間浦村沢ノ黒遺跡、水上(2)遺跡から判断すると、前期末ないし中期初頭期から榎林式期までに共伴する可能性がある。土偶の平面形や、⑥や⑨の沈線により、ある程度時期を推定可能なものもある。

⑧無文(図3-22-7~14)…沢ノ黒遺跡の前期末以降、継続的に存在する可能性がある。

⑨渦巻き状・曲線状文(図3-22-15~19、図5-64-11・12)…沈線により渦巻き状や曲線状、カギ状の文様が描かれるもので、榎林式に伴う。出土点数そのものが少なく、かつ全体形がわかるものも少ない。円筒上層e式期として青森市三内遺跡例を挙げたが、曲線やカギ状のモチーフが捨て場の主体である円筒上層e式期にさかのぼるか、それ以降か判断が難しい。

以上、第3章第3節で取り上げたそれぞれの型式期の土偶変遷を概観したが、以下に、最花式期、大木10式併行期の土偶について若干触れる。

最花式期は、本遺跡を含め、土器との共伴事例はない。わずかに八戸市松ヶ崎(西長根)遺跡第27号竪穴住居跡出土の土偶に相当する可能性があるだけである。

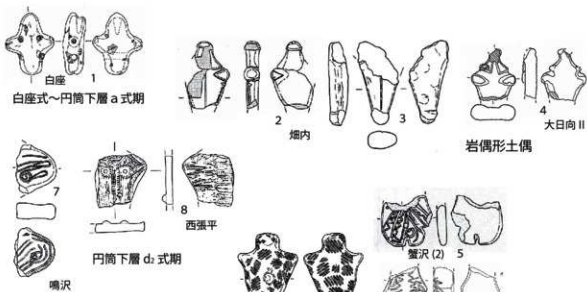
本遺跡では大木10式併行期(図5-64-13~20)の出土は少ないが、鯉ヶ沢町餅ノ沢遺跡など多数の土偶が出土する遺跡が現れ、再び土偶の出土が多くなる時期である。前に突き出した顔部、刺突が密に施文される胴部などで特徴づけられる。

円筒土器文化圏の土偶は、土器と同様の文様が施文される場合と異なる場合があり、必ずしもその変遷も土器と連動しない。円筒上層e式から榎林式期にかけては漸移的な変化を遂げるとみられ、最花式で様相が不明確となり、大木10式併行期では一変する。土器における円筒上層式から大木系への明瞭な変化ではなく、⑥と⑨のように中期中葉から後葉の土偶では区別がたいものも多い。

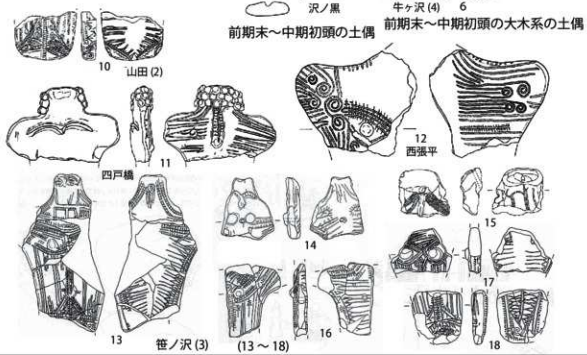
(4) 土偶の分布

円筒土器文化圏内では114遺跡で土偶が出土している。そのうち①~⑨の土偶が出土したのは100遺跡を超える。表2では本遺跡以外で10点以上の土偶が出土した遺跡を示した。これらの中には突出して多く出土する遺跡がある。水上(2)遺跡では100点を超え、その後の中期末や後期初頭の土偶も出土している。ほかに笹ノ沢(3)遺跡、館崎遺跡、栄浜1遺跡、石神遺跡、独狐七面山遺跡、四戸橋遺

円筒下層式土器に伴う土偶



円筒上層a式土器に伴う土偶



円筒上層c式土器に伴う土偶

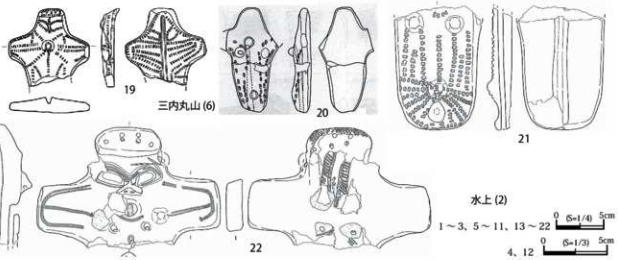
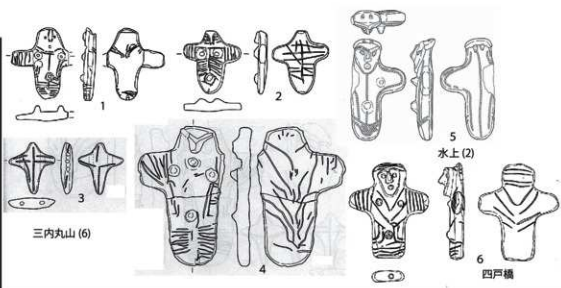
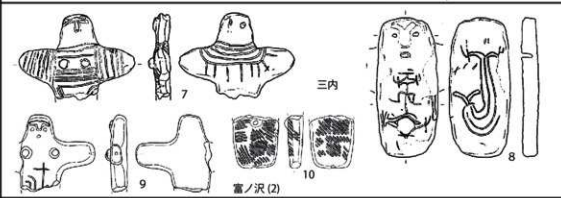


図5-63 円筒下層式~円筒上層c式土器に伴う土偶

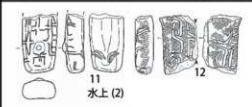
円筒上層d式土器に伴う土偶



円筒上層e式土器に伴う土偶



櫻林式土器に伴う土偶



大木10式併行期の土器に伴う土偶

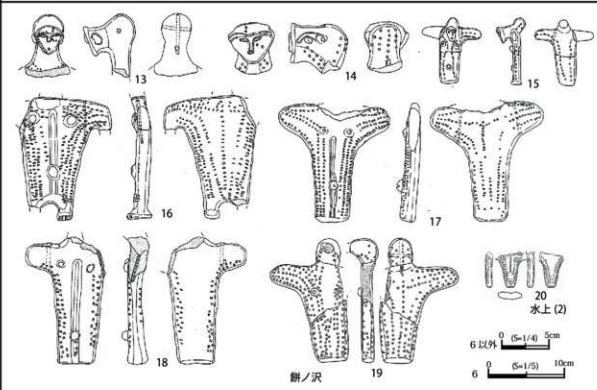


図5-64 円筒上層d式~大木10式併行期の土器に伴う土偶

跡、山田(2)遺跡等が多い。調査対象面積や、集落内での調査位置により左右される面もあるが、本遺跡から出土した2,000点を超える土偶数は、それらの遺跡と照らしても比較できないほどの数である。

表2 ①～⑨の土偶が10点以上出土した遺跡

市町村名	遺跡名	点数	市町村名	遺跡名	点数	市町村名	遺跡名	点数
西目屋村	水上(2)	111	平川市	四戸橋	18	青森市	三内丸山(9)	11
八戸市	笹ノ沢(3)	64	蓬田村	山田(2)	14	六ヶ所村	富ノ沢(2)	11
青森市	三内丸山(6)	34	弘前市	独狐七面山	14	青森市	三内	10
福島町	館崎	25	青森市	朝日山(2)	12	青森市	三内沢部(1)	10
つがる市	石神	23	岩手町	秋浦Ⅱ	12	七戸町	ニツ森	10
八雲町	栄浜1	21						

本遺跡を除いた円筒土器文化圏の土偶は約600点である。図5-65で本遺跡以外の地域ごとの出土数の割合を示した。青森市からはその約20%が出土し、本遺跡のある青森市西部が集中域の一つである。また、上位10位までに4つがある岩木川・平川流域およびその支流の遺跡では約30%の土偶が出土している。さらに数が多い山田(2)遺跡などを含めると、津軽地域は全体の約50%が出土していることとなる。

円筒土器文化圏の土偶は、青森県での出土数が多く、中でも青森市西部と岩木川・平川流域に集中する。また、青森県三八上北及び下北地方で約25%、北海道の南渡島地域で約10%を占めるが、円筒土器文化圏での分布は中心部に密に、周縁部で薄いことが明らかである。



図5-65 地域ごとの土偶出土点数

(5) 土偶の地域差

円筒土器文化圏内の土偶は、ほかの地域や時期と比較すれば、板状のつくり、顔を表現する、縄文原体の押圧や回転、沈線で文様を施すなど、その特徴は単純で、基本的な形状・施文手法は圏内各地の土偶に共通する。逆にそれだけ圏外の土偶とは排他的でもある。しかし、細かくみれば圏内であっても差異が認められ、逆に圏外とつながる特徴がとらえられることがある。

北海道では体部中央に穿孔がある土偶(図5-66-1~4)が特徴的である。栄浜1遺跡のように穿孔が大きい場合もある。また、腕の付け根部分の縦位の穿孔(図5-66-5~7)が高い割合で見られる。下端がL字に屈曲し、脚部を表現した形(図5-66-8~10)がある。文様では両館市豊原4遺跡や松前町白坂遺跡などで逆三角形の体部前面に、肩部から脚部まで馬蹄形押圧文を連続させる例(図5-66-11・12)がある。以上は本州側ではみられない特徴である。

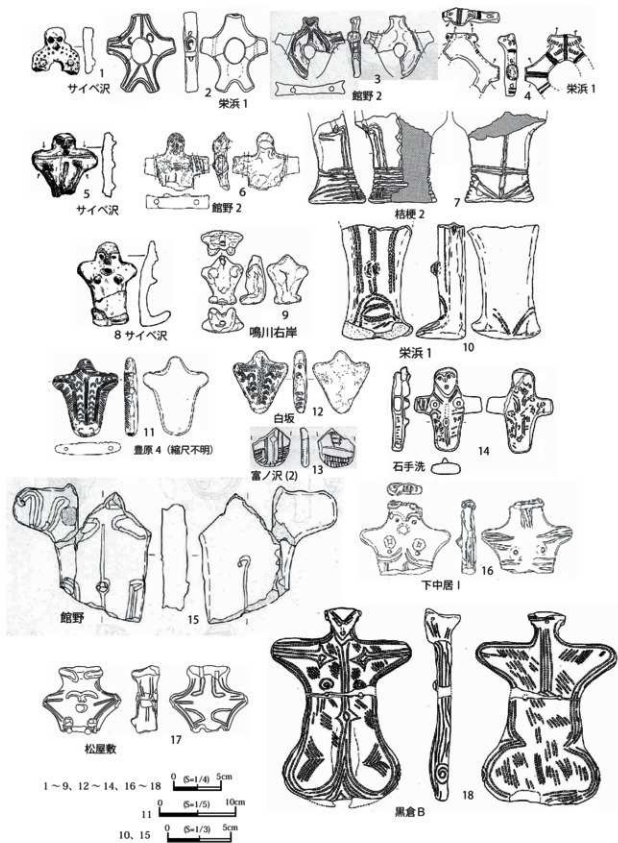


図 5-66 北海道、青森・岩手・秋田県の土偶

また、本州側でも一王寺遺跡や二ツ森貝塚、石手洗(2)遺跡の土偶では、正面の正中部に細い粘土紐が貼り付けられる(図5-66-13~15)。これは本遺跡の土偶にはほほみられない特徴である。また、体部側縁の縄文押圧や沈線文様は、津軽地域ではより高い位置、南部地域では体部途中のより低い位置でL字に屈曲するといった違いがある(図5-66-15)。

南の大木式土器文化圏との関係では境界を越えた共通性が表れることがある。円筒土器文化圏内で土偶の出現時期にあたる前期末には、図5-63-5・6のような板状O脚土偶が登場する。形態・文様とも大木式土器文化圏の土偶と同様の特徴をもつ。また、②以降では円筒土器文化圏での独自性が現れ、それが大木式土器文化圏北部の土偶に影響する。岩手県盛岡市松屋敷遺跡、花巻市下中居I遺跡の土偶には顔の表現あり、腕を横に伸ばしたつくりである。花巻市久田野II遺跡、北上市滝ノ沢遺跡などでは縄文原体押圧が、仙北市黒倉遺跡では回転縄文に縄文押圧が加わる。これらは大木式土器文化圏の土偶に円筒土器文化圏の特徴が受容された例である。

2 岩偶

(1) 三内丸山遺跡の岩偶

本遺跡の岩偶については第3章第4節で述べた。24点の岩偶があり、土偶同様に本州の円筒土器文化圏の遺跡では突出して多い。ただし、岩偶か否か判断が難しいものも3点含まれている。岩偶の所属時期では、前期が約2/3、中期が約1/3である。しかし、多くは土器型式に対応した時期の把握ができない。その中にあって第6鉄塔地区第VI a層出土の岩偶は円筒下層a式期、南盛土出土の岩偶(図3-23-5)は榎林式期とそれぞれの出土状況から判断される。

円筒下層式期の岩偶は、稲野の分析のとおり、大きさに違いがある。また、腕を折り曲げた表現と判断される例(図3-23-1~4)が多い。体部に沈線で文様が描かれるものとなひものは、およそ半々ずつである。

顔を表現した岩偶は縄文時代中期と推定される。土偶を模して眉や鼻を高く作り出し目と口を凹ませる例(図3-23-7)や、沈線で眉を表現した例(図3-23-12・13)がある。また、口の窪みや胸の突起や背面の正中線を表したもの(図5-67-1)もあり、土偶との関連がうかがわれる。

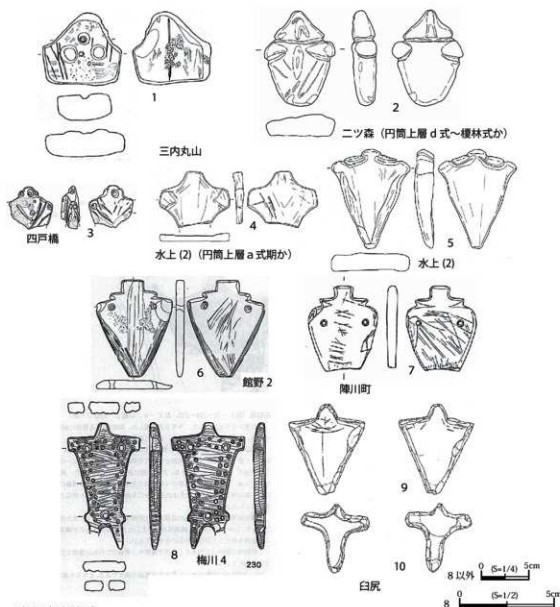
(2) 岩偶の分布

円筒土器文化圏内で本遺跡以外の縄文時代前期と考えられる岩偶出土遺跡は27遺跡、44点、中期と考えられる遺跡は15遺跡、30点である。

前期では岩木川及びその支流上中流域、また米代川上流域に多い。前者では複数出土する遺跡があるのに対し、後者では一点のみの出土遺跡が多い。そのほかの地域では、津軽海峡に面した北海道渡島半島南縁も上記2地域と同数である。青森県内の遺跡数は日本海側、太平洋側とも5遺跡である。

本州側の縄文時代中期は土偶が盛行するようになり、岩偶はわずかである。北海道では頭部がつくり出され肩部に穿孔のあるものや、十字形や手裏剣状の岩偶がつくられる。本州とは異なる岩偶の伝統が根付いていたと考えられる。

なお、前期以降、北海道の函館市南茅部では三角形や台形の岩偶が多数出土する(長沼1999)。本遺跡では類例がなく、局所的な特徴と思われる。



岩偶出土遺跡

道県	市町村	遺跡名	時期	点数
青森県	三内丸山	三内丸山	前・中期	24
青森県	青森市	熊沢	前期	1
青森県	青森市	岩蔵小谷(4)	前期	1
青森県	蓮田村	山田(2)	前期	1
青森県	黒石市	坂倉(2)	前期	3
青森県	つがる市	石神	前期	2
青森県	大鰐町	大平	前期	7
青森県	平川市	四戸橋	中期	2
青森県	西目屋村	水上(2)	中期	6
青森県	深浦町	黄平	前期	1
青森県	十和田市	明戸	前期	1
青森県	七戸町	ニツ森Ⅰ	中期か	1
青森県	七戸町	矢倉	前期	2
青森県	東北町	東道ノ上(3)	前期	1
青森県	五戸町	物段(1)	前期	1
青森県	陸上町	白鹿	前期	1
北海道	函館市	函館空港第4地点	前期	2
北海道	函館市	サイベ沢	前期	3
北海道	函館市	陣川町	中期	1
北海道	函館市	戸井貝塚	前期	1
北海道	函館市	八木A	前期	2
北海道	函館市	白灰B	中期	9
北海道	函館市	白灰小学校	中期	1
北海道	函館市	畑ノ島A	中期	1
道県	市町村	遺跡名	時期	点数
北海道	北斗市	館野2	中期	1
北海道	木古内町	善谷	前期	1
北海道	福島町	館崎2	中期	1
北海道	福島町	館崎	前期	3
北海道	八雲町	コタン温泉	中期	1
北海道	八雲町	梁浜I	中期	1
北海道	千歳市	梅川4	中期	1
岩手県	二戸市	上里	中期	1
岩手県	菅代村	力持	中期	2
秋田県	大館市	上ノ山I	前期	2
秋田県	大館市	茂屋下岱	前期	2
秋田県	大館市	猿ノ台	前期	1
秋田県	大館市	狭ノ台Ⅱ	前期	1
秋田県	大館市	池内	前期	3
秋田県	鷹角市	三ツ田	前期	1
秋田県	北秋田市	二重島A	前期	1
秋田県	小坂町	はりま塚	前期	1
秋田県	小坂町	大岱IV	前期	1
秋田県	小坂町	内岱	前期	1
秋田県	森吉町	長野岱Ⅰ	前期	1
岩手県	北上市	黒沢塚	前期	3
岩手県	西和賀町	峠下牧場Ⅰ	前期	2
岩手県	奥州市	田高Ⅱ	前期	1
秋田県	由利本荘市	塚崎	前期	5

図5-67 中期に属すると考えられる岩偶と出土遺跡

(3) 岩偶の地域差

岩偶の地域差としては大きさや出土数などが指摘されている。本遺跡出土の縄文時代前期の岩偶は、形態、文様、大きさなど、ほかの本州で出土する岩偶と変わるところはない。1遺跡で複数出土すること、異なる大きさがあることなど、津軽地方・渡島半島でのあり方と共通する。

縄文時代中期の岩偶は、岩偶としての判断や類型化が難しいほど変化に富む。本遺跡出土の図3-23-7は、前期の畑内遺跡などにみられた岩偶形土偶に対し、土偶形岩偶とでもいえる。脚部の横方向の穿孔や側縁の溝などに土偶にはない特徴が認められるのみである。図3-23-8の中央の穿孔は、北海道の土偶にみられる穿孔に似る。また、図3-25-5は千枚岩裂で二脚がつくり出され、胸の列点や肩部の穿孔などに特異さがある。類例としては北海道千歳市梅川4遺跡が挙げられる。緑泥石裂で本遺跡より小さいが、小さく突き出した頭部、二脚表現、列点、肩部への穿孔など共通点が多い。時期は中期後半で、本遺跡例に近い。

本遺跡の前期の岩偶は本州他遺跡例と共通する。しかし中期になり本州のヒト形表象が土偶へと変化するなかで、系譜上、北海道との関係を示す例がみられるようになる。

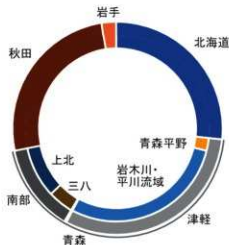


図5-68 地域ごとの岩偶出土割合

3 まとめ

円筒土器文化圏の中で土偶・岩偶は偏在し、本遺跡は極端に多い。上述のとおり円筒下層式期には岩偶、円筒上層式期には土偶がみられ、ヒト形が継続して製作・使用されたことがわかる。土偶は文様の類似性から大木式土器文化の影響のもと発生したとの見解がある。しかしそれだけではなく、初現期である縄文時代前期末の土偶形状は、大木式土器文化圏とは異なり、ヒト形としての岩偶に似る。つまり、文様意匠は大木式土器文化圏に類似するものの一方的な受容ではなく、岩偶からの系譜が確実にある。

岩偶・土偶の圧倒的な多さは集落としての本遺跡の特質を反映したものと考えられる。一般に土偶は祭祀に関連した道具と考えられ、精神文化の発達や集中の結果とみなされる。他地域から持ち込まれた土偶の存在はそれを端的に示す。本遺跡の大きな特徴の一つは交流・交易品の多さであるが、物資の交易は精神文化の交流も活発に促したことが想定される。少数ではあるものの、特に中期の岩偶にみられる北海道との関係からは、精神的なつながりの強さがうかがわれる。函館市南茅部の遺跡群に顕著な岩偶製作と、本遺跡の岩偶の多さが、海峡を越え相互に影響した可能性もある。様々な物資が行き交う中で土偶と岩偶は円筒土器文化圏独特の形態を生み出し、それを持続させつつ変化もさせた。文化圏の強い共通性は土偶と岩偶によっても創り出され、独特の精神的文化にも関わって存在したことが想起される。

(小笠原)

第5項 土製品と石製品

三内丸山遺跡の土製品・石製品を扱った第3章第5・6節では、それぞれ形態と材質で分類し説明しているが、本項では、円筒文化圏において数量的にまとまっており、類型化や時期的・地域的傾向の検討が可能な土製品と石製品をおもに取り上げた。

1 土製品 (図5-69~77)

(1) ミニチュア土器

円筒下層 a 式期から大木10式併行期まで全時期を通してみられる。

円筒下層 a・b 式期には三内丸山遺跡を中心に確認され、実用的な深鉢形土器を小型化したものが主体的である。その中でも円筒下層 a 式期にみられる2つの波頂部に穿孔が施された例は特徴的で、ミニチュア土器特有の器形である。

円筒下層 c・d 式期には深鉢形土器に台付例がみられ、実用的な土器にも同様に台付があることから、双方の特徴は連動すると考えられる。青森県八戸市笹ノ沢(3)遺跡や岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡、普代村力持遺跡で認められる口縁部が屈曲するミニチュア土器は、南部地域の円筒下層 d₁式の器形と同様である。

円筒上層 a 式～c 式期には器種が増加し、皿形や大きな脚が付く土器が確認できる。

円筒上層 d・e 式期は最も器種が多様になり、出土量が増加する。三内丸山遺跡周辺ではその傾向が最も顕著であり、脚付きの皿形やすくい具形、三足環形などの特徴的な器種がみられる。これらの特徴的なミニチュア土器は各地で確認され、この時期には三内丸山遺跡を中心とした円筒土器文化圏全体に広がっていた可能性がある。

榎林式～大木10式併行期には、最花式や大木10式併行期の土器と同じミニチュア土器や、球胴形のものが円筒土器文化圏の南部でみられる。円筒上層 d・e 式期には無文であった環形のミニチュア土器には、本時期では装飾が加えられる。

(2) 土製垂飾

① 逆V字形

逆V字形の垂飾は円筒上層 a 式～c 式期に、三内丸山遺跡や北海道八雲町栄浜1遺跡で確認される。三内丸山遺跡では無文であるが栄浜1遺跡では細かい刺突列や縄の押圧で文様が施される。細かい刺突列は円筒上層 d・e 式期における土製品類に特徴的で、栄浜1遺跡の垂飾は当該時期の可能性もある。

円筒上層 d・e 式期の逆V字形垂飾は、三内丸山遺跡や北海道函館市浜町A遺跡でみられ、刺突や沈線の組み合わせで文様が表現される。この時期には脚を表現したような長方形あるいは鉄アレイ状の土製垂飾もみられる。これにも逆V字形土製垂飾と同様に刺突で文様が施される。形態的にも類似しているため、両者の関連性が考えられる。

榎林式～大木10式併行期には、青森県六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡で長方形の垂飾が確認されている。

② 円形・環状

円筒上層 c 式～e 式期からみられ、特に円筒上層 d・e 式期の中期中葉に集中する。多くは刺突文があり、同心円状、放射状に施される。三内丸山遺跡、富ノ沢(2)遺跡、青森県西目屋村水上(2)遺跡、北海道浜町 A 遺跡で確認されている。浜町 A 遺跡では不整楕円形の垂飾がある。

榎林式～大木10式併行期には、肉厚の例があり、刺突や沈線で文様が施される。断面が山形となる例が水上(2)遺跡や一戸町御所野遺跡で確認され、前者は榎林式に比定される。三内丸山遺跡の石製品には同様の形態があり、両者の関連性が考えられる。

(3) 土製耳飾り

円筒下層 b 式期から大木10式併行期まで、漸移的な形態変遷がとらえられる。

円筒下層 b 式期前後に比定される耳飾りは三内丸山遺跡で出土し、細長い鼓形を呈する。円筒上層 a・b 式期から円筒上層 c 式～e 式期には鼓形は長さを減じ、寸詰りの形態に変化する。

円筒上層 c 式～e 式期には如意頭のような形および山形など、さまざまな形態がみられる。前者は三内丸山遺跡と水上(2)遺跡、後者は北海道函館市白尻 B 遺跡で確認されている。

円筒上層 c 式～e 式期には滑車形が現れ、鼓形と併存するが、榎林式～大木10式併行期には滑車形で占められるようになる。滑車形は円筒上層 c 式～e 式期には中央の穿孔部径が小さいが、榎林式～大木10式併行期になるとそれが大きくなる。滑車形は八戸市田代遺跡、御所野遺跡、大日向Ⅱ遺跡で確認され、大木式土器文化圏との関連性が考えられる。

御所野遺跡の滑車形耳飾りはヒレ状突起が付けられているため、大木10式併行期に比定される。

(4) 三角形土製品

円筒土器文化期には榎林～大木10式併行期に主体的にみられる土製品であり、縄文時代後期前葉まで認められる。三内丸山遺跡周辺と田代遺跡や御所野遺跡で確認される。

三内丸山遺跡やその周辺から出土した三角形土製品は、文様表現が同時期の土器や土偶と類似しているため、土器型式ごとに分類できるものがある。

三内沢部遺跡では、円筒上層 e 式期の土器が主体の堅穴建物跡から3辺を刺突で縁取るタイプが出土しており、三内丸山遺跡でも同様の表現が施されたものがある。この表現が施された三角形土製品は円筒上層 e 式期に属する可能性がある。

榎林式土器には沈線で円形や渦巻き文様と直線や曲線が組み合わせられた文様が施され、刺突文はみられない。この施文方法と表現が認められる三角形土製品は榎林式期のものと考えられる。この時期の三角形土製品は中央に円形、渦巻、三角文を配置し、各頂点に直線文を描くものを基本としている。

最花式土器には、棒状の刺突具を使用して斜めに突き刺して表現する刺突文と垂直に押す円形刺突文がみられ、沈線との組み合わせで文様が表現される。それと関連するように三角形土製品も同様の刺突文がみられ、沈線も表現される。沈線と刺突文の組み合わせ、刺突文のみの表現がみられる。

大木10式併行期の土偶には、小刺突や細沈線が施され、同様の表現が三角形土製品にもみられる。よって、これらの三角形土製品は本時期に属するものと考えられる。形態的には前の最花式期のものより小型で薄くなり、正三角形基調であったものが長細い二等辺三角形に変化する。文様は正中線が

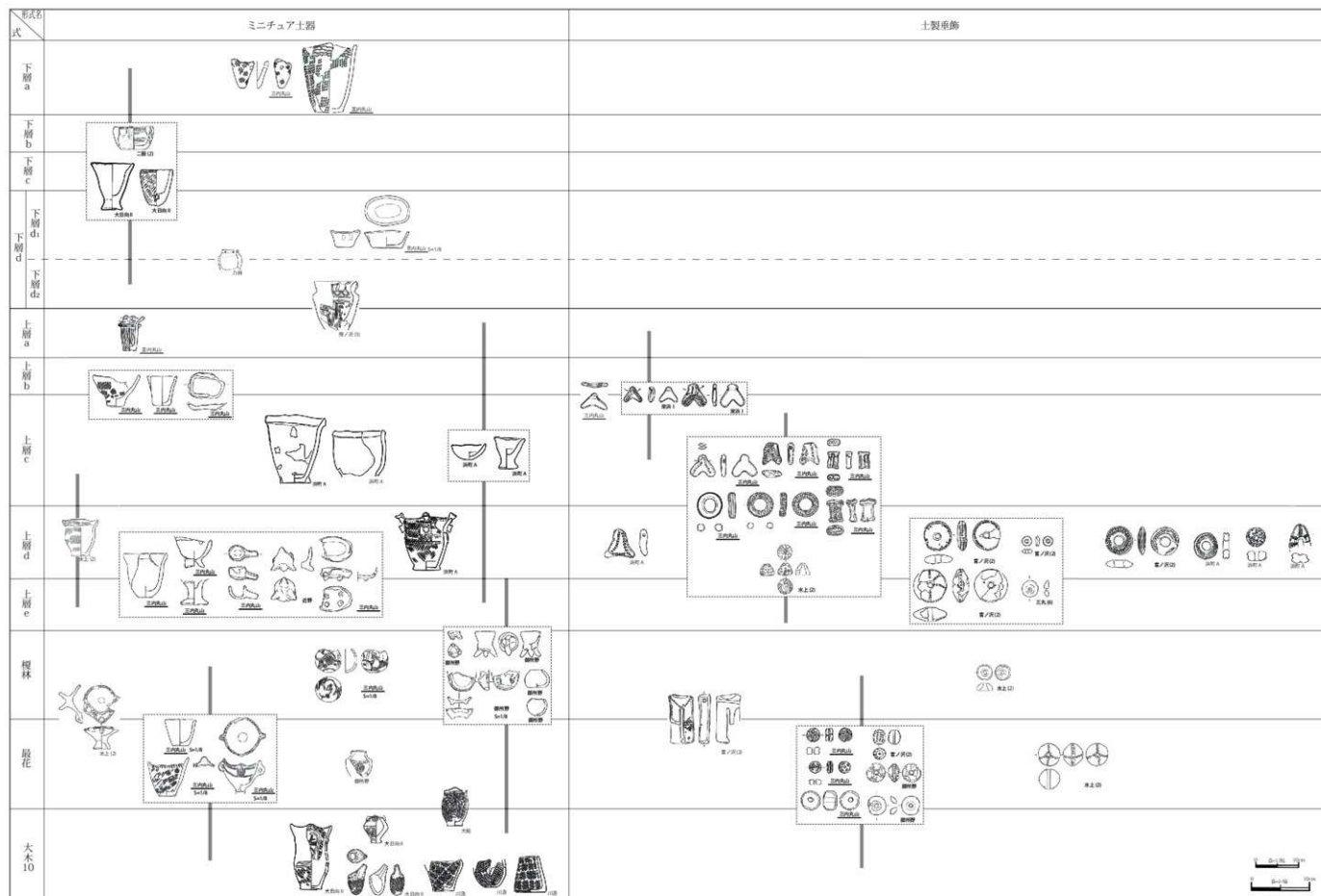


図 5-69

形式名	土製耳飾り	三角形土製品	土冠製品
式			
下層 a			
下層 b			
下層 c			
下層 d			
下層 d2			
上層 a			
上層 b			
上層 c			
上層 d			
上層 e			
椀林			
星花			
大木 10			



図 5-70

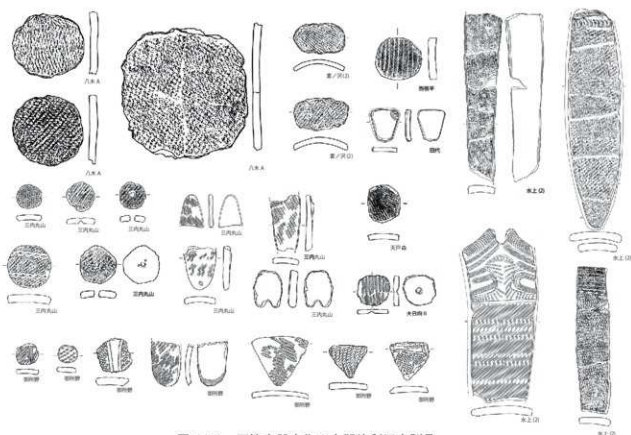


図 5-71 円筒土器文化の土器片利用土製品



図 5-72 円筒土器文化の棒状土製品

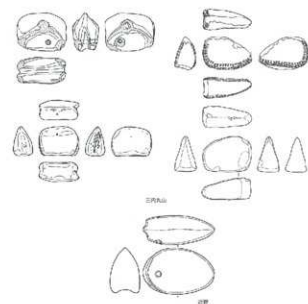


図 5-73 円筒土器文化の三角柱状土製品

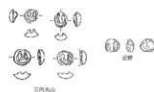


図 5-74 円筒土器文化のクルミ押圧土製品

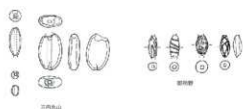


図 5-75 円筒土器文化の土製垂飾(紡錘形)



図 5-76 円筒土器文化の動物形土製品



図 5-77 円筒土器文化の斧状土製品



細沈線や小刺突で施されるものが多く、それを基準にして樹木の枝のような表現が認められるものが多い。最花式期と同じように、小刺突を表面全体に充填するものもみられる。田代遺跡や御所野遺跡にも同様の表現が施されている。御所野遺跡は粘土紐の貼り付けで表現がなされており、また一つの頂点に突起が施されるのが特徴的である。

(5) 土器片利用土製品

土器片を整形した土製品は各時期、各地域にみられる。多くは土器の胴部破片を用い円形に仕上げているが、中央部を穿孔する例もよく認められる。

北海道函館市八木A遺跡の製品は円筒下層 a・b 式期にあたり、直径10cmを超える大型品があり、なかには15cmを超える例も確認される。

円筒上層 d 式～大木10式併行期には円形以外の三角形、楕円形などに整形する場合があります。前者は水上(2)遺跡、御所野遺跡、後者は富ノ沢(2)遺跡にみられる。

(6) 棒状土製品

石棒や石刀のミニチュアが含まれ、三内丸山遺跡に多く確認されている(岩田2017)。周辺の青森市近野遺跡や三内丸山(6)遺跡でも1点ずつ出土している。ほかには御所野遺跡でまとめて出土しており、なかには三内丸山遺跡でみられる長細い紡錘形の例がある。

(7) 三角柱状土製品

石冠の土製品ともいえるもので、三内丸山遺跡では現在のところ4点確認している。ほかには近野遺跡や富ノ沢(2)遺跡、鯉ヶ沢町餅ノ沢遺跡で縄文時代中期と推測される例がみられる。

(8) クルミ押圧土製品

三内丸山遺跡以外では近野遺跡で確認され、円筒上層 d・e 式期に三内丸山遺跡の周辺遺跡にみられる特徴的な土製品である。

2 石製品

(1) 塊状耳飾り

北海道、青森平野、八戸地域に分布する。

円筒下層 a・b 式期には円形の塊状耳飾りが三内丸山遺跡でみられ、円筒下層 d 式期には三内丸山遺跡や野辺地町向田(18)遺跡、八戸市熊ノ林遺跡で三角形の例が認められる。円筒上層 c・e 式期には上下に細長い台形の形態がある。

石材には細粒凝灰岩、蛇紋岩、緑色岩などが用いられる。三角形の塊状耳飾りにはおもに蛇紋岩が使われている。

(2) 有孔石製品

穿孔された石製品を総称するが、短冊形、三角形、円形などの形態があり、いくつかには時期的な

特徴が認められる。

円筒下層 b 式～d₂ 式期には、下辺が広い短冊形で扁平な石製品が特徴的である。上端部 1、2 か所に穿孔され、刺突により鋸歯文を表現する例も含まれる。また、丸みを帯びたもの、ランダムに刺突が施されたものや側面に 1 条の溝を巡らす例もある。三内丸山遺跡、青森市稲山遺跡、大鰐町大面遺跡、秋田県大館市池内遺跡から出土している。鋸歯状の刺突文を施した大面遺跡の例は円筒下層 b 式期に比定できる。同時期には、ほかに逆三角形や楕円形で上端部に 2 か所に穿孔される例があり、三内丸山遺跡、稲山遺跡、池内遺跡で出土している。逆三角形の石製品はサメ歯との関連性も指摘されている（福田 2000）。

円筒下層 a 式～d 式期の縄文時代前期中葉～末葉には、八戸市畑内遺跡から石斧基部に 1 か所穿孔のある製品がある。

円筒上層 a・b 式期には、前期にみられた逆三角形状で扁平の石製品が引き続き認められる。

円筒上層 c 式～e 式期には、三内丸山遺跡周辺で、三角形や紡錘形を呈し扁平な断面の最も厚い中央部分に穿孔された石製品がまとまって出土している。断面がハの字形を呈する有孔石製品も三内丸山遺跡周辺で認められるが、ほかには御所野遺跡でも確認されている。前期にみられた装飾性の高い短冊形の石製品は継続してあるが、小型で装飾はなくなり無文のものが主体的となる。

榎林式から大木 10 式併行期には長細い石を研磨し、1 から数か所に穿孔された石製品が特徴的で、三内丸山遺跡や御所野遺跡に認められる。

(3) 環状石製品

縄文時代前期中葉から中期を通して無文の製品が主体的である。円筒下層 d 式期に沈線で放射状の文様が刻まれ、側面に溝が 1 条巡る滑車形石製品がむつ市熊ヶ平遺跡でみられる。三内丸山遺跡では最花式期に、沈線で 4 分割する文様が表現される石製品がある。土製品にも同じ文様が施される例がある。異なる素材の製品でも共通の文様が施される。

(4) 容器状石製品

縄文時代前期中葉から中期を通してみられる石製品で、凝灰岩などの軟らかい石を削り抜いて作られる。

円筒下層 a 式～d 式期の前期中葉から末葉では、三内丸山遺跡や周辺の青森市岩渡小谷(4)で確認されている。三内丸山遺跡では岩偶に類似した形態のものを削り抜くものもみられる。

円筒上層 c・d 式期には三内丸山(6)遺跡でみられ、中期にも継続して確認される石製品である。

(5) 板状石製品

北海道の八木 A 遺跡でまとまって出土している石製品であり、円筒下層 a・b 式期に限定される可能性がある。有孔石製品の短冊形や三角形と共通する形態だが、穿孔はない。

逆三角形、台形、長方形、三角形、分銅形、男根状、五角形などの形態が認められる。分銅形は瓢箪形と報告されることもあり、松前町高野遺跡のダルマ形石製品と同じである。逆三角形の製品はおもに盛土から出土している。

三内丸山遺跡では円筒下層 d 式期に樹状の文様が刻まれた例、中期には無文で丸みを帯びた三角形の例がある。

(6) 円盤状石製品

円盤状に加工された石製品で、円筒下層式期を中心に確認される。

円筒下層 a 式期には畑内遺跡で小型の例があり、円筒下層 a・b 式期には三内丸山遺跡で直径が10cmを超える製品がある。先がとがった工具ですべての面にひっかき傷を施し、中心付近に数か穴をあけた箇所が確認され、粉々に割れた状態で北の谷から出土している。八木A遺跡では周囲を打ち欠いて円盤状に整えた例がある。池内遺跡でも円筒下層式期の円盤状石製品があり、三内丸山遺跡同様にひっかき傷が施され、なかに格子状になる例もある。円筒下層 b・c 式期には青森市熊沢遺跡に扁平に研磨された製品がある。縄文時代中期では円筒上層 d・e 式期に三内丸山(6)遺跡で同じ形状の石製品がみられる。

(7) 石冠類品

円筒上層 d・e 式を中心に三内丸山遺跡、近野遺跡、水上(2)遺跡で確認される。北海道岩内町東山 I 遺跡などにある側縁有溝石器と呼ばれる製品もこれに類した石製品である。

水上(2)遺跡では円筒上層 b・c 式期から認められる(青森県教育委員会2017)。

(8) 石剣

扁平な礫を打ち欠いたり磨いたりすることで、三角形や紡錘形、有茎石鏃のような形態に成形したものである。

南部地域におもにみられ、畑内遺跡からはまとまった数が確認されている。畑内遺跡から出土した石剣は円筒下層 a 式期に属するものが多い。同遺跡からは野球のバットのグリップエンドのように成形するものもみられる。ほかに前期では東北町東道ノ上(3)遺跡、三内丸山遺跡でも時期は明確に比定できないが出土している。北海道の八木A遺跡でもみられる。

同じ系列のものかは検討を要するが、八戸市松ヶ崎遺跡、八戸市石手洗遺跡からも出土している。

(9) カツオブシ形石製品・錘球形石製品・イモガイ形石製品

三内丸山遺跡では出土していないが、北海道八木A遺跡から円筒下層 a・b 式期のものが出土している。

(10) 男根状石製品

青森県では、三内丸山遺跡、蓬田村山田(2)遺跡、八戸市松ヶ崎遺跡(西長根遺跡)、つがる市牛潟(1)遺跡で確認される。三内丸山遺跡例は円筒下層 c・d 式期で、山田(2)遺跡例も円筒下層 d 式期に属する。ほかは縄文時代前期中葉から末葉の時期である。北海道では円筒下層 a・b 式期の八木A遺跡で確認されている。

形式 式	珠状釘飾り	有孔石製品					環状石製品	円盤状石製品・石冠類品	容器状石製品	軽石製品
		台形	三角形	円形	楕円形	球形				
下層 a										
下層 b										
下層 c										
下層 d										
上層 a										
上層 b										
上層 c										
上層 d										
上層 e										
埋鉢										
曇花										
大木 10										

図 5-78

(11) 石棒

円筒土器文化の石棒は、おもに形態で分類でき、Ⅰ円筒形 a 長細い b 寸胴、Ⅱ紡錘形 a 長細い b 寸胴 c 先細り、Ⅲ有頭形、Ⅳ自然礫を見立てたものがある。ⅠやⅡの寸胴なタイプに端部に同心円や十字の彫刻が施される端部彫刻石棒と呼称されるものがある。

円筒上層 a～c 式期にはⅠあるいはⅡ類の寸胴の形態が確認される。笹ノ沢(3)遺跡の石棒は上層 a 式期に属し、最も古いものの一つと考えられる。円筒上層 d・e 式期には端部には同心円状や十字形に文様が施された端部彫刻石棒と呼称されるものが多くみられる。

榎林式期には寸胴の端部彫刻石棒もあるが、紡錘形の長細い形態Ⅱ a 類が特徴的である。最花式期にはⅡ類の先細りの形態が主体的となる。大木10式併行期にはⅠ類の長細い形態がみられる。

水上(2)遺跡では、円筒上層 b 式～大木10式併行期まで有頭形が確認されている(青森県教育委員会2017)。

Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ類には土製のミニチュアとも考えられる棒状土製品がある(岩田2017)。

(12) 石刀

断面が楔形となる刃部が作出されるものを石刀としている。刃部の位置と形態の特徴、整形の特徴で4種類に分類される。

- ①扁平で打ち欠き痕や擦痕がみられるもの。
- ②野球のバットのような形態で、柄上に刃部が作出され、その上は断面円形部分が続くもの。
- ③包丁のような形態で、柄上がすべて刃部となるもの。
 - a 柄頭がバットのグリップエンド状になるもの。
 - b 扁平なもの。
- ④刃部が全体形の中央付近に刃部が作出されるもの。

円筒下層 c・d 式期の前期には①類が特徴的な製品で、三内丸山遺跡や畑内遺跡で認められる。

円筒上層 a～c 式期に②類がみられ、円筒上層 d・e 式期に多く確認されるため、中期中葉に特徴的な石製品と考えられる。中期の石刀は、石棒や青竜刀形石器と比較し、破損した部分が欠失していることが多く、全体形のうかがい知れるものが少ない。

②類の土製のミニチュアが三内丸山遺跡で1点確認されている(岩田2017)。

(13) 青竜刀形石器

縄文時代中期後葉から末葉に、円筒土器の分布圏とおおよそ一致するように分布がみられる石器である(江坂1965、富樫1983)。瘤のあるものとないで分類でき、前者から後者への変遷が考えられている(富樫1983)。刃部が内に反る形態が主体的であるが、全体が三角形(富ノ沢遺跡)、刃部が方形(江刺家遺跡)の変異といえるものもみられる。

函館市南茅部地区では、白尻B遺跡と川汲遺跡で各50本以上、地区全体では約130本と、ほかの遺跡からの出土量を圧倒しており、製作途中で廃棄された未製品が多いことから生産地だった可能性が高い(朝日新聞社1997)。

形態的特徴の類似性から、石刀②類から青竜刀形石器に変容したとも考えられる。

(14) 玉製品 (ヒスイ・コハク等)

北海道・北東北のヒスイ製品については福田友之が「津軽海峡域における先史ヒスイ文化」(福田2014)として、当該地域のヒスイ製品を集成し検討しているため、詳細はそちらに譲りたい。福田によれば、縄文時代では青森市宮田館遺跡に竪穴建物跡から出土した円筒下層d₂式期に属するヒスイ製玉の未製品が最も古いものである(福田2014)。円筒上層a式期には、餅ノ沢遺跡から出土した方形大珠がある(福田2004)。円筒土器文化圏においては、現在のところ20点程度のヒスイ製品が確認されている。

コハク製品についても、福田が青森県を中心に詳細にまとめている(福田2014)。池内遺跡では、円筒下層a・b式期の玉が出土しており、円筒土器文化圏では最も古い出土例と考えられる。十和田市明戸遺跡や向田(18)遺跡から出土したコハクの玉は縄文時代前期末葉のものであるため、青森県で最も古い(福田2004)。円筒上層d式期では三内丸山(6)遺跡で玉が出土している。

(15) 軽石製品

円筒下層d式期から中期にかけてみられる石製品である。定型的なものとそれ以外があり、前者には有孔石製品、大珠、石冠などの模造品がある。

円筒下層d式期には三内丸山遺跡、むつ市稲平遺跡、五戸町西張平遺跡などで北海道式石冠を模した例がある。円筒上層a式期には笹ノ沢(3)遺跡で、大珠を模した形態の製品がある。

3 まとめ

円筒下層a式～d式期(縄文時代前期中葉～末葉)には石製品が、円筒上層a～大木10式併行期(中期)には土製品が主体であるが、円筒下層a～d式期(前期中葉～末葉)、円筒上層a～c式期(前期前葉)、円筒上層d・e式期(中期中葉)、榎林～大木10式併行期(中期後葉～末葉)にそれぞれ時期的特徴がみられる。

円筒下層a式～d式期は、石製品が主体で、南部地域、津軽地域、北海道南部地域などで地域性がみられる。

円筒上層a式～c式期は土製品、石製品ともあまり確認されない時期である。

円筒上層d・e式期は三内丸山遺跡周辺にミニチュア土器、垂飾、棒状土製品、クルミ押圧土製品などが集中し、当該時期に三内丸山遺跡周辺に特徴的な土製品が各地に影響を与えていた可能性がある。

榎林式～大木10式併行期は、それまで拠点集落として継続する三内丸山遺跡、水上(2)遺跡、富ノ沢(2)遺跡、御所野遺跡で土製品が集中的に見つかるが、円筒上層d・e式期にみられた主体的なあり方ではなく、南東北地域の大木式土器文化の影響を受けている。同時期の北海道の拠点集落である函館市大船遺跡には、ミニチュア土器以外の土製品、石製品はほとんどみられない。

前期には石製品が主体的で地域的特徴があり、中期中葉では三内丸山遺跡周辺からさまざまな土製品がみられ、量的にも他地域を圧倒することは、文化圏全体に敷衍できないことではあるが、青森平野において縄文時代前期末葉に拠点集落が分散して存在する状況から中期中葉に三内丸山遺跡周辺に拠点集落が集中し、なおかつ巨大化する現象と関連している可能性がある。

(岩田)

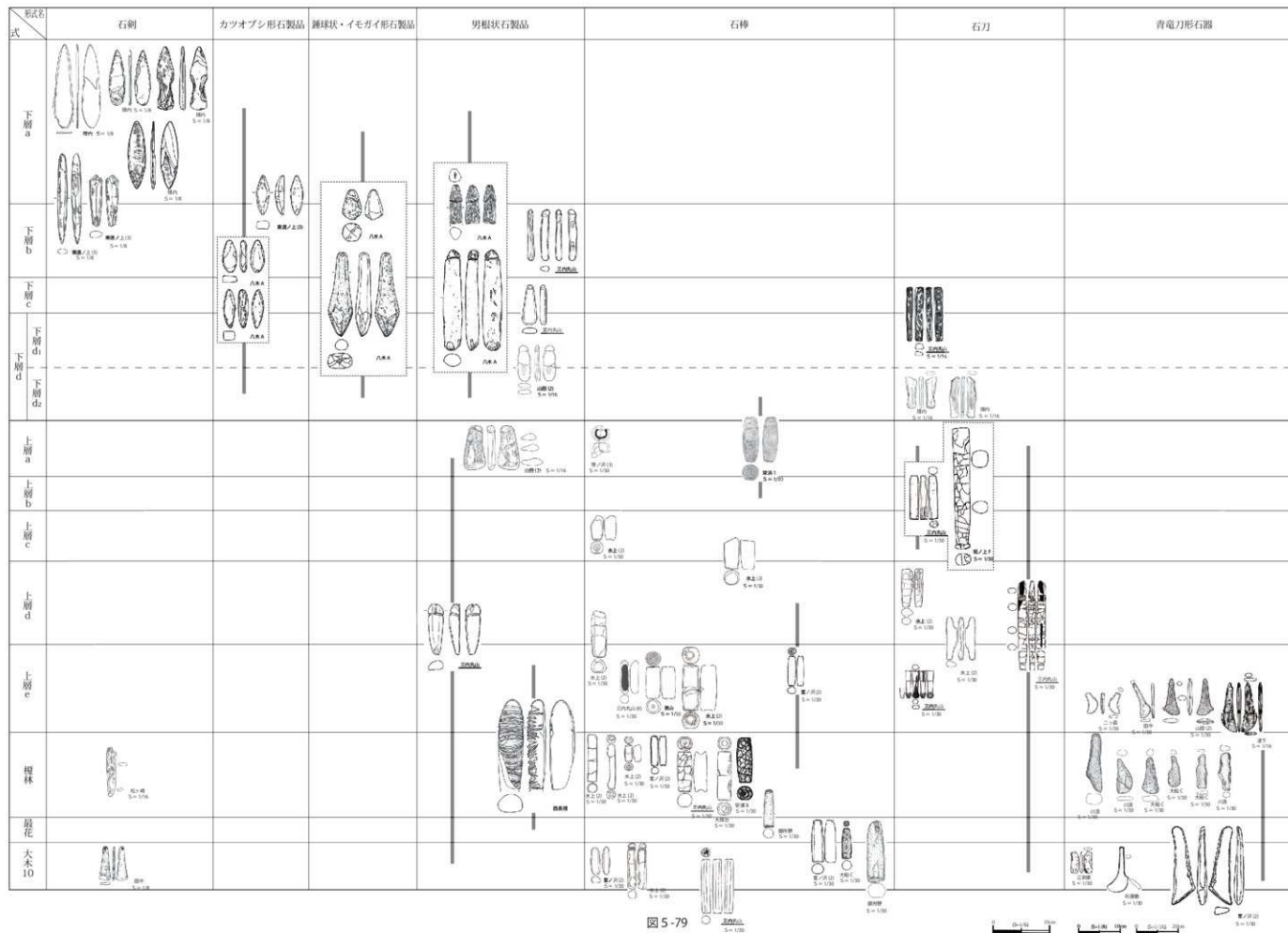


図 5-79



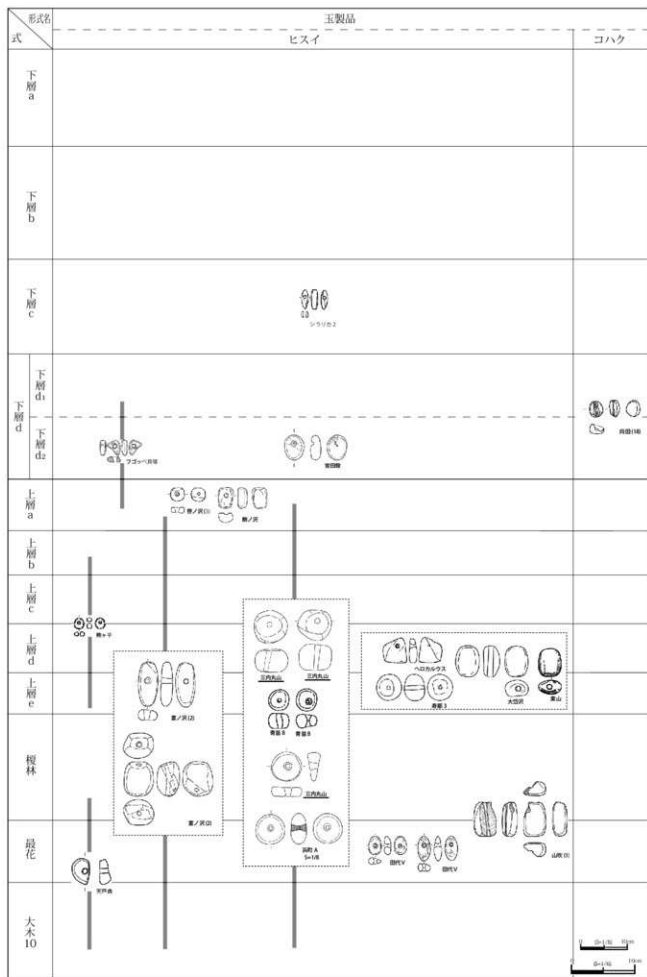


図 5-80

第6項 骨角器

三内丸山遺跡では第6鉄塔地区と北の谷を中心に約600点に及ぶ骨角器が出土している。釣針や鋸頭、針等の生産用具、ヘアピンや玉類といった装飾品、骨刀等の祭祀具で構成され、資料の質・量に加え、確実な時期が担保されたものとして、円筒土器文化の骨角器を代表する資料群となっている。

本項では、北海道から東北地方北部の縄文時代前期中葉から中期後葉の骨角器を概観し、広域的な視点から同文化の骨角器の特徴をまとめる。また、製作残滓や未製品についても検討を加え、素材選択と製作技術の観点から三内丸山遺跡の骨角資源利用の特徴をまとめる。

1 円筒土器文化の骨角器

北海道南部から東北地方北部の遺跡出土骨角器の中から、縄文時代前・中期の代表的な資料を選び、前期後半（円筒下層式）と中期（円筒上層式～最花式）に分けて図示した（図5-81・82）。各資料の帰属時期は、発掘調査報告書の所見に従ったが、出土状況が不明確なものについては、遺跡の主要時期に基づき配置した。

（1）円筒下層式期

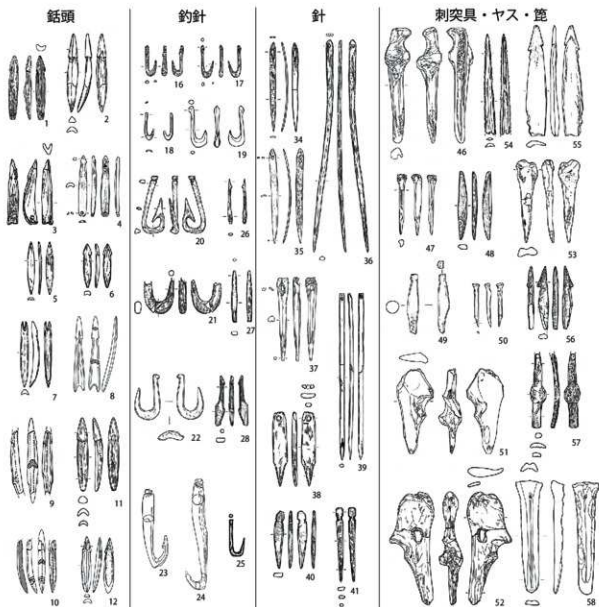
単一時期の遺構または層位から出土しており、土器型式レベルで細別時期の判明している資料としては、三内丸山遺跡第6鉄塔地区（円筒下層 a・b 式：青森県教育委員会1998）、大矢沢野田（1）遺跡（円筒下層 a 式：青森県教育委員会1999）、東道ノ上（3）遺跡斜面地区貝層（円筒下層 a 式：青森県教育委員会2006）、白座遺跡（円筒下層 a 式：階上町教育委員会1989）、虎杖浜2遺跡（円筒下層 a 式：財団法人北海道埋蔵文化財センター2002）、コタン温泉遺跡第3貝塚5E・5K層（円筒下層 d 式：八雲町教育委員会1992）、静川22遺跡（植苗式：苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター2002）、サイベ沢遺跡第1地点18層（円筒下層 d 式：市立函館博物館1958）出土資料がある。上記以外については、円筒下層式期のいずれかの型式が想定されるが、細別時期の確定が困難なものである。

① 生産用具

生産用具には、鋸頭、釣針、針、刺突具、ヤス、篋等がみられる。鋸頭は全て開高式で、閉高式はみられない。尾部の形状に複数のタイプが存在し、穿孔が加えられているもの（図5-81-3・4）、二又にわかれるもの（図5-81-8）、装飾のあるもの（図5-81-10）等がある。また、北黄金貝塚から出土した図5-81-7は尖頭部に鎌を装着する根挟みが加工されている。長さは35mmから、80mm程度まで様々なサイズが含まれるが、小型のサイズには破損した尾部を再調整して補修したと考えられる例もみられる。

釣針は単式釣針が主であるが、三内丸山遺跡や虎杖浜2遺跡には結合式釣針の針先も少量みられる（図5-81-26～28）。単式釣針は、針先にアグのない小型品（図5-81-16～19）とアグを備えた大型品（図5-81-20）があり、前者の方がやや多い傾向がある。このほか、軸部を強調し肥厚させた特徴的なタイプ（図5-81-23・24）が八戸市周辺の遺跡で確認されている。同種のものは前期大木式の宮古市崎山貝塚や嶽ヶ崎山貝塚等、円筒土器文化圏外でも出土しており、共通の漁具を使用した漁撈技術が土器型式の広がりを超えた範囲で広く保持されていたことを示すものである。

円筒下層式期



円筒上層式最花時期



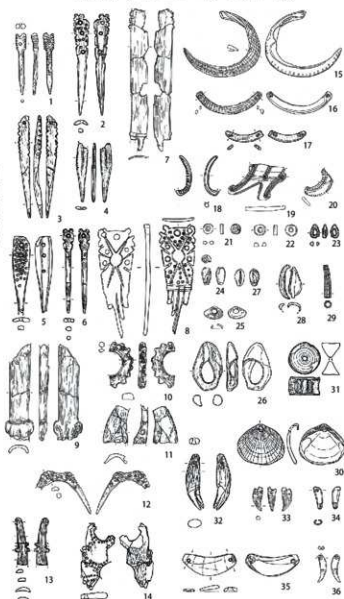
遺跡名：三内丸山遺跡（青森県）1・16～18・26・27・34・36・46・47・51・53、虎杖伎2遺跡（北海道）2・21・28・40・48、大矢沢野田（1）遺跡（青森県）3、東道ノ上（3）遺跡（青森県）4・20・35・37・50、北黄金貝塚（北海道）5～7・39・54・55、一王寺遺跡（青森県）8・22・49、オセドウ遺跡（青森県）9・10、静川22遺跡（北海道）11・38・41・52・57、コタン温泉遺跡（北海道）12・56、二ツ森貝塚（青森県）13・14・30・32・59・60、サイベ沢遺跡（北海道）15・25・33・44・45・62、白座遺跡（青森県）19・58、八戸市白浜海岸（青森県）23、八戸市鮫漁場付近（青森県）24、堂刈沢貝塚（秋田県）29・43、最花貝塚（青森県）31・61・64、古屋敷貝塚遺跡（青森県）42、松ヶ崎遺跡（青森県）63
 器種名：鈎頭 1～15、単式鈎針 16～25・29～31、結合式鈎針 26～28・32・33、針 34～45、刺突具 46～57・59・60・62・64、筥 58・63、棒状角器 61

図5-81 円筒土器文化の骨角器（1）

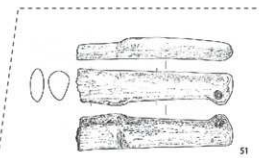
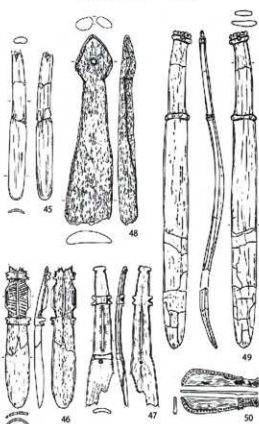
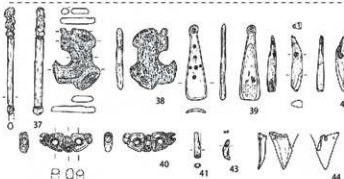
装飾品（ヘアピン・櫛・貝輪・玉）

祭祀具（匙・骨刀）

円筒下層式期



円筒上層式期
最花式期



遺跡名：三内丸山遺跡（青森県）1・32・33・35・45・48、虎杖浜2遺跡（北海道）2・4・5・14・17、北黄金貝塚（北海道）3・46・47・49、静川22遺跡（北海道）6・13・23・26・28～30、東道ノ上(3)遺跡（青森県）7・9～12・15・16・19～22・24・25・27・36、二ツ森貝塚（青森県）8・37～43・52、田小屋野貝塚（青森県）18・34、コタン温泉遺跡（北海道）31、富ノ沢(2)遺跡（青森県）44、八幡堂遺跡（青森県）50、古屋敷貝塚遺跡（青森県）51
器種名：ヘアピン 1～6・37、櫛 7・8、装飾品 9～14・38～41、貝輪 15～17、貝製装飾品（玉・垂飾） 18～30、サメ椎骨製垂飾 31、牙製垂飾 32～36・42～44、匙 45～47、骨刀類 48～52

図5-82 円筒土器文化の骨角器（2）

針は生産用具の中でも特にその割合が高く、三内丸山遺跡では出土点数が最も多い。頭部に紐掛け状のノッチが加えられているものは、虎杖浜2遺跡の他、静川22遺跡からも出土している(図5-81-40・41)。基部に穿孔のある典型的なタイプは、素材や長さにも様々な内容があり、三内丸山遺跡と東道ノ上(3)遺跡では、肋骨素材の針(図5-81-34・35)が多く含まれている(斎藤2013)。

刺突具は、陸獣四肢骨の破断面に生じた鋭利な端部を加工し、機能部としたもので、クマの尺骨(図5-81-46)、ムササビの脛骨(図5-81-47)・橈骨(図5-81-50)、シカの尺骨(図5-81-51)、エイの尾棘(図5-81-54)を素材とするものがみられる。シカの尺骨を素材とする刺突具は、骨体に穿孔がみられるもの(図5-81-52)もあり、魚を捌くナイフや編組製品の製作に使用される編み針として使用された可能性がある。

② 装飾品

装飾品はヘアピン、櫛、貝輪、玉類がみられる。ヘアピンは針の基部側に装飾性の高い意匠が施されたもので、側縁に鋸歯状の刻みが増えられた例(図5-82-1~4)や回転穿孔による列点模様が増えられた例(図5-82-2・5・12)などがある。櫛は歯の根元部分に結束帯を示す隆帯表現が増えられており、ヘアピンと同様、回転穿孔による精巧な装飾意匠が伴う例(図5-82-8)もある。貝輪は、素材にバンケイガイを使用しているものが多く、殻の中央を穿孔し、研磨して仕上げる環状タイプ(図5-82-15)と腹縁部の破片を研磨し、端部に穿孔したものを連結して使用する半環状タイプ(図5-82-16・17)がみられる。また、玉類については、二枚貝の破片を素材とする平玉類(図5-82-21・22)、マクラガイ(図5-82-24)やクチベニガイ(図5-82-25)に穿孔を加えたものなど、素材となった貝の種類、加工方法も多様なものがある。哺乳類の牙(犬歯)を加工したものは、クマ(図5-82-32)、アシカ(図5-82-33)、イルカ(図5-82-34)、イノシシ(図5-82-35)、キツネ(図5-82-36)の歯根部等に穿孔を加えたものがある。

③ 祭祀具

祭祀具は匙・骨刀がみられる。骨刀は鯨骨を素材とし、被熱しているものが多い。北黄金貝塚から出土した図5-82-49は白色に変色し、刀身部が著しく湾曲している。

(2) 円筒上層～最花式期

円筒上層式期以降は、報告されている資料の点数が少なく、定量的な組成の検討が困難な状況にある。器種構成については、円筒下層式期と同様、生産用具と装飾品・祭祀具に分けることができ、生産用具の比率が高い。

土器型式レベルで細別時期の判明している資料では、サイベ沢遺跡第2地点4層(円筒上層a式:市立両館博物館1958)、萱刈沢貝塚FP9(円筒上層a式:八竜町教育委員会1979)、富ノ沢(2)遺跡第29・285号住居跡(円筒上層e式:青森県教育委員会1992)、松ヶ崎遺跡第31号住居跡(椋林式:八戸市教育委員会1994・1996)、最花貝塚(最花式:金子・橋・奈良1983)出土資料がある。上記以外については、円筒上層式期から最花式期にかけての時期が想定されるが、その特定が困難なものである。

① 生産用具

生産用具については銚頭、釣針、針、刺突具、笥、錐、棒状角器がみられる。銚頭のうち図5-81-13は前期末葉～中期前葉、図5-81-15は円筒上層a式の時期に帰属するとされている。いずれも、開高

式で円筒下層式期とはほぼ同じ形態である。図5-81-14も開筒式に分類されるものであるが、頭部と尾部の境に段差を設け、アスファルトを塗布することで索紐の締着が図られている。本資料の時期については、円筒上層d式～覆林式とされ、二ツ森貝塚では同様のタイプが3点以上確認されている。円筒下層式期にはみられない形態であり、中期中葉以降に特徴的なタイプとなる可能性がある。

釣針は、円筒下層式期と同様、単式釣針と結合式釣針の両方が出土している。中期前葉の資料には、アグのない単式釣針（図5-81-29・30）とアグのある結合式釣針（図5-82-32・33）がみられる。図5-82-31の最花貝塚出土資料の時期は中期後葉とされているが、特徴的なチモトの作りで、円筒下層式や中期前葉にはみられないタイプである。

この他、針・筥・錐・刺突具については、いずれも円筒下層式期にみられるものとはほぼ共通した内容である。但し、二ツ森貝塚や最花貝塚では覆林式期以降の資料としてそれ以前にはほとんどみられなかった棒状角器（図5-81-61）が目立つようになる。また、鉾頭（図5-81-14）やヤス（図5-81-64）にアスファルトの使用がみられるようになるなど、中期前葉以前には確認できなかった新たな特徴が現れてくる。また、その一方で、円筒下層式期の三内丸山遺跡や東道ノ上(3)遺跡の針にみられた肋骨素材の利用については、確認できなくなる。

② 装飾品

装飾品については、ヘアピン、垂飾品、玉類がみられる。図5-82-37・39・41・43は円筒下層d式～円筒上層b式期、図5-82-38・40は円筒上層d～覆林式期、図5-82-44は円筒上層e式期と推定されている。器種構成、形態ともに円筒下層式期とは同様の傾向がみられる。

③ 祭祀具

祭祀具としては、鯨骨製の骨刀がみられるのみである。図5-82-51・52の時期は中期と報告されており、細別時期までは特定されていない。いずれも柄と刀身の区別が明瞭で、片刃の表現がなされている。三内丸山遺跡では北盛土から被熱し、白色化した鯨骨製の本器種が碎片の状態で大量に出土しており、火に関わる儀式の中で用いられていた可能性がある。

2 素材選択と製作技術

三内丸山遺跡では、有機質遺物が大量に出土した第6鉄塔地区と北の谷の調査において、堆積土の悉皆的な水洗選別が行われ、大量の骨角器が検出された。ここで得られた資料には製品のみならず、未製品や製作残滓が多く含まれ、その内容を分析することで、素材選択や製作技術の検討が可能である。次に、水洗選別を通して回収された製作残滓と未製品の内容を把握し、円筒土器文化の他遺跡の事例と比較を行い、三内丸山遺跡の骨角資源利用の特質について考察を加える。

(1) 三内丸山遺跡の骨角器

三内丸山遺跡では第6鉄塔地区と北の谷を中心に596点の骨角器が出土しており、資料の帰属時期は第6鉄塔地区が前期中葉（円筒下層a・b式）、北の谷地区は前期後半である。単式釣針、結合式釣針、鉾頭、刺突具、錐、骨針、針入れ、筥、棒状製品、匙等がみられ、出土点数では生産用具が多く、垂飾やヘアピン等の装飾品、骨刀等の祭祀具との比率は概ね4：1である。この他、製作残滓を含む加工痕のある骨・角が93点出土しており、全体量の約2割を占める。製作残滓と未製品の存在から、

集落内で骨角器の製作や補修に伴う加工が頻繁に行われていた様子がうかがえる（第3章第7節）。

骨角器に利用されている素材と狩猟された動物種との間にどのような違いがみられるか、第6鉄塔地区から出土した骨角器の素材にみられる動物種・部位の傾向と動物遺存体の組成を比較した（斉藤2016）。その結果、骨角器の素材に確認される動物種は18種に及び、小型陸獣や鳥類の四肢骨から中型陸獣の肋骨に至るまで、様々な部位が加工されていることが判明した。また、一般的に刺突具素材を中心に多用されることの多いシカの中手・中足骨と鹿角が占める割合は約12%に留まり、肋骨よりも少ないことが明らかとなった（図5-84）。

鹿角は、擦切り溝が複数刻まれた資料（図5-83-10）から、素材を一定程度の大きさに細かく分割した上で加工が進められていたことがわかる。擦切り溝は、鹿角表面に縦走してみられる溝状構造（縦溝）に沿って石器で削り込んだもので、緻密質に一定程度の深さで溝が作出された後に剥片を楔の要領で打ち込み、縦長の板状素材が裂き取られている。三内丸山遺跡では板状素材そのものの出土はみられないが、一定の厚さと長さが求められる釣針や棒状の刺突具などは、そうした半素材の段階を経た上で目的とする器種の外形を削りだし、製品へと加工が進められていたと考えられる。

鹿角と並んで骨角器の素材に多用されるシカの中手・中足骨も、擦切り加工で分割してから製品に仕上げられており、工程面では共通した特徴がみられる。これらの部位については、出土資料に残滓類がほとんど確認できず、徹底的に加工・消費されたと考えられる。わずかに確認された碎片には前面なし後面の縦溝に沿った人為的な擦切り加工痕跡があり、分割加工の大半が同手法によるものであったことがわかる。

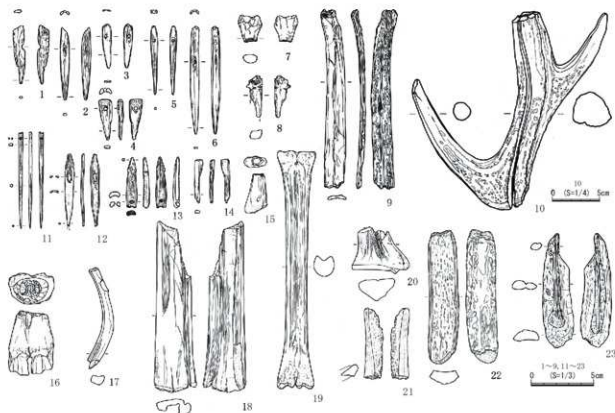


図5-83 補修加工品・製作残滓・未成品類

1-10 三内丸山遺跡、11-23 東道ノ上(3)遺跡

この他、中型陸獣の肋骨や小型陸獣の四肢骨の利用が確認されているが、これらの部位が骨角器素材として用いられる事例は全国的にも珍しいといえる。肋骨については製作残滓の検討から「端部の擦り切り除去」、「鋼線の研磨」、「前面と後面の分割」、「長軸方向の擦り切り分割」、「研磨による海綿質の除去・機能部の調整」、「ケズリによる針孔の穿孔」といった一連の工程が確認されている。1本の肋骨から4本の製品を作り出すとしている未製品(図5-83-9)もみられ、残滓の発生を抑制しつつ素材を余すことなく消費しようとする姿勢がうかがえる。その点、技術的な単位と工程は、鹿角や中手・中足骨に対して行われるものほとんど変わらない(齊藤2013)。また、小型陸獣の四肢骨については、大半が骨幹の中心を叩き割り、割れ口に生じた鋭利な破断面を機能部とし、研磨調整して刺突具に加工されたものであるが、ノウサギやムササビの他、カモ類もみられ、狩猟された動物種全般について徹底的な利用がなされている(図5-81-47)。

資源利用の持続性という観点に関しては、いくつかの器種で、補修痕跡のみられるものが含まれていることが重要である。骨針の中には、針孔が破損した後に、位置をずらして再穿孔し、修復されている例がみられる。また、針孔と幅のサイズに対して長さが不釣り合いに短いもの(図5-83-2~6)は、針先が折損した後に再研磨し、補修されたと考えられる。この他、折損部に新たな加工を加えることによって異なる器種へ転用が図られている例もあり、図5-83-1はヘアピンの破片が鎌に転用されたと考えられるものである。こうした資料の存在から、破損に直面してもできるだけ長期にわたる使用が可能になるよう、骨角器の使用に際して補修や転用を効果的に組み込んでいたことがわかる。

(2) 東道ノ上(3)遺跡の骨角器

青森県東北町東道ノ上(3)遺跡では、三内丸山遺跡と同時期の縄文前期中葉(円筒下層a式期)の骨角器595点が出土している。主な器種としては骨針、釣針、鈎頭、刺突具、鎌、棒状鹿角製品、針入れがあり、全体としては生産用具が多いが、ヘアピンや櫛などの装飾品、骨刀などの祭祀具もみられる。生産用具と装飾品・祭祀具の比率は、7:3で、製作残滓と未製品約180点(全体量の約3割)を含み、集落内で製作・加工がおこなわれていたことを示す。

同遺跡では、貝塚から獣骨が出土しており、その中でも最も量が多いのはシカで、ノウサギ、イノシシ、ムササビがこれに続く(第5章第4節第3項図5-93)。中型陸獣(シカ・イノシシ)の占める割合が約6割であるのに対し、小型陸獣(ノウサギ・ムササビ)は4割程度で、その中でも、シカについては、出土獣骨全体の4割近くを占めることから、骨角器素材の主要部位である鹿角や中手・中足骨に関しては、三内丸山遺跡より入手しやすい環境にあったと考えられる。

骨角器の素材となった動物種・部位の傾向としては、動物種数は三内丸山遺跡よりも少ない9分類群で、加工痕のない動物遺存体と比較すると、シカの割合が著しく高い。中型陸獣は鹿角(227点、38%)が圧倒的に多く、刺突具にシカの中手・中足骨、骨針に肋骨が多く用いられる傾向がある(図5-84)。また、ノウサギやムササビなどの小型陸獣骨も少量ではあるが確実に利用されており、狩猟で得た獲物から取り分けられた骨が素材の中心であったと考えられる。鹿角については、未加工品を含め、落角が5点出土している。骨角器素材として、直接狩猟を通じて入手するのは別に、山林等で獲得したものが利用されたケースがあったと考えられる。

製作残滓については、擦り切りによって切り離された骨端部(図5-83-16・20)の出土が目立つ。関

節付近は、緻密性に乏しく海綿質であることに加え、加工に不向きな複雑な形状をしたものが多い。そのため、当初から擦切りによって骨端部を除去することが多かったと考えられる。

鹿角については、縦長の板状素材（図5-83-22）を割きとった残核、枝角や角幹を分割した残片類（図5-83-21）が多くみられる。これらを見ると擦切り後に楔打ちして分割しているものが多いが、擦切り溝を加えること無く、叩き割りしているものもみられる。

骨針の針孔や銛頭の索孔については、穿孔が連なるものもあり、補修を加えながら、繰り返し使用された様子がうかがえる（図5-83-11・13）。また、極端に長さが短くなった骨針（図5-83-12）は、先端部が折損した後で、再研磨によって機能を再生する補修加工が繰り返された同様の資料である。

（3）北海道南部の骨角器

北海道白老町虎杖浜2遺跡では、230点以上の骨角器が出土している。資料の帰属時期は三内丸山遺跡第6鉄塔地区と同時期の前期中葉（円筒下層a式）で、主な器種として単式釣針、結合式釣針、銛頭、刺突具、骨針、ヘアピン、装飾品類、加工痕のある骨・角がみられる。この中で最も多く出土しているのは骨針で、銛頭がこれに次ぐ（*北海道埋蔵文化財センター2002*）。貝塚からは獣骨も大量に出土しており、その中で最も多く出土しているのがシカである。これに次いで多いのがアシカであるが、海棲哺乳類の比率が高い点では本州の三内丸山遺跡、東道ノ上(3)遺跡のいずれとも異なる資源環境が想定される（第5章第4節第3項図5-93）。

刺突具の素材には、鹿角や中手・中足骨などシカの部位が用いられている。また、銛頭は大半が海棲哺乳類の肋骨を素材としたものであり、出土獣骨と骨角器素材に確認される動物種の傾向は概ね合致する。但し、骨角器全体で見つかった場合には、シカと海棲哺乳類の比率は約4:1と動物遺存体の組成よりもシカの比重が高い。オットセイが多量に出土した伊達市北黄金貝塚や八雲町コタン温泉遺跡も、銛頭には海獣骨が用いられているが、素材総体としてみると鹿角やシカの中手・中足骨の方が多用されており、同様の傾向がみられる。骨角器素材選択は、狩猟対象の多少と基本的に連動していると考えられるが、器種に応じた動物種と部位の選別がこれに加わり、それぞれに好適なものが優先的に利用されていた様子がうかがえる。

3 まとめ

円筒土器文化の骨角器を概観し、素材選択と製作技術の内容から三内丸山遺跡の骨角資源利用の特質を確認した。

円筒土器文化の骨角器は大別して生産用具、装飾品、祭祀具で構成されており、生産用具の比率が圧倒的に高い。器種単位で最も多くみられるのは、針と刺突具である。漁具（釣針・銛頭）も一定量含まれるが、全体量に占める割合は数%程度に留まる。形態面では、同文化の銛頭は全て開高式離頭銛で、東北地方南部の大木式土器文化に散発的に確認されている閉高式離頭銛は未確認である。また釣針は、単式と結合式の両方が出土するが、量的には前者が多い傾向がある。結合式は針先のみが出土しており、軸の実態はよく分かっていない。装飾品は牙や貝殻を加工した玉類、ペンケイガイ製の貝輪の他、ヘアピン、櫛などがみられ、中には回転穿孔と線刻により複雑な装飾意匠が加えられたものもみられる。祭祀具には、鯨骨素材の骨刀が円筒下層式期から円筒上層式期に至るまで一貫してみ

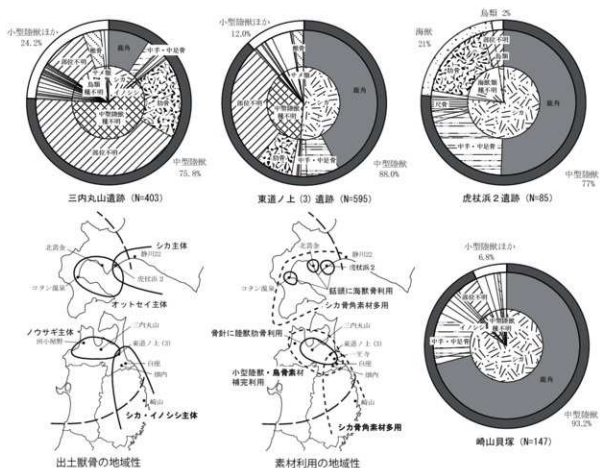


図5-84 骨角器素材にみられる動物種・部位組成、素材利用の地域性

られ、被熱した状態で出土するなど、時期差を越えた共通点が確認されている。

円筒土器文化の出土獣骨は、北海道南部で海獣主体、青森県日本海側・陸奥湾周辺で小型陸獣主体、青森県小川原湖周辺部で小型陸獣とシカ主体、青森県太平洋側・岩手県以南でシカ主体といった地域性（第5章第4節第3項）がみられ、骨角器素材に現れる地域性も基本的には同様の範囲で広がりを見せる。動物種の組成に関し、両者は概ね一致した内容（図5-84）が示されており、素材獲得は基本的には狩猟と連動して行われたと考えられる。

製作技術面では、比較した遺跡毎に独自の特徴が表れており、個々の集落を取り巻く環境の中で、最適な方法が主体的に選択されていた様子がうかがえる。三内丸山遺跡では、鹿角やシカの手・中足骨、中型陸獣の肋骨は、打ち割りで分割された残片よりも擦切りによって分割、加工されたものが多く、破損リスクの低い擦切り加工を多用することで、残滓の発生を最小限に抑制し、器種の転用や補修を積極的に組み込みながら資源の持続性を高める戦略がとられていたと考えられる。また、小型陸獣や、鳥類を含めた様々な動物種のあらゆる部位を徹底的に加工し、利用していたことも製作残滓の分析から確認されている。利用度の高い部位の不足に対しても、動物種や部位の枠を越えて選択の幅を広げ、素材を転換して新たな器種を創出する等、柔軟に対応された様子が資料から読み取れ、こうした資源の持続性を高める戦略に本遺跡の資源利用の特質の一面を見ることができる。

（齊藤（慶））

第7項 漆製品

1 ウルシの利用

日本においてウルシ科ウルシ属の植物はウルシ・ヤマウルシ・ツタウルシ・ヤマハゼ・ハゼノキ・スルデの6種類がある。この中で漆液を採取し、漆を採るために樹液を採取するのがウルシである。

遺跡から出土するウルシは、以前はウルシ属としてまとめられていたが、木材・種子・花粉で他のウルシ属のものとウルシが区別できるようになった(能城・鈴木2004、吉川・伊藤2006、吉川昌伸2006)。ウルシの木材で最も古いものは、福井県鳥浜貝塚から出土した1万2000年前のものである。

三内丸山遺跡からは、ウルシの木材・種子・花粉すべてが出土している。花粉は北の谷から、木材は第6鉄塔地区、北の谷から出土している。第6鉄塔地区のものは加工材と板目材、北の谷のものは自然木である。種子は第6鉄塔地区、第683号竪穴建物跡、第13・17号環状配石墓、西盛土から出土している。このことから、遺跡内においてウルシの木が生育するとともに、材としても利用されていたことを示している。

2 漆工

漆工に関係する資料として、漆液が入っていた土器(漆液容器)、漆漉し布、漆に混ぜる顔料、漆を塗布する道具などが挙げられる。漆液はウルシの木に傷をつけて採取される。東京都下宅部遺跡からは、縄文時代後期のウルシの杭が出土し、その中の44本に横方向に付けられたキズがあり、漆液採取の痕跡と考えられている。最近では同様の樹液採取のキズがつけられた材が、中期中葉、勝坂~加曾利E1式期のさいたま市南沼沼遺跡から出土し、漆工に関わる樹液採取の歴史をさかのぼらせた。

ウルシの木から採取した漆液は生漆と呼ばれ、ナヤシ・クロメの工程を経て精製される。生漆から不純物を取り除いた後に攪拌して均質にすることをナヤシ、さらに加熱し余分な水分を蒸発させることがクロメである。ナヤシ・クロメの工程を経た漆は素黒目漆(クロメ漆)と呼ばれる。

漆液容器は、鳥根県松江市夫手遺跡から出土した縄文時代前期初頭(約6,800年前)のものが日本最古である。土器の中には一部にパイプ状ベンガラが混じるクロメ漆が確認された。本遺跡からは、小型深鉢形土器の内部に精製したクロメ漆が入ったものが出土し、遺跡内で採取した漆液を精製していたと考えられる(第4章第2節第1項参照)。

精製した漆に混ぜる赤色顔料にはベンガラが使用された。ベンガラには、赤鉄鉱を用いたものと、パイプ状ベンガラを用いたものが確認されている。本遺跡からは顔料に使用される赤鉄鉱と、赤鉄鉱を砕いて貯蔵した土器が出土している。また、漆液は布で漉して不純物を取り除く。本遺跡から編布は出土しているが、漆は付着しておらず、漆漉しに使用したものではない(註1)。

漆は、パレットに小出しにし、刷毛や筆、へらなどで塗布したと考えられる。パレットは、本遺跡で土器の底部に漆が薄く付着したものが5点確認されている(岡村2010)。刷毛は、現在遺跡からは出土していない。

以上のような漆工を経て漆製品が作られており、円筒土器文化においてこれらに関わる出土品はないものの縄文時代晩期にみられるような道具があったと考えられる(註2)。

3 出土した漆製品

現在日本で最古の漆製品は北海道函館市垣ノ島B遺跡土坑墓からみつかった製品である。埋葬された遺体の頭部・両肩・両腕・足にあたる部分から出土しており、炭素14年代測定で約9,000年前のもの

と判明している。糸にパイプ状ベンガラを混ぜた漆を塗って作った繊維製品で、赤外分光分析（FT-IR）により保存処理に使用したアクリル樹脂成分が変質を起こしつつも、漆が残存していることを示すスペクトルが得られている。

本遺跡からは、漆製品として櫛・台付き皿・鉢・容器把手・矢柄・赤色漆塗樹皮製品等が出土している（図5-85、第3章第7節参照）。漆は木胎のほか、土器に塗布されているものもある。写真1は縄文時代中期後葉椀林式の壺形土器で、表面に黒色漆が塗布される。このほか、中期後葉の漆付着土器が出土している。

4 円筒土器文化圏における漆

本遺跡からはウルシの木材・種子・花粉、漆液容器、漆製品など多岐にわたって出土し、漆掻きから漆液の精製、そして製品への塗布まで一連の作業・工程を遺跡内でおこなっていたと推定される。ここでは、縄文時代前期から中期の円筒土器文化圏内で確認されたウルシ及び漆工を概観する。

表1に北海道・青森県・岩手県・秋田県においてウルシ属の木材・種子・花粉が出土した前期から中期の遺跡一覧を示す。ウルシの木材は野辺地町向田(18)遺跡、青森市岩渡小谷(4)遺跡から、種子は青森市三内丸山(9)遺跡、岩渡小谷(4)遺跡、八戸市田代遺跡から、花粉は青森市大沢野田(1)遺跡、三内丸山(9)遺跡から出土している。岩渡小谷(4)遺跡では、木製品にもウルシ材が使用されており、出土した容器15点中4点を占めており、クリ材の3点よりやや多い。また、同遺跡では板や割材・加工材でもウルシが使用されている。漆液容器、顔料貯蔵容器など漆工に関わる道具は、青森市二股(2)遺跡、青森市三内沢部(3)遺跡、八戸市田代遺跡などから出土している(表2)。三内沢部(3)遺跡からは、漆とベンガラが混ざった漆液容器のほか、断面にも漆が付着したパレットと考えられる容器が出土している。田代遺跡では、パイプ状ベンガラが入った貯蔵壺、炭を混和したと考えられる漆が付着した土器底部などが出土している。

漆製品は、岩渡小谷(4)遺跡、向田(18)遺跡、秋田県大館市池内遺跡、北海道木古内町新道4遺跡、南茅部町ハマナス野遺跡などから出土している(表3)。岩渡小谷(4)遺跡からは赤と黒を重ねたベンガラ漆が塗られた浅鉢や黒色を呈する漆塗皿などが出土する。また、向田(18)遺跡からは突起の付いたベンガラ漆塗の鉢形容器が出土している。突起の頂部には直径1cm程の巻貝（スガイなど）を埋め込んだ象徴の痕跡が残る。象徴を施した製品は、後世でも使われる技法で円筒土器文化圏においても優れた技術があったことを裏づけるものである。

これらウルシの木と漆液容器、漆製品等により、縄文時代前期から、円筒土器文化圏においてウルシが集落周辺で選択的に生育し、そこから樹液を採取し、製品に塗布した漆工がおこなわれていた集落の存在が考えられる。(藤原)

(註1) 漆塗し布は、つがる市亀ヶ岡遺跡、八戸市是川遺跡、秋田県五城目町中山遺跡などから出土しているが、いずれも縄文時代晩期のものである。

(註2) 是川中居遺跡出土壺の内面には、塗布された漆の表面に刷毛目の痕跡が残っており、塗布するための道具があったと考えられる。



写真1 黒色漆塗壺形土器
(三内丸山遺跡)



1. 櫛 2. 台付皿 3. 鉢
 4～11. 容器 (6～8は同一個体)
 12～15. 飾り弓? 16. 矢柄 17・18. 漆塗樹皮製品

図5-85 三内丸山遺跡出土漆製品

都道府県	遺跡名	所在地	木材	種子	花粉	備考
青森県	三内丸山	青森市	ウルシ	ウルシ	ウルシ	
	岩瀨小谷(4)	青森市	ウルシ	ウルシ2点 ツタウルシ1点 ウルシ属	ウルシ属	木製品にもウルシを使用。
	二股(2)	青森市	-	ウルシ属	ウルシ属	
	大沢沢野田(1)	青森市	-	-	ウルシ属(前期)	ウルシ・ヤマウルシ類・ツタウルシ類・他のウルシ属に類する(吉川2006)。
	三内丸山(6)	青森市	ヌルデ (炭化材・S57末節)	-	ウルシ属(中期～後期)	S57は円筒土層e式から以前。
	三内丸山(9)	青森市	-	ウルシ	ウルシ(中期末～後期初期) ヤマウルシ類(中期中葉～後期初期) ヌルデ(中期中葉～後葉)	
	内田(48)	野辺地町	ウルシ (自然木11点)	ウルシ属	ウルシ属	前期
	田代	八戸市	-	ウルシ	-	大木0式流行
	富ノ沢(2)	六ヶ所村	-	ウルシ属(土層e式 種・検体未定)	-	216号壺穴住居(円筒土層e式期)・ 261号壺穴住居(種・検体未定)
	山田(4)	漁田村	-	ウルシ属B (ウルシに近い)	ウルシ属	中期前葉～中葉
北海道	ハマナス野	南茅渚市	-	ウルシ属 (前期後半以降)	-	UP-201出土(ワスコ状土塊)。前期後半の壺穴住居(HP-200)の層上層上からの採り込み。
	大塚C	南茅渚市	-	ウルシ属(中期後葉)	-	
	新道4	木古内町	-	-	ウルシ属(前期末)	
	東浜1	八雲市	-	-	ウルシ属(前期末・中期)	遺物包含層及び202号住居層(前期末)
	富川左岸	森町	-	ウルシ属(前期後半)	-	壺穴住居跡(NH-13)内境上から出土。
	三次郎川右岸	森町	-	ウルシ属 (ヤマウルシ小谷?)	-	焼土(F-14) 中期前葉～後期前葉 フレイク量中(前期～後期)
	恵川右岸	七飯町	-	ウルシ属(中期前葉)	-	
	石狩紅葉山9号	石狩市	-	-	ウルシ属(前期～中期)	
	クノマイ2	川島市	-	ウルシ属(中期)	-	焼土(FY0) 中期)出土。
	御所野	一戸町	ヤマウルシ (中期後半)	-	-	壺穴住居出土炭化材。
大畑草	遠野市	ヌルデ(中期末)	-	-	S06炭化材(床面)。S06は中期後葉大木10A後半	
秋田県	根下戸遺下(第2次)	大館市	-	-	ウルシ属(中期前葉～中葉)	SN18出土。報告書に遺物の時期についての記載はないが、出土上部の層本では、前期中葉～中期前葉・中期末葉の7ものがある。
	小袋谷	上小阿仁村	ヌルデ・ウルシ属	-	-	
	池内	大館市	ヌルデ (①薪材・自然木)	ウルシ属	ウルシ属	前期

表1 円筒土器文化圏のウルシ属出土遺跡

青森市三内丸山遺跡 (岡村達雄2010, 赤田英典2004)							
内容名	器種	部位	時期	外面	内面	出土状態	備考
漆液容器	深鉢	底部	中期			漆液付	3点のうち2点分析し、2点とも漆。
赤色顔料入り土器	深鉢	底部	前～中期			赤色顔料	6150は漆 6149
八戸市田代遺跡 (青森県教育委員会2011)							
内容名	器種	部位	時期	外面	内面	出土状態	備考
赤色顔料入壺	壺	定形	中期末葉	赤色		SE1出土。埋没途中の窪地に発見。	パイプ状ベンガラ。顔料貯蔵器。
黒色物質付着土器			中期末葉	黒色物質		SE1出土。埋没途中の窪地に発見。	黒色物質は漆の可能性あり。
黒色物質付着土器	深鉢	胴部	中期末葉		黒色物質	SE2出土。埋没途中の窪地に発見。	漆が混在された漆。パレット?
黒色物質付着土器			中期末葉		黒色塗膜	SE4出土。	ベンガラ混入漆(パイプ状ベンガラかは不明)。
赤彩土器	ミニチュア土器		中期末葉	赤色	赤色	SE6出土。埋没途中の窪地に発見。	黒色塗膜層の上にパイプ状ベンガラ。黒色塗膜は漆の存在が予想される。顔料貯蔵容器?
黒色物質付着土器		底部			黒色	遺構外出土。	漆が混在された漆。クローマ容器?
青森市二股(2)遺跡 (青森県教育委員会2007)							
内容名	器種	部位	時期	外面	内面	出土状態	備考
土器				円筒土層c		SE16(新)空層出土。	内外面に黒漆。内面の黒漆層の上に赤色顔料付着。赤鉄細葉系のベンガラ。赤色顔料貯蔵容器。
土器				円筒土層d		IF6(G39g)Ⅱg層出土。	赤鉄細葉系のベンガラ。赤色顔料貯蔵容器。 試料No.2a-b
青森市三内沢部(3)遺跡 (青森県教育委員会2005)							
内容名	器種	部位	時期	外面	内面	出土状態	備考
土器	深鉢	胴部	中期～後期?		黒色物質		黒色物質は漆。
土器	深鉢	底部	中期～後期?		赤みのある黒色物質		漆とベンガラ。漆液容器。
土器	深鉢	口縁	中期末葉～後葉		黒色物質(断面にも付着)		漆(ベンガラ混入?)。断面にも付着することから、パレットとして使用か?
八戸市新田遺跡 (青森県教育委員会2006)							
内容名	器種	部位	時期	外面	内面	出土状態	備考
土器		胴部	中期末		黒色物質		漆。顔入りしあり。ベンガラ混入。パイプ状ベンガラではない。

表2 円筒土器文化圏の漆液容器・顔料貯蔵器出土遺跡

第3節 交流・交易

1 津軽海峡をまたぐ交流・交易

円筒土器文化圏の中央には潮流の速い津軽海峡があり、北海道と本州とを隔てている。水深が深く列島誕生以前もつながることのなかった海峡である。しかし、それは陸を隔てる海峡ながら、兩岸を結び、かつ太平洋と日本海とを結ぶ、文字通りのChannel（経路）としても機能した。海峡を挟んだ北海道側、本州側にはそれぞれ地域性があるが、共通性もまた強い。北海道日高産の緑色岩（通称アオトラ石）・青色片岩、および北海道白滝産の黒曜石製石器の本州側での分布、そして新潟県糸魚川産ヒスイ、さらには軟玉およびコハクなど装身具とその素材原石は文化圏全体に広がる（第4章第3節第1～3項参照）。多種類の物資が海峡を行き交い、遠方からも招き入れた。圏内外の活発なそして広汎な関係がうかがえる。海峡両岸の関係は緊密であり、そこには強い求心力すらあった。

ここでは主に上述のような石器・石材から知られる交流・交易を述べる。圏内で石器・石材の産地同定の点数が多いのは三内丸山遺跡であるが、近年では圏内全体での分析事例も増加している。

(1) ヒスイ

この地域のヒスイで最も古いのは、円筒下層c式期の北海道八雲町シリリカ2遺跡の玉である。長さ2.9cm、重さ6.1gの紡錘形の小型品で、新潟県糸魚川産の比重の大きい良質なものとして分析された。全国的にも最古段階のものである。円筒下層d式期になると、青森市宮田館遺跡に例があり、前期末から中期初頭では鯉ヶ沢町餅ノ沢遺跡や北海道余市町フゴッペ貝塚などで出土例がある。青森市宮田館、鯉ヶ沢町餅ノ沢遺跡例はともに孔が未貫通である（写真1）。この段階では、ヒスイは出土数が少なく、小型で形状の変異が大きい。縄文時代中期以降には三内丸山遺跡をはじめ、両館市浜町A遺跡など円筒土器文化圏で丸く定形化した緒締形のヒスイ大珠（写真2）が出土する。原産地に近い中部地方、関東地方で好まれた長楕円形のカツオブシ形と異なる。

陸路到達の範囲内では、普通、原産地から一定距離を越えると流通する物資の数量、大きさは急に減少する。しかし、三内丸山遺跡では、ヒスイ産地から離れているにもかかわらず、出土数量が多く、良質のものが含まれている（写真3）。逆に原産地に距離的に近い山形・秋田県南部の出土点数は少ない。それら地域を経由せず、海路を伝い原産地と直接結びついた結果である。そして、原石・未製品から完成品に向かう各段階があり、消費地での玉の製作拠点、分配拠点であった可能性がある。円筒土器文化圏では、その時期にヒスイ製品の生産にかかわった集落は、現在、他に知られていない。

円筒土器文化の中ではヒスイへの強い嗜好があった。それは、その後も圏内で引き継がれることとなり、縄文時代後・晩期になっても出土数量は全国的に多い。



写真1 宮田館遺跡出土ヒスイ
(青森県埋蔵文化財調査センター提供)



写真2 緒締形のヒスイ大珠
(三内丸山遺跡)



写真3 ヒスイ製垂玉
(三内丸山遺跡)

(2) 黒曜石および黒曜石製石器

三内丸山遺跡を中心にみた場合、小規模な黒曜石産地は青森県内にもあり、そこからは比較的小さな原石ないし製品で本遺跡に運び込まれている。一方、大規模な産地はいずれも遠隔地にあり、そこからは大型を含む製品として入っている。同じ黒曜石であっても遺跡と産地の距離、そして産地の規模によってどの状態でどれほどの大きさの品が受給されるかに違いがある。

三内丸山遺跡では縄文時代前期末から県外産の黒曜石製石器が多くなるが、中期には長野県霧ヶ峰産や北海道北部白滝産など、東日本から北日本にかけての広い範囲から黒曜石製石器が出土している。他の青森県内遺跡では、中期初頭の深浦町津山遺跡から北海道置戸産・赤井川産の原石や製品が出土し(杉原・金成・杉野森2008)、同時期の八戸市笹ノ沢(3)遺跡から山形県月山産の石鏃と赤井川産の石匙が出土している。

大規模な産地の黒曜石は広域に流通し、小規模な産地からは狭い範囲で、主に小さな原石で流通する。しかし、この原則的な傾向にしたがわない例もある。三内丸山遺跡の黒曜石の中には、新潟県の佐渡や板山などからもたらされたものがある。これらは小規模な産地である。単独で動いた可能性は低く、新潟県域から他の品、ヒスイなどに付随して運ばれた可能性が高い。あるいは、新潟

県域や富山県域などに流通する長野県の霧ヶ峰産黒曜石の流通に、経路途中からのって到達した可能性もある(杉原他2009)。また、北海道福島町館崎遺跡では長野県霧ヶ峰産を用いた無茎石鏃の他に、青森県出来島・鶴ヶ坂産の剥片が出土している。両者が同時に動いたかは不明だが、霧ヶ峰産の黒曜石は青森経由で搬入された可能性が指摘されている(福井2017)。

長野県霧ヶ峰産の黒曜石製石器は西目屋村水上(2)遺跡からも7点出土し、うち5点は石鏃であった。無茎で持ちが深く入り、三内丸山遺跡や館崎遺跡例と同じ形である。水上(2)遺跡ではこのほか置戸産の両面加工の石匙や赤井川産の石槍が出土している。青森県内から出土する北海道置戸・十勝・赤井川産石匙は両面加工の大型品が多い。特に写真5の三内丸山遺跡出土の赤井川産を使った石匙は、球顆をほとんど含まない良質のものである。県内の出来島産や青森市西青森系の黒曜石製石匙(写真4)が小形で、礫皮を残した片面加工のものが多いのとは対照的である。両面加工の黒曜石製石匙は白滝産の石槍(写真6：第4章第3節第2項参照)と同様に、本州北端の人々に魅力のある交易品だったと考えられる。



写真4 西青森系の石匙
(三内丸山遺跡)



写真5 赤井川産大型石匙
(三内丸山遺跡)



写真6 白滝産大型石槍
(三内丸山遺跡)

(3) 石斧原石

三内丸山遺跡で磨製石斧の6～7割を占める緑色岩は、北海道日高地方の額平川産緑色岩のもとと推定され、北海道神居古潭峡谷周辺の青色片岩が一定量出土している(写真7:合地2005, 中村2017)。第5章第2節第3項で記したように、北海道の渡島半島部から下北地方にかけて擦切具や緑色岩の擦切残片が出土する磨製石斧製作遺跡がある。写真8に円筒下層式期の例として、むつ市涌館遺跡の擦切残片等を示した。下北地方では在地の花崗閃緑岩・(石英)閃緑斑岩の磨製石斧も製作されている。他にも北海道松前町では蛇紋岩を産出し、前期中葉の松前町茂草B遺跡は在地の石斧石材となっている。その他、八戸市周辺の粗粒玄武岩などで製作された磨製石斧が出土している。

青森県埋蔵文化財調査センター所蔵の磨製石斧についても調査が行われ、円筒土器文化の遺跡では風間浦村沢ノ黒遺跡、青森市三内丸山(6)遺跡、八戸市笹ノ沢(3)遺跡、五戸町西張平遺跡など青森県内各地で、北海道産の緑色岩・青色片岩製磨製石斧が出土していることがわかってきた(杉野森2014・柴他2015)。また、大木式土器圏の北上山地でも蛇紋岩を産出しているが、三内丸山遺跡からは北陸地方産「蛇紋岩類」製と考えられるものも出土している(中村2017)。同様の石材と考えられる磨製石斧が西目屋村水上(2)遺跡の捨て場からも出土している(青森県教育委員会2017)。

本遺跡には多くの大型の建物跡群がある。それら建築の生産財である磨製石斧は、建物規模、数からして消費財でもあり、不断に製作され供給され続けなければならない道具だった。その道具の素材が北海道の中央部から津軽海峡を越えて運ばれていたことは、いかに目的に適った素材であり、それを中心とした物資の流通経路が本遺跡にとって、いかに重要で長期に保つ必要があったかが示されている。日高地方の石斧素材を獲得し続けられる緊密な関係を保持することが、多くの建築にとって不可欠なことのできない条件であったと考えられる。

(齋藤(岳))



写真7 青色片岩(左)・緑色岩製磨製石斧
(三内丸山遺跡)



写真8 緑色岩製擦切残片と青色片岩(下段右から2番目)・緑色片岩(下段右端)製磨製石斧(涌館遺跡)
(青森県埋蔵文化財調査センター提供)

(4) 滑石

北海道松前町では滑石を産する。北斗市館野6遺跡では三角形の球状耳飾りが計8点出土した。これらは、松前産に類似した滑石で製作されている。より産地に近い福島町館崎遺跡では同じく三角形の球状耳飾りが56点出土し、多くは滑石製で松前産の特徴に類似していた。三角形の球状耳飾りは津軽海峡の両岸に多く、ヒスイ製大珠に先だって縄文時代前期末～中期初頭に盛行し、青森県内では滑石製のものが4点出土している(福田2014)。大木式土器圏の北上山地でも滑石を産するが、岩手県遠野市綾織新田遺跡の滑石製の球状耳飾りとは形状が異なり、産地ごとに耳飾りの形状が異なる可能性がある。青森県内出土の滑石製のものには松前産が含まれていたことが推定できる。

(5) アスファルト

縄文時代のアスファルト利用例は、既に多くの論考がある(福田2000・2014)、(岡村1997)、(小笠原・阿部2007)。青森県の事例も近年まとめられている(杉野森2017)。

アスファルトは石油の揮発成分が消失した後に残った膠着質を有する物質であり、縄文時代には接着剤としての利用が盛んである。耐水性にも富むことから、漁撈具にも使用される。日本海側の石油産地は、新潟県から北海道にかけて分布しており、縄文時代の利用例もその地域を中心とした東日本地域に広がっている。岡村道雄や阿部千春は、①北海道渡島半島から米代川・馬淵川ライン以北、②日本海側の最上川流域と阿賀野川・信濃川流域、③太平洋側の南三陸沿岸の3地域を縄文時代のアスファルトの高度利用地域と指摘しており、円筒土器文化圏はこのうち①に含まれている。

現在のところ縄文時代におけるアスファルト供給地は、秋田県湯上市昭和豊川榎木・同県能代市二ツ井町駒形・新潟県新潟市新津蒲ヶ沢大入の3か所があげられているが、前述の石油産地に未知の採取地が存在した可能性も指摘されている。今後、理化学的な産地分析もあわせて、産地およびその流通を明らかにすることが期待される(小笠原・阿部2007)。

青森県においては、八戸市沢畑込遺跡の石鍬や東通村前坂下(13)遺跡など、僅かに縄文時代前期初頭に遡る使用例が指摘されているが、前期末葉に至り副葬品などの良好な出土例が知られるようになり、中期中葉には利用が一般化している。



図 5-86 アスファルトの原産地・精製遺跡と消費遺跡の分布図(小笠原・阿部2007に加筆)

青森県での出土例を見ると、前期初頭は僅かしかなく、前期中葉(円筒下層 b 式期)は、三内丸山遺跡の石鏃付着例があるが、前期段階では末葉あるいは中期初頭には例数が多くなり、日本海側、岩木川流域、青森平野、下北半島、馬淵川・新井田川流域と全県的に分布が確認されている。中期中葉以降には全県的に出土例が明らかに増加する。

縄文時代を通してアスファルトは、石鏃・石匙・骨角器の固定用接着剤とされたものが多いが、各地の出土例から、その流通・使用・保管時の状況を推定できるものがある。

青森市石江遺跡では、前期後半の土坑墓36基が検出された。そのうち第6088号土坑からは石鏃10点・石槍1点・石匙1点・削搔器1点・磨製石斧3点・石棒1点・石製品2点とともにアスファルト収納土器1点・アスファルト散布1か所が検出されており、墓の副葬品とされている。石鏃や石斧の存在から男性の墓の可能性が高く、縄文前期段階でアスファルトは男性の帰属物として認識されていた可能性がある。

青森市三内丸山(6)遺跡では、縄文時代中期中葉(円筒上層 d・e 式期)の竪穴建物跡の床面で長径20cm×厚さ3～5cmの楕円形のアスファルト塊が検出されて、ピットから剥片が多数出土していたことから、石器の着柄作業が行われた場所と想定されている(福田2000)。

近年の各地の出土例により、岡村道雄は以前想定した、秋田県の少数の産地から広域にアスファルトがもたらされたという「少産地広域移動」を肯定しつつも、日本海側各地の石油産地における「多産地近距離移動」の可能性も指摘している(岡村2014)。原産地から50～100km離れると、縄文時代のアスファルトの付着率が急激に低下することから、日本海側で八雲町山越、道南部の木古内町釜谷、青森市大釈迦を縄文期のアスファルトの産地候補にあげており、今後の自然科学分析や具体的な採取地の確認が待たれる。

(6) コハク

コハクは松柏類などの古い時代の樹脂が化石化したものである。軟質であるが、美しく透き通った黄色や赤褐色を帯び、旧石器時代以来玉類としての利用が知られるが、加工のない原石のままで出土するものが多い。岩手県久慈市が国内における最も大きな産地であることは良く知られるが、千葉県銚子市でも良質のものを産し、栗島台遺跡がその加工集落遺跡とされる。

岩手県久慈市では、大尻遺跡において縄文時代前期後半(円筒下層 c・d 式期)とされるコハク原石の出土例がある。また秋田県大館市池内遺跡では S T 639 谷種子投棄遺構 A からコハク玉が 1 点出土



しており、円筒土器文化圏における久慈コハクの流通は縄文時代前期中葉(円筒下層 a・b 式期)まで遡る可能性が高いとされる(福田2004)。

青森県域のコハクの出土例は、縄文時代前期末葉から見られる(福田2004)。野辺地町向田(18)遺跡では、装飾品(玉類)と原石が出土している。また原石あるいは加工痕の有無が不明例が五戸町西張平遺跡や十和田市明戸遺跡で出土しており、縄文時代前期末葉には久慈市に近い青森県東半部の拠点集落にはコハクが持ち込まれていたと考えられる(青森県教育委員会2007・2010)。その後、中期になると原石の状態のものが多いが、中期中葉以降コハク出土例は青森県東半部で増加する。この段階で三内丸山遺跡など青森平野にも及んでおり、三内丸山遺跡からは玉と原石が出土している。八戸市周辺では、松ヶ崎遺跡などで多数出土する。

西目屋村水上(2)遺跡からも縄文時代中期の最大直径が8mm程度であるコハク原石の可能性のあるものが複数出土している。岩木川流域や津軽半島・下北半島でコハクの出土が明確なのは、縄文時代晩期である。縄文時代前期・中期のコハクの出土例が八戸地方に偏るのは、久慈市を中心にほぼ同心円状の濃淡を示すと考えられるためである(福田2014)。コハクは円筒下層式期に資源開発され、穿孔された玉のみならず、原石としても貴重品として交易されたと考えられる。

(7) 北からの磨製石斧と黒曜石

北海道遠軽町白滝は黒曜石の大産地であり、湧別川の上流域に位置する。峠を越えると石狩川の上流域であり、川沿いに下ると神居古潭峡谷がある。峡谷周辺には青色片岩製の磨製石斧を製作した深川市納内3遺跡などがある。石狩川を通じて白滝産黒曜石は青色片岩製の磨製石斧を伴って石狩低地帯などに入り流通したケースも想定できる。そして、本州北部には、緑色岩や海獣の皮など他の産品を伴って流通した可能性がある。

渡島半島と積丹半島の基部の海岸付近に位置する共和町リヤムナイ3遺跡は、春日町式から静内中野式、深郷田式併行の時期の遺跡である。大木2a・2b式土器も出土しており、東北地方から渡島半島南部と関連の深い遺跡である。石器集中地点から珪質頁岩製スクレイパーとともに、緑色岩製3点と青色片岩製2点の磨製石斧が一括出土した(写真9)。別地点でも緑色岩製磨製石斧が欠損品を中心に14点出土したが、再加工が可能な状態である。さらに別な地点では緑色岩製磨製石斧と摺切具、赤井川産黒曜石・頁岩剥片、石鏃、赤色顔料の素材となる赤鉄鉱原石が出土した(写真10)。

石鏃は大型品が多く黒曜石及び珪質頁岩製である。黒曜石は肉眼観察から赤井川産と考えられているが、球顆がわずかに入る程度の良質なものが多い。石器集中地点の性格については、いくつかの解釈が可能であるが、皮袋や有機質製の容器に入れた産品が中継地点に残された想定すると、円筒土器文化直前段階には、すでに磨製石斧をはじめとして津軽海峽沿岸部との交易ルートが整っていた可能性がある。

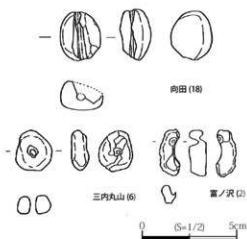


図5-88 コハク製品

(8) 三内丸山遺跡の交易品

三内丸山遺跡からは漆製品ばかりではなく、漆液や赤色顔料の入った土器が見つかっている。津軽半島の沿岸部、外ヶ浜町赤根沢に良質な赤色顔料の産地がある。距離はあるが、波が穏やかな陸奥湾を舟で北上すると採取可能な範囲内にある。三内丸山遺跡ではウルシの花粉や種実が出土している。漆製品の製作には精製などの専門性のある技術が必要である。大きな集落ほど、分業が可能となるため製作の条件が整っているとみて良い。三内丸山遺跡を産地とする交易品の可能性がある(福田2014)。また、三内丸山遺跡の第6鉄塔地区の出土魚骨の頭骨と椎骨の比率から、魚の頭と内蔵を除去する加工によって、保存処理が行われた可能性が指摘されている。その後、秋田県大館市池内遺跡では、海岸から数十キロ離れた内陸部であるにもかかわらず、ブリの幼魚やサバ、ホシザメ、ニシン、ヒラメなど三内丸山遺跡でも多い魚種が出土した。それらは、日本海側または青森湾から運ばれたと推定されている(西本1999)。加工した魚類もまた三内丸山遺跡からの交易品と考えられる。



写真9 リヤムナイ3遺跡の青色片岩・緑色岩製磨製石斧等一括出土
(財)北海道埋蔵文化財センター2005提供



写真10 リヤムナイ3遺跡の緑色岩製磨製石斧等一括出土
(財)北海道埋蔵文化財センター2007提供

2 まとめ

三内丸山遺跡を巨大化させた要因として、交易への関与があげられている。青森は本州を日本海側・太平洋側から北上する道が一つにまとまる地点であるうえに、穏やかな陸奥湾の北には津軽海峡と北海道がある。交易適地であり、様々な人、物、情報が行き交っていたと考えられる(図5-89)。三内丸山遺跡を通る内陸の流通経路には青森平野だけではなく、津軽平野南部が含まれる。

三内丸山遺跡での黒曜石・磨製石斧・ヒスイなど遠隔地からの交易品がもたらされた背景には、円筒土器文化圏各地からの対価産物を集められたことがある。力強い安定した生活が営まれていたことであろう。円筒土器文化圏は、津軽半島、下北半島、渡島半島、積丹半島と半島が多く、随所で海の恵みと山の恵みが近接している。海を道とした舟による交易が不足物資を補い合い、漆工などの専門性の高い物作りを行う集落を安定的に成立させる基盤となった。

円筒下層式期には大集落が形成され、資源開発が進んだ。また、以前からの遠隔地との流通ルートが整い安定した。円筒下層d式期から円筒上層式期に向かうにつれて、交流・交易環境はさらに成熟したと考えられる。

(齋藤(岳)・永嶋)

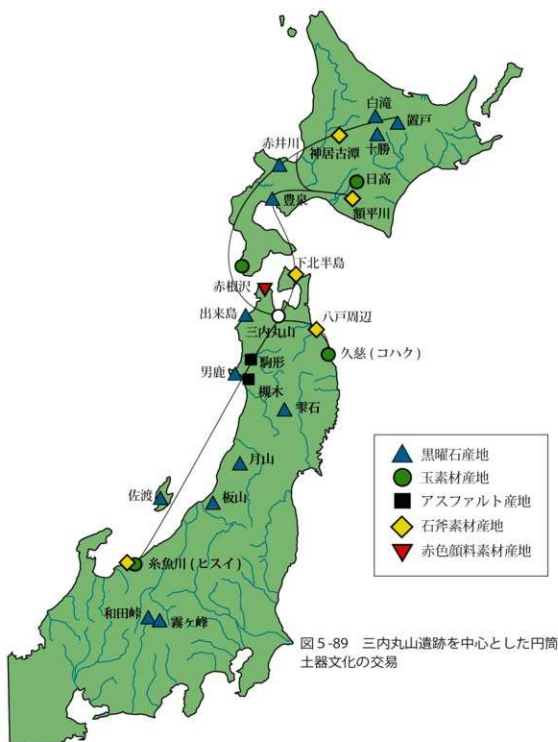


図 5-89 三内丸山遺跡を中心とした円筒土器文化の交易

第4節 生業

第1項 採集

植物採集は、縄文時代人の基盤となる生業とされている。狩猟や漁労に比べて危険が少なく、女性や子供にでもそれぞれの能力に応じて参加可能な活動である。採集で得られる食料は狩猟と比較すると、豊凶の差が少なく、かつその取獲物は貯蔵可能なものが多い。年間を通じた食の安定を支えるものである。

円筒土器文化圏は、本州北部と北海道にまたがり、人骨の安定同位体分析(第4章第2節第9項)では双方の食性の違いが明らかになっている。

三内丸山遺跡では、各種の自然科学分析が行われ、周辺遺跡群の調査でも情報が蓄積されてきた。花粉・植物珪酸体・出土木材・種実の同定とその比率、低地での種実の集中地点等の状況から、食用をはじめとする有用植物の維持・管理等が明らかになっている。

本稿では、三内丸山遺跡と周辺遺跡から本州側の採集活動を概観し、北海道側の状況を対比させながら記述することとしたい。

(1) 本州北部の植物遺存体

クリヤトチなどの堅果類は、栄養価が高く保存性に優れ、堅穴建物の屋内外の貯蔵穴で保存することができる。屋内貯蔵例としては、十和田市明戸遺跡の円筒下層 a 式期の焼失住居出土例がある。床面直上から炭化したクルミと多量のクリが見つかっており、出土状況から住居内で貯蔵されたものと考えられている。屋外の貯蔵施設である貯蔵穴は、青森県内では、前期末から中期中葉にかけて、検出数が増加し、大集落では群集化するとされる(杉野森2013)。円筒土器文化の発展期を支えたものの一つといえる。

堅果類の中でも重要だったのが、クリである(写真1)。クリは食料のみならず木材、薪材としても有用種であった。

三内丸山遺跡の第6 鉄塔地区ではクリの炭化材が大量に出土した。クリは薪材として火もちと火力にも優れている。建物の構造物材や木製品として使われたものも、最後に薪材となった可能性が指摘された(能城・鈴木1998)。クリは、個体としては種実の豊凶の年較差があるものの、群としては概ね安定していることが確認されている(新美2009)。

三内丸山遺跡の花粉分析結果をみると、クリの出現率が約80%の地点があり、付近にクリ林が存在したと推定されている(吉川ほか2006)。そして、クリ林内の表層花粉の調査では、樹木花粉総数を基数とした産出率が30%と高いが、クリ林から離れると急減することから、三内丸山遺跡ではクリの純林の存在が想定された(吉川2011)。一方で、北の谷地区の樹種および種実の種類が多いことから、花粉組成で示唆される結果よりも、より多様性のある植



写真1 三内丸山遺跡出土の炭化クリ

生であったと考えられるようになった。クリは集落周辺には圧倒的に多かったとしても、ほかの樹種も混生していたと考察された(古代の森研究会ほか2016)。

クリの管理・育成など、人の関与の可能性は三内丸山遺跡の周辺遺跡でも指摘されてきた。採集とは直接関連しないが、クリの生育状況を示す事例がある。

三内丸山遺跡から南西に約2km離れた岩渡小谷(4)遺跡では埋没した谷の中から、円筒下層b式期の水場遺構が調査されている。そこでは板目材約130点のうち、6割がクリであった(写真2)。クリはその材構造から割り裂きしがやすく、板材として適している。磨製石斧による伐採実験で、コナラやサクラ属など他の広葉樹木よりも伐採効率が良いことがわかっている(工藤2004)。建物の建築材としても東日本の各地から見つかっており、クリの枝打ちなどの維持管理により、真っ直ぐな柱材を育成した可能性が考えられている。またクリが水湿に強く、耐久性・保存性が高いため、水場での構築材となったことも推定されている。岩渡小谷(4)遺跡では最も生長の良いクリでは年輪幅15mmであり40cmの太さに生長するのに15年程度の個体があった。さらに平均年輪5mmを超える材が10点中5点あった。光環境の良い場所で生育したと考えられ、当時の人により、生育環境の最適化などの管理育



写真2 岩渡小谷(4)遺跡出土クリ材(青森県埋蔵文化財調査センター 提供)

成が考えられている(佐々木・能城2004)。

三内丸山遺跡から南西に500m離れた三内丸山(9)遺跡の沢での花粉分析では、縄文時代中期前葉から中葉にかけては、クリ花粉の出現率が72~96%という著しい優占を占める。中期後葉では、沢筋にトチが拡大することがわかっているが、クリ花粉も19~44%と比較的高率を占めるため、沢の背後にはクリ林が維持されていたと考えられている(吉川2008)。

クルミについては第6鉄塔地区や北の谷地区から、サワグルミ・オニグルミが出土している。第6鉄塔地区第VIa層からは、袋状の編籠(縄文ポシェット)が見つかり、中からクルミが1点出土している。また、クルミの殻の中に粘土を入れて焼いたクルミ押土製品が多数見つまっている(写真3)。周辺遺跡のほか、地理的な距離のある八戸市畑内遺跡、弘前市沢部(2)遺跡からも各1点出土している。岩渡小谷(4)遺跡ではクルミの殻を加工した製品(写真4)、大館市池内遺跡ではクルミの殻表面を研磨加工したものと、そのうえで彫刻を加えたものが出土した(写真5)。クルミと円筒土器文化の人々との関係の深さを伝えるものと考えたい。



写真3 三内丸山遺跡出土クルミ殻（左）とクルミ押圧土製品（右）

写真5 池内遺跡出土クルミ殻を研磨加工したもの（左）と彫刻加工のもの（右）（秋田県埋蔵文化財センター 提供）



写真4 岩渡小谷（4）遺跡出土加工のあるクルミ（青森県埋蔵文化財調査センター 提供）



トチノキ種子は三内丸山遺跡では前期末葉から利用されたと考えられる。これ以降に形成された南・西盛土からの種実分析により、前期末葉から中期後葉にかけてクリ・オニグルミが継続的に利用され、トチノキも前期末葉では少ないものの、中期前葉から後葉まで利用されていることが指摘されている（第4章第2節第5項）。

近野地区の谷では、中期中葉の木組遺構がみつまっている。トチノキ種子はサボニンやアロインといった非水溶性のアク（渋み）があるため、食用化のためのアク抜き作業が必要である。その工程の中で、清水にさらす段階が含まれており、その作業に関係する遺構と考えられている。中期末葉の可能性のあるトチノキ種子片集積遺構もあり、種皮の廃棄場所と考えられている。三内丸山(9)遺跡でも沢から中期前葉から中葉のトチノキ種子片の集積が見つかっており、同時期の堅穴建物の跡からも炭化したトチノキ種子が出土している。

トチノキ種子は、食用化のための作業が必要であるが、栄養価はクリよりも高い。三内丸山遺跡の近野地区南側の花粉の調査からは中期中葉にはクリの減少とトチノキ等の増加が指摘されている。

マメ科植物の種子は第6鉄塔地区や第6次調査区、西・南盛土などで出土している。詳細な分析により、その多くはササゲ属アズキ亜種アズキ型の野生種であるヤブツルアズキに近いことが判明している。可食部分が一定量出土し続けることから、縄文時代前期末葉から中期後葉まで継続的に利用されたとされている（第4章第2節第5項）。

ヒエについても南盛土などから炭化種実が検出されている。他のイネ科草本のものが認められないことから、選択的に利用されていたことが推定されている（吉川2010）。また、土器匠痕調査でヒエは円筒下層d₁式期の土器から検出されている（小畑・真達2014）。また、六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡では縄文時代中期後半の焼失大型住居から約3,000粒のヒエが出土している。ヒエについては、東北地方の

縄文時代前期から中期の縄文人が、馴化に大きく関わったとする仮説を提示していた(吉崎1982)。しかし、クリ・クルミと異なり、報告例が少ないため、食生活に占める役割の大きさを始めとして不明な点が多い。

三内丸山遺跡の第6 鉄塔地区や北の谷では、大量のニワトコの種子が得られており、ヤマグワ、サルナシなどの果実の種子も多数出土している。果実酒あるいは薬用に加工した痕跡と考えられている。

また、ヒョウタンの近似種の種実やウルシの炭化内果実皮がみつかっており、ウルシなど食用以外の有用種も集落付近で管理・育成されていたと考えられている。北の谷では、サクラヤカバノキの樹皮の利用も判明してきた。

採集に関わる道具としては以下のようなものがあげられる。半円状扁平打製石器については、デンブ粒分析からはユリ科などの根茎類のデンブ粒と考えられるものが確認されている。オオウバユリの根やクス根、ワラビ根などの根茎類の食用加工には敲きの作業をとまなうことから、それらとの関係も推定されている(上條2010)。

他に採集に関わる木製品としては、ヤマノイモなどの採取に使用されたと考えられる掘棒が三内丸山遺跡や岩渡小谷(4)遺跡などでみつまっている。

(2) 北海道の状況と本州との比較

山田悟郎は北海道から出土した植物遺体を調べ、堅果類などの他に、ノビルなどの鱗莖、栽培種のソバ・ゴボウ・シソと、栽培された可能性が高いヒエ属などの出土をまとめている(山田1993)。

クリは円筒下層式の時期に北海道の渡島半島南部で出現する。円筒土器文化の交流のなかで、本州からクリが持ち込まれたと考えられている。その後、北上し中期には円筒土器文化圏の北端である石狩低地帯まで到達する(山田・柴内1997)。

北海道福島町館崎遺跡の円筒下層式の2地点の花粉分析では、クリ花粉94.99%の高い産出率であった。前期末から中期前葉の道路跡覆土でもクリ花粉50%の産出率であった。館崎遺跡の花粉分析結果からは、三内丸山遺跡と類似した植生が想定されている。土器圧痕調査でヒエは円筒下層d₁式期の土器1個体から53点、円筒下層d₂式期の土器1個体から12点、ニワトコが両時期から各1個体1点が検出されている。クリ林の形成やニワトコの利用など、本州北部に近い植物の利用状況がみとれる。このように、北海道でのクリの出現と伝播をみると、クリは円筒土器文化の食文化としての要素をもつといえる。

一方で、館崎遺跡からはオットセイの骨が2,756点出土している。北海道の食文化の根幹をなす海獣を食しながらも、三内丸山遺跡で確認されていた植物利用が北海道にも及んでいた。同じく津軽海峡に面した木古内町から北斗市にかけての遺跡群でも近年の調査によりクリ・クルミ・ゴボウ・ヒエ・ヤブツルアズキ・トネ等が出土しており、類似した様相が窺える。また、石器においても噴火湾岸等と異なり、北海道式石冠が少ない地域である事が指摘されている(酒井2017)。

この地域では人骨の安定同位体分析が行われた遺跡はないが、渡島半島南部においても、食性については、細かな地域性があるものと想定される。三内丸山遺跡では、人骨の安定同位体分析で男女各1体の分析が行われている(南川2015)。女性の食性は、クリなどC3型陸上植物とウサギなど草食陸獣

の範囲に位置していた。C3型陸上植物と陸獣に中心をおいた食性は、千葉県加曾利北貝塚など本州の縄文人に共通するものである。

一方、男性では、それらも摂取しつつ、海産の魚類や貝も相当な割合で利用していたことが示されていた。同様の結果は東北町古屋敷貝塚の成人女性からも得られている(註1)。日本海、陸奥湾、太平洋と海に囲まれた青森県の三内丸山遺跡とその周辺遺跡では、本州縄文人によりつつも海産物依存の高い食性が加わっていたとみることができる。このような食性に対し、北海道噴火湾岸の伊達市北黄金貝塚(縄文前期)や函館市白尻B遺跡(縄文中期)では海獣や海棲魚類の範囲に位置していた。海産物に傾斜した食性は北海道縄文人の典型とされている。

なお、三内丸山遺跡の北の谷からは歯髄に達するほど蝕まれたヒト歯骨の出土が報告されている(藤澤2015)。安定同位体による食性分析は、木の実などデンプン質の食料を多く摂取した本州縄文人の虫歯の多さ、海獣や海棲類を中心に摂取した北海道縄文人の虫歯の少なさと調和する(大島1996)。

今後、分析例の増加により生活環境を反映した食生活のありかたがより細かく明らかにされ、食性からみた採集への依存度も遺跡ごとに明確に示されると思われる。



写真6 三内丸山遺跡北の谷出土ヒト歯骨

(3) まとめ

クリ・クルミ・トチ、そしてここでは触れえなかったドングリの類は発掘調査で見つかるその遺存体から、縄文時代の採集対象の代表とらえられてきた。近年では人骨の安定同位体による食性分析中、C3植物の中心的な食料に位置付けられ、それぞれ異なる食性のなかでどれほどの比率を占めるかが地域ごとに明らかにされつつある。採集対象の代表である堅果類だが、縄文時代の人々が植物をどの程度利用したかは、生業全体のなかでその位置を推し量る基礎である。

一方、縄文時代集落がかつてに考えられた小規模なものから大規模で長期に定住したことが分かるにつれて、植物質食料も純然たる野生状態で利用したのではなく、次第に管理し馴化させ、積極的な育成すなわち栽培化が行われてきたのではないかと考えられるようになってきた。そしてそのこともクリのDNA分析や、土壌中のクリ花粉分布を調べることによってさらに鮮明に語られるようになってきた。同様のことは堅果類以外のゴボウ、ヒエ、マメなど一般に栽培種とされる植物の検出でもいわれるようになった。しかし、採集に用いた掘棒や、採集物の加工をになった磨石類に残されたデンプン分析結果は対象がきわめて多種であり、管理・馴化・育成など栽培化過程とは別に自然状態で生育する植物も広範に利用されていたことを示している。世界的にみて農耕をもたない新石器文化である縄文文化であるが、円筒土器文化圏での植物質食料の利用は、農耕・非農耕=採集という大枠での単純図式ではなく、狩猟や漁撈との地域的な比重差、そして植物質食料にあってもその種類に応じた多様な働きかけがなされていたことを示している。近年の調査や自然科学分析の成果である。かつて採集としてくられた植物質食料の利用形態は、それによってより立体化されつつあるといえよう。(齋藤(岳))

(註1)「本州縄文人よりも、魚貝類や海獣類に強く依存する北海道縄文人に近いという結果」が得られている(青森県2017)。

第2項 漁撈

遺跡から出土する魚骨は漁撈を通じて遺跡内にもたらされた生活残滓であり、その内容を分析することで、当時の漁撈の実態を捉えることができる。北海道南部から東北地方北部にかけての円筒土器文化の遺跡では35遺跡から魚骨が出土しているが、その内容は遺跡毎に異なり、多様性に富む(表1)。各遺跡の出土魚骨の内容をみると漁撈対象とされた魚種は遺跡近くで獲得可能なものに重点がおかれているものの、沿岸から沖合にかけての表層から深場に至るまで、広範な海域に及び、河川・湖沼域まで含めた多様な領域において漁撈活動が展開されていたことがわかる。

本項では三内丸山遺跡で豊富な資料が得られている縄文時代前期後半(円筒下層式期)に焦点を当て、北海道・東北地方北部の同時期の出土魚骨から、円筒土器文化に占める三内丸山遺跡の漁撈の特徴を考察する。なお、漁撈とは活動の場において密接なかわりをもつ貝類採集についても本項で触れることとする。

1 三内丸山遺跡の漁撈

三内丸山遺跡は、出土動物遺存体の中でも特に魚骨の割合が高く、現在までに56分類群、52,411点が同定されている。第6鉄塔地区や北の谷では4・2・1mmメッシュによる水洗選別が実施されており、通常の発掘調査では見逃されることの多い微小な魚骨に至るまで大量に回収されている。各地点の出土魚類組成、層位(時期)別の変遷については、第4章第2節第3項に記載した。ここでは層位的なサンプリングによって、時期的なまとまりが担保され、かつ樋泉岳二による詳細な分析成果が公表されている前期中葉の第6鉄塔地区出土魚骨を対象を絞り、その特徴をまとめる。

(1) 出土魚骨の種構成

発掘資料(現地採集資料と4mmメッシュ水洗選別資料)、スタンダードコラム資料(2・1mmメッシュ水洗選別資料)からなり、現時点では44,813点が56分類群に同定されている。最小個体数と椎骨数が

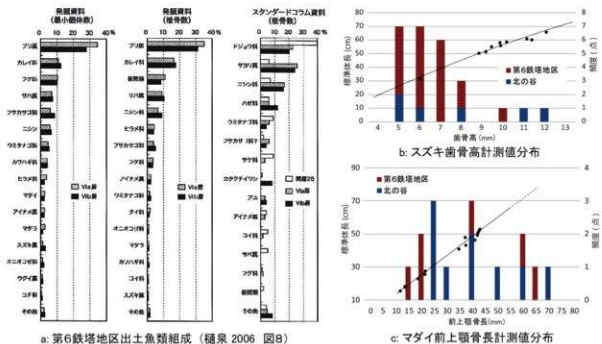


図5-90 三内丸山遺跡出土魚骨

ら算出した組成内容(図5-90a)をみると発掘資料ではブリ属を筆頭に、カレイ科、板鰓類(エイ・サメ類)、サバ属、ニシン、フグ科が多く、フサカサゴ科、ウミタナゴ科、ヒラメ科、マダイ、アイナメ属、カワハギ科、マダラ、スズキ、オニオコゼ科、ウグイ属なども普通でタコ・イカ・シヤコ類も多数出土している。

魚骨のサイズから体長を推定すると、スズキは25cm前後にピークがあり、小型のもの(セイゴ相当)が主体である(図5-90b)。また、マダイについては前上顎骨長から25~40cmが主体で70cmを超える大型の個体も少量含まれる(図5-90c)。10cm程度の小型魚から1m近くに達する大型魚まで様々なサイズの魚が混在しており、種数が多く、特定の種類へ大きく偏らないことが発掘資料の分析で得られた本遺跡出土魚骨の特徴であった(桶泉1998)。しかし、その後行われたスタンダードコラム資料の分析により、2・1mmメッシュ水洗選別資料からニシン科、ドジョウ科、サヨリ属が高い割合で検出されており、4mmメッシュ水洗選別資料は2・1mmメッシュと比べて魚骨の検出率が少ないことが判明している(桶泉2006)。そのため、第6鉄塔地区の魚骨全体としては、ニシン科、ドジョウ科、サヨリ属といった2・1mmメッシュで多く検出された小型魚類の割合が高くなることも想定される。

(2) 漁場環境

出土魚骨で確認された魚類の生息環境をみると、出現種数としては、海産魚が大半を占めており、特に回遊魚類と外海から内湾まで広く分布する沿岸浅海性魚類が大多数を占める。回遊魚類は外海より群をなして陸奥湾内へと来遊するもので、ブリ属、サバ属、サヨリ属、ニシン、マイワシをはじめ、カタクチイワシ、カマス属、シイラ属、ソウダガツオ属など多彩な魚種が含まれる。これらのうち、サヨリ属、マイワシ、カタクチイワシなどは比較的内湾性・沿岸性が強く、沿岸浅瀬まで来遊するがブリ属、カマス属、シイラ属、ソウダガツオ属などは岸近くまで寄りつくことは少ない。これらの漁場は主に陸奥湾の沿岸深場から沖寄りにあったと推測される。なお、ニシンは春に産卵群が海岸浅瀬へと接岸する。

沿岸浅海性の魚種としては、砂泥~砂礫性の底魚類(ヒラメ、カレイ科、ガンギエイ属、コチ科、ササウシノシタ亜目など)が目立つほか、砂底~砂礫場に多いマダイ、岩礁~藻場周辺に多いウミタナゴ科、岩礁域に多いフサカサゴ科、アイナメ属などが多くみられる。これに対し、低塩分水域を好む典型的な内湾性種(クロダイ属、スズキ、ボラ科など)は少ない。

淡水性種ではドジョウ科、フナ、ウグイ属、アユ、ハゼ科の一部、瀬河性種としては、サケ属がある。ドジョウ科はスタンダードコラム資料から大量に検出されているが、サケ属については遺跡近くの沖館川に遡上していたことが推測されるものの出土量は少ない。

以上のことから、三内丸山遺跡では、遺跡周囲の河川・湿地等の淡水域、陸奥湾沿岸の砂底域、藻場、岩礁域から沖合に至る多様な領域が漁場として利用されていたことが推測される。

(3) 漁撈技術

前述した通り、広範な漁場を擁し、その中で対象魚の特性にあわせた複雑な漁撈技術体系が保持されていたことが予想される。第6鉄塔地区や北の谷では、釣針や鈎頭等の骨角製の漁具が出土しており、前者はそのサイズからサメ類やブリ属(アオ・ブリ相当)、カツオ、スズキ、マダイ、マダラ、ヒ

ラム、フサカサゴ科等が対象となった可能性が推測されている。また、後者は、サメ類やヒラメ、カレイ科、ガンギエイ属などの底魚類、フサカサゴ科、アイナメ属などの磯魚を対象とした刺突漁に使用された可能性も考えられる。出土魚類の大半を占める小型魚については、出土量も多く、網などを使用した集中的な漁法の存在が予想される。直接的な資料が得にくい状況ではあるが、対象魚の生態・習性に応じた様々な工夫をこらした網や罟の使用が想定されるところである。

(4) 漁撈の季節性

出土魚類の中で、漁季が比較的限定できるものとして冬のマダラ（太田原・川口2002）、春のニシン、春～夏のマダイ（成魚）、夏～秋のブリ属（フクラギ相当）がある。これらが同一地点の捨て場で連続した堆積の中に検出されるという事実から、季節毎に対象を変えつつ周年に渡って漁が行われていた様子が浮かび上がる。魚種毎にみた出土量と漁季の関係から季節性を考えると、全体としては春～秋に漁獲される種が圧倒的に多いため、漁の大半はこの時期に行われていたと推測される。

2 東道ノ上(3) 遺跡(青森県東北町)の漁撈

東道ノ上(3) 遺跡は小川原湖南西部、砂土路川に面した河岸段丘上に立地する縄文時代前期中葉（円筒下層 a 式期）の集落跡で北側の斜面地に形成された捨て場からは大量の魚骨が出土した（青森県教育委員会2006）。

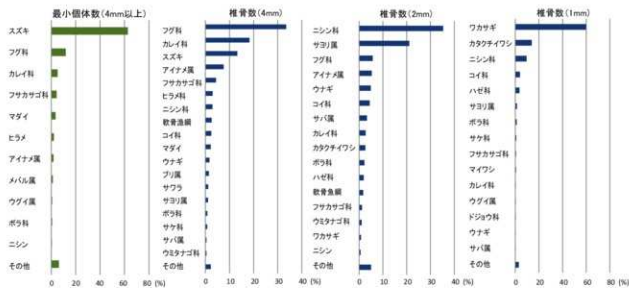
(1) 出土魚骨の種構成

出土魚骨は38分類群、8,337点が同定されている。捨て場で検出された貝層を対象に5・4・2・1mmメッシュによる水洗選別が実施されており、4mmメッシュ以上は、全量選別しているが、2・1mmメッシュは、それぞれ全体量の約35%の選別率に留まっている。メッシュサイズ毎に椎骨数から算出した組成内容（図5-91）をみると、4mmメッシュではフグ科を筆頭に、カレイ科、ズキが多く、アイナメ属、フサカサゴ科、マダイなども普通である。2mmメッシュではニシン科が最も多く、サヨリ属、フグ科、アイナメ属、ウナギ、コイ科、サバ属、カレイ科が続く。1mmメッシュはワカサギが全体の4割以上を占め、圧倒的に多く、カタクチイワシ、ニシン科がこれに次ぐ。なお、碎片の状態で出土し、数量の評価が困難なものであるが、サケ属の椎骨片が比較的多くみられ、同種が積極的に漁獲・利用されていた様子がうかがえる。

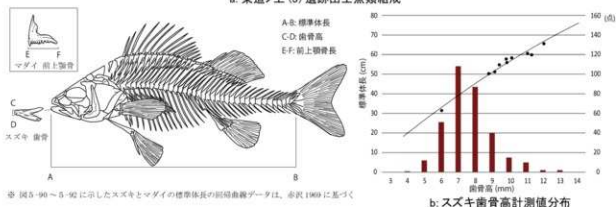
魚骨のサイズから体長を推定すると、10cm程度の小型魚から1m近くに達する大型魚まで様々なサイズの魚が混在している。種レベルでみると最小個体数では、ズキが多いという特徴があるが、それでも椎骨数も含めた同定破片数では2割に満たない。種数が多く、量的にも特定の種類へ大きく偏らない点においては三内丸山遺跡と共通した特徴を備えている。

(2) 漁場環境

出土魚類の生息環境と出現種数の関係を見ると、海産魚が大半を占めており、内湾性種と沿岸浅海性魚類が多い。外洋性回遊魚には、サワラ属、サヨリ属、ブリ属、ニシン、マイワシ、カタクチイワシ、サバ属、カツオなどがみられ、ニシン科（ニシンまたはマイワシ）とサヨリ属が多い。ブリ属は、イナダ・フクラギ相当が大半を占め、アオ・ブリ相当はほとんど確認されていない。



a: 東道ノ上(3) 遺跡出土魚類組成



※ 図5-90～5-92に示したスズキとマダイの標準体長の回帰曲線データは、奈良1989に基づく

図5-91 東道ノ上(3) 遺跡出土魚骨

沿岸浅海性の魚種としては、砂泥～砂礫性の底魚類（ヒラメ、カレイ科）、砂底～砂礫場に多いマダイ、砂泥底～岩礁域に多いフグ科、岩礁域に多いフサカサゴ科、アイナメ属などがみられる。

内湾性種には、スズキ、ボラ科、クロダイがみられるが、この中ではスズキが突出して多い。淡水～汽水性種にはウグイ属、ドジョウ科、ワカサギ、ハゼ科の一部が、遡河性種にはサケ属がみられる。ワカサギとドジョウ科は1mmメッシュから微小な椎骨が大量に検出されているが、これらについては両種を捕食した肉食性魚類の胃内容物に由来したものと考える可能性もある。

遺跡が立地する砂土路川周辺の古地形については、未解明な点が多く残されているが出土魚類の内容から、当時の小川原湖は内湾的な環境にあったとみられる。基本的には、河川・湿地等の淡水域、内湾沿岸部の砂底域、藻場、岩礁域から沖合に至る多様な領域が漁場として利用されていたと考えられる。

(3) 漁撈技術

出土した漁撈具には釣針や鉤頭がみられ、漁網錘の可能性のある礫石器も出土している。釣針は、長さ8cm以上の大型品が主体であり、大型魚（マダイ、サメ類、カツオ、ブリ属）を対象としたものと考えられる。鉤頭は長さ4～6cm程度の小型品が多く、大型魚や底生魚を対象とした刺突漁に用いられた可能性がある。また、ニシン、マイワシ、コノシロ、サバ属などの小型魚は網が使用され、ド

ジョウ科やワカサギ、小型のコイ科は手網などによって掬い捕られた可能性も考えられる。

(4) 漁撈の季節性

スズキの歯骨高は平均値が7.1mmで、赤沢威(1969)の計算式に基づく推定体長では23.2~68.9cmの範囲内に収まる(図5-91)。中でも体長35~45cm程度が最も多く全体の約6割が中型魚のサイズを占める。スズキの成魚は6~8月にかけて内湾沿岸域に生息、9月頃から沖合に移動し、11~3月に産卵する。産卵は沖合の水深50~100m位の深場で行われ、孵化した稚魚は次第に沖合から湾奥へと移動する。5月頃には体長5cm程の稚魚が河川に遡る姿をみせるが、本遺跡では稚魚に相当するサイズはみられない。このため、内湾沿岸域に生息する成魚を漁撈の対象とし、季節的には春から夏にかけて漁獲していたと推測される。また、冬場の漁撈を示すマダラは本遺跡で出土しておらず、冬季の生業はシカ・イノシシなどを対象とする狩猟に重きが置かれていたと考えられる。

3 虎杖浜2遺跡(北海道白老町)の漁撈

虎杖浜2遺跡は白老町の西端部、標高約50mの段丘上に所在する縄文時代前期中葉(円筒下層a式期)の貝塚を伴う集落跡である。貝塚の調査では2mmメッシュ篩を使用して水洗選別が行われており、出土魚骨の内容が明らかにされている((財)北海道埋蔵文化財センター2002)。

(1) 出土魚骨の種構成

出土魚骨は31分類群、2,204点が同定されている。最小個体数から算出した組成内容を見ると、イワシ類が最も多く全体量の約32%を占める(図5-92a)。これを筆頭にブリ、ニシンが続き、ウグイ属、マダイ、ヒラメ、アイナメ属、カレイ類、フサカサゴ科なども普通である。ブリについては、5mmメッシュ以上の水洗選別で最も出土点数が多く、全体量に占める割合としては3割弱程度である。本遺跡では、最も重要な魚種であったとみられる。

対象魚のサイズとしては、10cm程度の小型魚から1m近くに達する大型魚まで様々な内容が含まれる。三内丸山遺跡や東道ノ上(3)遺跡と比べると種数においては若干下回るが、それでも30種以上

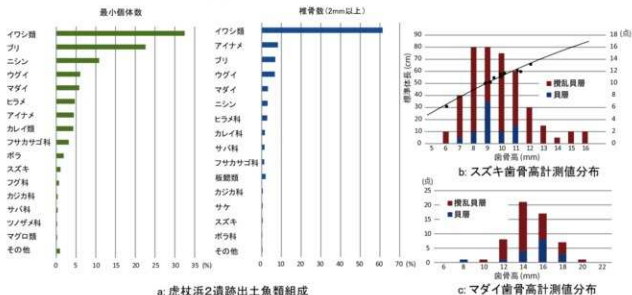


図5-92 虎杖浜2遺跡出土魚骨

出土しており、特定種への著しい偏りもみられない。

(2) 漁場環境

出土魚骨は海産魚が大半を占め、中でも外洋性回遊魚が多く、外海に面した立地環境に総合的である。ブリ属、ニシン、マイワシ、カタクチイワシ、サバ属、カツオなどがみられ、個体数では、イワシ類（マイワシまたはカタクチイワシ）とブリ属が多い。ブリ属は、イナダ・フクラギ相当の小型の部類がほとんどみられず、大半がアオ・ブリ相当である。

沿岸浅海性の魚種としては、砂泥～砂礫性の底魚類（ヒラメ、カレイ科）、砂底～砂礫場に多いマダイ、砂泥底～岩礁域に多いフグ科、岩礁域に多いフサカサゴ科、アイナメ属などがみられる。マダイについては、サイズが大型化しており、体長50～60cmになるような個体が最も多く、体長20cm程度の小型のものはほとんどみられない（図5-92c）。

内湾性種には、スズキ、ボラ科がみられるが、相対的には後者が多い。スズキは体長50cm前後（フッコ相当）が最も多く、稚魚は含まれない（図5-92b）。淡水～汽水性種としてはウグイ属がみられるのみであるが、サイズが大きいため、大半が降海型のマルタとみられる。

なお、三内丸山遺跡や東道ノ上(3)遺跡の1mmメッシュから多く検出されたドジョウ科やハゼ科、ワカサギといった小型魚については、2mmメッシュ未満の魚骨に関するデータが未公表のため、現時点では評価が難しい。

(3) 漁撈技術

釣針は、単式と結合式の両タイプがみられるが、水洗選別による悉皆的な確認を通してわずか4点の検出に留まっている。単式釣針は幅約31mmで、三内丸山遺跡で出土している釣針（幅9～15mm程度）よりも大型である。ここでの釣魚の対象は主にブリ（アオ・ブリ相当）、サメ類、マダイ、カツオなどの大型魚であったと推測される。

銆頭は比較的多く、30点以上確認されており、メジロザメ科やホシザメ、アカエイ科などの大型のサメ・エイ類の中には、銆魚の対象となったものが含まれている可能性がある。また、アイナメ属やフサカサゴ科についても、ヤスを用いた見突き漁で獲られていた可能性があるが、A地点貝塚では、海棲哺乳類（アシカ・トド・オットセイ）の出土も多く、銆頭の使用は海獣類を主体とするものであった可能性が高い。

出土魚骨で最多であった、群集性の回遊魚であるイワシ類やニシン、小型のブリについては、集中的な網の利用がなされたと考えられる。遺跡からは、剥片石器よりも礫石器が多く出土しており、網の利用を示す石錘も約200点（出土石器全体の5%程度の割合）出土している。

(4) 漁撈の季節性

貝塚の下位からブリの頭部が密集している箇所が確認されており、出土したブリの半数がこの地点から出土している。各部位のサイズから、ブリの体長は1m前後と推測されており、椎骨が並んで出土する様子もみられる。一時期にまとめて解体した様子がうかがえ、暖流の影響が最も強まる時期（夏～秋）に、近海を回遊する群集をねらって大量に捕獲したと考えられる。スズキは大半が歯骨高5

～16mm、体長40～60cmのサイズであり、未成魚は含まれない。東道ノ上(3)遺跡と同様に春から夏にかけて成魚を対象とした漁がおこなわれていたと考えられる。また、ニシン・イワシ類については、春から夏頃、産卵に伴い成熟魚が岸に寄る時期に漁の最盛期があったと推測する。

4 貝類採集

円筒土器文化の遺跡では、37遺跡から貝類の出土が報告されている。これらのうち、貝塚の形成がみられる遺跡では主体貝がある程度定まっており、ハマグリ、アサリ、シジミ属、イガイのいずれかとなることが多い。

三内丸山遺跡では第6鉄塔地区と北の谷から腹足綱9種、二枚貝綱9種が同定されているが、魚骨と比べると出土量は少ない。産状としては、焼けて細片化したものや淡水性種の殻皮が多く、埋没後の経年変化の中で溶解消失しているものが相当量見込まれる。出土貝類で最も多く出土しているはシジミ属で、イガイ類もやや多い。アワビ類、カワニナ、ツメタガイ、アカニシ、マガキも普通である。これらの生息環境は、淡水（カワニナ、マツカサガイ、カワシシジメガイ）、淡水または汽水（シジミ属）、内湾砂泥底干潟（アカニシ、ツメタガイ）、岩礁（イガイ類、アワビ類）であり、漁撈と同様、貝類採集においても淡水域から陸奥湾に至る多様な水域環境が広く利用されていた様子がうかがえる（極泉2006）。

5 まとめ

円筒土器文化の漁撈について、出土魚骨資料から推測される内容を中心に述べてきた。冒頭で指摘したように、同じ円筒土器文化に属している遺跡であっても、漁撈の対象となった魚種の組み合わせは、時期や地域によって異なり、一様ではない。八戸市熊ノ林遺跡や階上町白塚遺跡、普代村力持遺跡にみられるマグロやカツオの出土は、三陸地方北部のみにみられる局所的な特徴であり、三陸地方南部の大木式土器文化を含めた地域的な広がりの中に位置付けられる（松崎2017）。また、青森市三内丸山遺跡やむつ市女館貝塚、風間浦村沢ノ黒遺跡には、マダラの出土が報告されており、冬季に活発な漁が行われていたことが推測されているが、現時点で同種の出土は陸奥湾沿岸と下北半島に偏っており、基本的には遺跡の地理的環境にあわせた魚種選択の適応が強く反映された内容となっている。

これらのことに関しては、本項で取り上げた3遺跡の定量分析データを見ると、それぞれの集落で漁獲された魚種毎の量的な差違がより具体的に理解できる。三内丸山遺跡はブリやカレイ類、ホシザメが多く出土しているのに対し、東道ノ上(3)遺跡はスズキやフグ類、カレイ類が多い。虎杖浜2遺跡もブリが多いという点では三内丸山遺跡と共通する部分のみみられるが、サメ類やサハ属の出土は少なく、淡水魚がほとんど含まれないことにおいては対照的である。また、主体をなすブリのサイズに注目すると、三内丸山遺跡はフクラギ相当の小型サイズが大半を占めるのに対し、虎杖浜2遺跡はブリ相当の大型サイズが目立つ。サイズと出土漁具の内容をふまえれば、前者は網漁、後者は釣漁で主に捕られたと推測され、対象にあわせた適切な漁法を判断し、選択していたことがわかる。また、漁撈の季節性に関しては、冬期にも積極的に漁が行われていた遺跡がある一方で、春～秋に漁獲される種で完結する遺跡も存在する。各遺跡で、漁撈に投下する労働力の季節的な比重は異なり、それぞれの資源環境に即した生業スケジュールの編成がなされていたと考えられる。

季節的な回遊行動をとる種に対しては、網を使用した大量捕獲が行われ、常性種については多種類を漁獲し、特定種に偏らない。また、漁獲された魚種の生息域と各遺跡の立地環境を比較すると、至近距離にあって接近しやすい漁場から多くの資源が獲得されているが、それのみで完結することは稀で、広範囲に様々な条件の漁場を組み合わせて利用が図られていた様子がみられる。漁撈技術の構成は集落を取り巻く漁場環境の特性の影響を強く受けながら、空間的な広がりの中で対象種の生態や季節的な資源量の変動に即した漁法を確立し、適用させていった姿が浮かび上がる。

現時点では、中期前半（円筒上層式）の定量分析データが少なく、円筒土器文化全時期にわたっての通時的な検討が不十分であるが、同文化の漁撈は基本的に多様な漁場環境の下で対象魚の生態に関する確かな理解に基づき、適材適所の漁法を選択しながら巧みに漁を行うものであったといえる。

(斉藤(農))

表1 円筒土器文化の出土魚類・貝類

※三内丸山遺跡は第4章第2節第3項参照

遺跡名	地域	所在地	時期	魚類	貝類	文献
中ノ平遺跡	青森	野々浜町	前期中葉(円筒下層式)	♀鯛・♀鮎・♀サマシロイ・♀アサギ	種不明	金子1975
オセドウ遺跡	青森	五所川原市	前期中葉(円筒下層式)	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	吉田・直良1942、市道村教育委員会1992
深堀田遺跡	青森	中泊町	前期中葉(円筒下層式)	種不明	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	成田漁1965
田中野貝塚	青森	つがる市	前期中葉(円筒下層式)	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	西本・橋本・小林1996
牛島(1)遺跡	青森	つがる市	前期中葉(円筒下層式)	種不明	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	福田2012
石神遺跡	青森	つがる市	前期中葉(円筒下層式)	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	パリノ・サーヴェイ株式会社2015
浮根貝塚	青森	野々浜町	前期中葉(円筒下層式)	♀鯛	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	村越1968
宮平遺跡	青森	深浦町	前期中葉(円筒下層式)	♀鯛	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	福田2012
沢ノ黒遺跡	青森	風間浦村	前期中葉(円筒下層式)	♀鯛・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	澤田2007、青森2007
女組貝塚	青森	むつ市	前期中葉(円筒下層式)	♀鯛	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	江坂1953、1963
湯田遺跡	青森	むつ市	前期後半(円筒下層式)	♀鯛	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	青森県教育委員会2012
万人堂貝塚	青森	むつ市	前期中葉(円筒下層式)	♀鯛	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	植1967
迫(1)遺跡	青森	六ヶ所村	前期中葉(円筒上層式)	♀鯛	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	パリノ・サーヴェイ株式会社2015
中志(1)貝塚	青森	六ヶ所村	前期中葉(円筒上層式)	♀鯛	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	二本柳-渡辺1959
金真平貝塚	青森	三沢市	前期中葉(円筒下層式)	♀鯛	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	二本-渡辺1959
砂ヶ森(2)貝塚	青森	三沢市	前期中葉(円筒下層式)	♀鯛	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	八戸市博物館1988
東道ノ上(3)遺跡	青森	東志町	前期中葉(円筒下層式)	♀鯛・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	青森2006、黒住・黒澤2006
古賀敷貝塚遺跡	青森	東志町	前期後半(円筒上層式)	♀鯛	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	金子1983
二ツ森貝塚	青森	七戸町	前期中葉・中期後半(円筒下層式・複層式)主層式	♀鯛・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ・♀サマシロイ	小林1992

第3項 狩猟

三内丸山遺跡の出土遺物には全時期を通して石鏃や石槍などの狩猟具がみられ、集落に付随する前期後半の捨て場からは鳥類や哺乳類の動物遺存体が大量に出土している。円筒土器文化に限らず狩猟は縄文文化の生業の柱であるが、これらの資料の存在から、三内丸山遺跡に暮らした人々の食料獲得手段に狩猟が組み込まれていたことがわかる。さらに第6鉄塔地区や北の谷から出土した鳥類・哺乳類骨の分析では、様々な動物種が確認され、多種類の動物が狩猟対象とされていたことが明らかである。当然、これらの捕獲にあたっては、それぞれの種の生態を正確に把握し、対象種に応じた狩猟技術が体系的に保持されていたはずである。そこで、本項では、円筒土器文化の出土遺物の内容を確認し、遺跡間の特徴・差違を比較しながら三内丸山遺跡の狩猟的特質にせまる。まず、三内丸山遺跡が属する円筒土器文化の人々が多く利用した狩猟対象動物はどのようなもので、海獣・陸獣・鳥類のうち、どの種に重きが置かれたものであったか。また、それは北海道から東北地方北部に広がる円筒土器文化圏の中で地域によりどの程度変異があるのか。動物遺存体と狩猟具の内容からその特徴を概観する。

1 哺乳類狩猟

動物遺存体が出土するのは、貝塚や低湿地等の有機質遺物の保存に適した場所に限られ、円筒土器文化の遺跡全体からすればごくわずかにすぎない。現在のところ、円筒土器文化の遺跡で獣骨の出土が報告されているのは35遺跡あり、前期後半（円筒下層式期）に集中している（表1）。この時期の出土獣骨を同定破片数（NISP）に基づき、地理的勾配に従って種組成を並べたものが図5-93である。これをみると、地域毎にある程度共通した特徴をみせながら遷移しており、おおそ北海道南部では海獣主体、東北地方北部日本海側は小型陸獣（ノウサギ・ムササビ）主体、東北地方北部太平洋側は中型陸獣（シカ・イノシシ）主体となる傾向がうかがえる。

津軽海峡は、生物相の境界（ブラキストン線）に相当し、棲息する動物相の差から本州と北海道では出土獣骨の内容が異なる。特に、本州側でシカと並んで多量に出土するイノシシが北海道には自然分布しておらず、縄文後晩期に石狩低地帯や胆振地方などで焼骨の報告例が散見されるものの、基本的にイノシシの出土はみられない。白老町虎杖浜2遺跡で前期中葉（円筒下層a式期）の盛土から出土したイノシシの焼骨は円筒土器文化期の数少ない事例で、本州側からもち込まれた個体が儀礼に供されたものとされている（高橋2001）。北海道最古のイノシシ出土事例であり、家畜化の観点からも注目される。

円筒下層式期における北海道の出土陸獣の中心はエゾシカで、特に白老町虎杖浜2遺跡は、出土した獣骨の半数以上が同種で占められている。円筒下層式系の植苗式期の貝塚が検出されている苫小牧市静川22遺跡も、地点によって比率に多少の差があるが、同定された哺乳類の9割以上がエゾシカである（金子2002）。この他、伊達市北黄金貝塚（西本1984・2013）や八雲町コタン温泉遺跡（西本・新美1992）も、陸獣骨の中ではエゾシカが最も多く確認されている。

アシカやオットセイなどの鯨脚類は、内浦湾周辺の遺跡で特に出土量が多いが、これは回遊や越冬にともなう群れが太平洋側に多く現れるためと考えられる。虎杖浜2遺跡は、陸獣のエゾシカが最多であるが、出土獣骨全体からみると海獣の割合が比較的高く、特にアシカが多い（土肥2002）。コタン

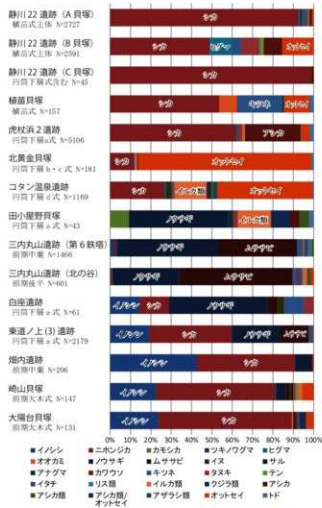


図 5-93 北海道・東北地方北部の縄文時代前中期における出土哺乳類組成 (NISP)

も前期中業の住居内貝層から出土した獣骨の主体は小型のノウサギで、中型陸獣としてカモシカがみられるものの、シカ・イノシシは1点も出土していない(西本・樋泉・小林1995)。また、ここではアシカやトド等の鯨類も出土しているが、個体数は少なく、出土人骨の同位体分析からも積極的な海獣狩猟を裏付けるデータは得られていない(米田2016)。

一方、青森県東部、太平洋側の遺跡においては、出土獣骨に占める中型陸獣の割合が高い。小川原湖の南西に位置する東北町東道ノ上(3)遺跡は、シカが最多で、ノウサギがこれに次ぎ、イノシシ、ムササビがこれに続く。中型陸獣の割合は、シカ約4割、イノシシ約2割で、全体の約6割が中型陸獣で占められる。歯牙の萌出・交換と磨滅度の鑑定により、イノシシは幼・若齢個体の占める割合が高く、猟期は冬が中心であったと推測される(斉藤2007)。

八戸市畑内遺跡は、シカとイノシシの割合が更に高く、それぞれ出土獣骨の5割と3割を占める(小林1997)。調査時に篩を使用した悉皆選別がなされていないため、小型陸獣の割合が低く見積もられている可能性があるが、イノシシの比率が高い点など、日本海側の遺跡とは対照的なあり方を示す。大木式土器文化の宮古市崎山貝塚(高橋・三浦1995)や陸前高田市大陽台貝塚(牛沢1979)は、いずれもシカとイノシシをあわせた中型陸獣の割合が8割程度で、畑内遺跡のあり方は、青森県西部の円筒土器文化の遺跡よりも、むしろ三陸沿岸の大木式土器文化の遺跡に近いといえる。

温泉遺跡も海獣の割合は高く、オットセイが約47%と半数近くを占める。また、北黄金貝塚もオットセイが最多で、その比率は全体の8割以上に達する。内浦湾周辺では冬から春にかけてオットセイの回遊がみられ、近世アイヌのオットセイ猟は11月下旬から5月中旬頃に行われていた(犬飼・森1956)。特に雌と幼若獣は冬に集中して現れ、上記遺跡から出土したオットセイも幼獣と若獣が多いことが確認されている。そのため、当時の猟期も冬が中心であったと推測される(金子・西本1985)。

東北地方北部の出土獣骨は前述した通り、日本海側と太平洋側で特徴が異なる。前期後半の獣骨組成をみると、青森県西部、陸奥湾沿岸から日本海側の地域にかけては中型陸獣(シカ・イノシシ)の出土が少ない。三内丸山遺跡は小型陸獣(ノウサギ・ムササビ)主体の特徴をみせる遺跡の代表例で、全体に占める中型陸獣の比率がわずか2%であるのに対し、小型陸獣の比率は88%に達し、後者の割合が圧倒的に高い。つがる市田小屋野貝塚

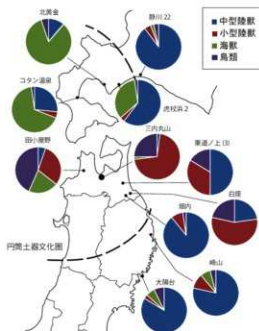


図 5-94 出土鳥獣骨の割合

2 鳥類狩猟

鳥骨は小型の資料が多いため、調査時に篩を使用していない遺跡では、サンプリングエラーの影響が懸念される。但し、三内丸山遺跡や東道ノ上(3)遺跡のように悉皆的に土壌水洗選別が行われた遺跡においてもその割合は哺乳類の3分の1に満たないため、狩猟に占める鳥類の比重は哺乳類より低いものであったとみられる(図5-94)。

円筒土器文化の遺跡で鳥骨の出土が報告されている遺跡は26遺跡あり、数量の記載から組成の判明しているものは図5-95に示した通りである。三内丸山遺跡の出土鳥骨は、カモ類が全体の約8割を占め、ウ類、キジ類、カイツブリ類がこれに次ぐ。ワシ・タカ類やフクロウ類などの猛禽類、ツグミ類やハト類などの小型鳥類もみられるが、その量はわずかであった。東道ノ上(3)遺跡も主体はカモ類で約4割を占めるが、キジ類の割合も約3割と比較的高い。次いでハト類がやや多く、ハクチョウ類やツル類、ワシ・タカ類等の大型の渡り鳥、カラス類等は少ない。田小屋野貝塚は、アホウドリ類やウミガラス類の割合が高く、繁殖地で集中的な集積が行われた可能性がある。アホウドリは肉量も多く、骨は刺突具など骨角器の素材に利用されることが多い。また、良質な羽毛をもつため、それらの利用もなされていたと考えられる。

苫小牧市植苗貝塚(金子1976)、柳館貝塚(金子1976)、静川22遺跡、八雲町コタン温泉遺跡など、北海道の遺跡でもカモ類が主体をなすところが多い。北海道はキジが生息していないため、ガンカモ類を除くと、ワシ・タカ類、アホウドリ類、ウ類などがこれに次ぎ、相対的に東北地方北部でキジ類



図 5-95 北海道・東北地方北部の縄文時代前中期における出土鳥類組成 (NISP)

に次いで多く出土する種群が上位に入る。円筒土器文化全体としては、湖沼・海・河川域に集まる水鳥類が多く出土する傾向があるが、人里に現れる種も一定量みられ、多様な環境下で鳥類狩猟が行われていた様子がうかがえる。



二ツ森貝塚出土
(七戸町教育委員会 提供)

図5-96 石鏃の貫入したシカ上腕骨

3 狩猟具

円筒土器文化の遺跡に確認される狩猟具に

は、石鏃・石槍などの石器、銛頭やヤスなどの骨角器がみられ、弓矢のほか、槍や銛、ヤスを用いた刺突猟が行われていたと考えられる。貝塚や低湿地遺跡から出土した獣骨組成と石器や骨角器の器種の相関をみると、オットセイなどの鰭脚類が大量に出土する北海道南部は銛頭の出土が多く、海獣狩猟の主要な道具であったと推測される。この他、三内丸山遺跡第6鉄塔地区や北の谷からは、ヘラ状木製品(第3章第8節図3-36)が多量に出土している。これまで用途不明としてきたものであるが、これらの中にはアイヌの箆矢(ペラアイ)と類似するものもあり、鳥罟や川漁に用いられた可能性も考えられる。

図5-96は、二ツ森貝塚から出土したニホンジカの左上腕骨で、近位端(上腕骨頭・大結節間)に石鏃が貫入している(註1)。先端部が骨体に刺さり折れ残った状態であり、レンズ状の折断面を貫入部から観察することができる。割れ口部分に骨増殖がみられないことから、射込まれた後、逃げ延びることなく捕殺された可能性が高い。入射方向については、頭を上げた立位状態で、対象獣の右前方、やや上位側から射込まれたと推測される。狩猟具の貫入した動物遺存体は狩猟の実態を示す好資料となるが、円筒土器文化の事例は乏しく、探索が必要である(熊谷2001)。

4 猟犬

七戸町二ツ森貝塚では、フラスコ状土坑内からイヌの全身骨格が出土しており、埋葬されたものと考えられている(小林1994)。同様の事例は、三種町萱刈沢貝塚にも確認されており、ここでは、二体の人骨の間に挟まれる形で二匹のイヌの全身骨格が検出されている(金子1979、堀越1977)。全身骨格が揃った状態で出土するのは死後に食料として利用されなかったからにはかならず、人が埋葬された遺構と一緒に葬られていたという事実からは、両者の関係の近さをうかがわせる。

円筒土器文化の遺跡でイヌの遺存体が出土している遺跡は11例にのぼる。上記2例を除けばいずれも散乱状態で出土したものであるが、解体痕に関する記載はなく、飼育されていた猟犬の可能性がある。ただし、同時期の東北地方南部や関東地方と比べるとその事例は少ない。警戒心の強い犬と猟師が組になって行ういわゆる「吠留め型」の狩猟は、主にイノシシを対象とする場合が多いと推測されるが、後述する中型陸獣の資源量の問題もあって、低調であったことを示しているのかもしれない(小宮2002、長谷川1998)。

5 三内丸山遺跡の狩猟

従来、本州の縄文貝塚では、中型陸獣（シカ・イノシシ）が多く出土することが指摘されていたが、水洗選別が徹底して行われるようになったことなどを背景に、近年は小型陸獣が中型陸獣を上回る遺跡も増えてきた（伊藤1999、西本2012）。しかし、全国的には水洗選別を実施してもシカ・イノシシが出土哺乳類の半数以上を占める遺跡は依然として多く、食料としての肉量の多さや利用価値の高い骨素材が多く得られるシカ・イノシシの重要性は明らかである（新美2010）。三内丸山遺跡で多く出土した小型陸獣は、出土点数こそ多いものの、肉量は少なく、特にムササビは食料より毛皮利用の観点から評価していく必要がある。

円筒土器文化の出土動物遺存体の地域的な傾向として、北海道の太平洋沿岸部においては、海獣狩猟に重きが置かれ、本州とは異なる地域的特徴が確認された。このことは、出土人骨の同位体分析でも同様の傾向が確認されており、北海道南部の北黄金貝塚では海獣類が積極的に食料として利用されていたことと整合する（南川2001）。三内丸山遺跡では北の谷から出土した人骨2点の同位体分析が実施されており、いずれも陸上の動植物資源が主たる食料であったことが指摘されている（南川2015）。こうした内容をふまえると、三内丸山遺跡では北海道の円筒土器文化とは明確に異なる食習慣、狩猟体系が保持されていたといえる。

狩猟の年間周期は獲物の毛皮と肉質が良好で木々が落葉し、見通しの良くなる晩秋から初春までというのが、マタギやアイヌの狩猟行動から推測される内容である。東道ノ上(3)遺跡出土イノシシの死亡季節が冬に集中していたのは、こうした推定を裏付けるもので、東北地方北部太平洋側においては、晩秋から初春を陸獣狩猟の主たる気期とするのが妥当であろう。一方、三内丸山遺跡を含め、東北地方北部日本海側は、冬季の積雪量が太平洋側と比べて著しく多く、時に1mを超える積雪は狩猟活動の大きな妨げとなったはずである。そのため、冬季の積雪が少ない太平洋側とは異なる状況を想定する必要がある。

現在、青森県にはシカ・イノシシのいずれについても自然分布がみられない。その要因として当地の積雪深があげられる。イノシシは一冬あたり30cm以上、積雪日数が70日を超える地域で、また、シカについては、積雪深50cm以上の多雪地域では身動きがとれず、分布が制限される。更に人間による狩猟圧が加わることで地域的に大幅な個体数の減少が誘引されるとの指摘もある（阿部2005、高槻2006）。

現在の三内丸山遺跡周辺は年間最大積雪深が1mに達する豪雪地であり、当時も相応の環境下にあったのだとすれば、青森平野周辺では中型陸獣資源が脆弱であった可能性が考えられる。更に拠点集落の成立・発展に伴い、狩猟圧の高まりが生じたことで、それらの資源が不安定な状態に陥ったことも考えられる。生業に占める中型陸獣狩猟の割合を低減させ、渡り鳥猟やマダラ漁へ冬季の労働力を転換することで、持続的な資源利用を実現し、北海道南部、東北地方北部太平洋側のいずれとも異なる独自の生業体系が確立、組織されていたと推測する。（齊藤（慶））

（註1）図5-96の資料について、青森県史（青森県2017）では「イノシシの骨」と記述されているが、筆者の実見により「シカの上腕骨」として報告するものである。

